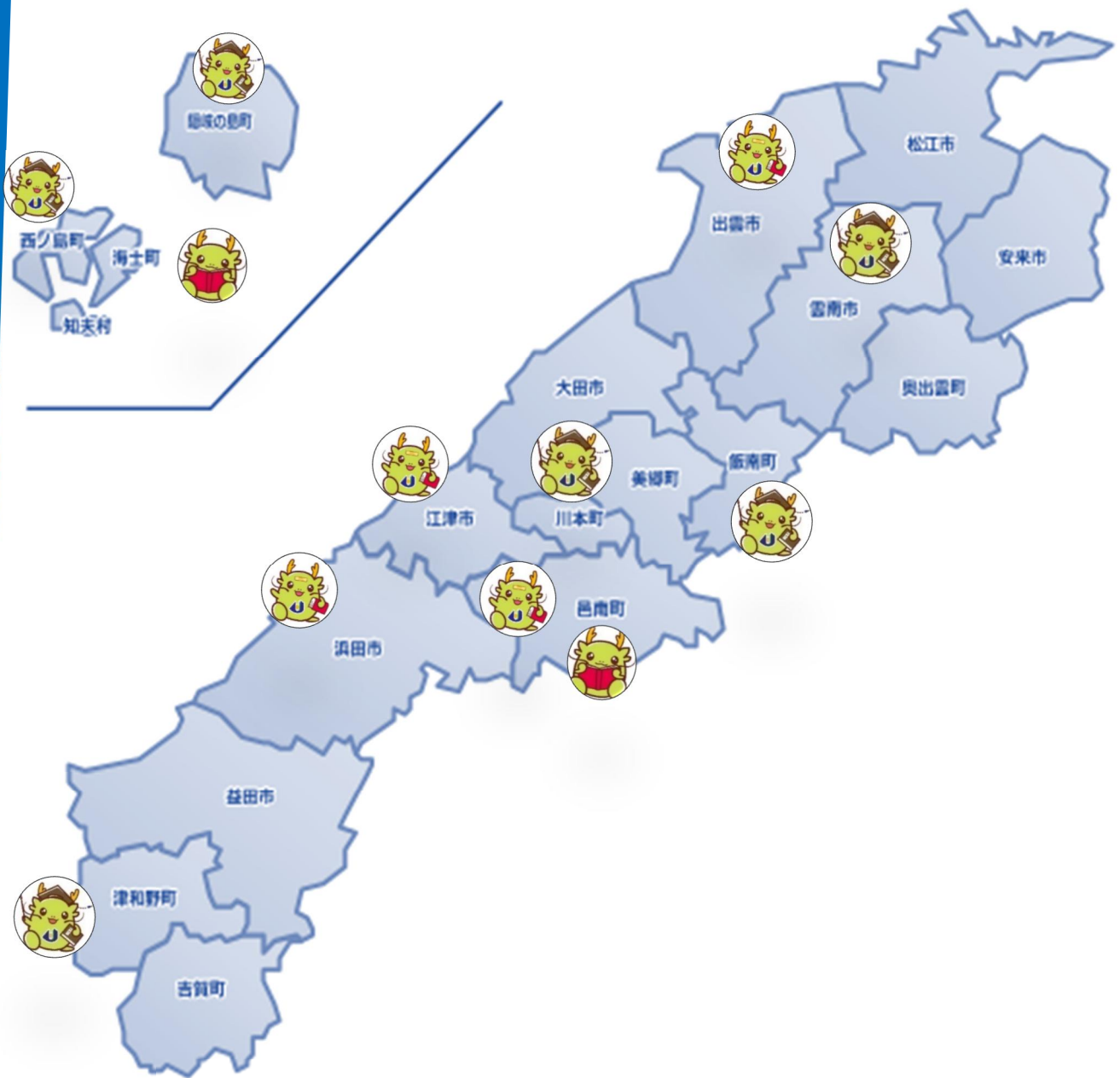


令和5年度

「島根の地域医療」

フィールド学習報告書



島根県立大学 看護栄養学部

ごあいさつ

島根県立大学出雲キャンパス 学部長 大森眞澄

コロナ感染症によるソーシャル・ディスタンスの要請は、フィジカル・ディスタンスのみならず、心理的距離ももたらしたように思います。

島根県立大学看護栄養学部で取り組む「島根の地域医療」の科目も、看護学科と健康栄養学科の学生の共同作業や地域のフィールドとの相互交流に制限が加わりました。思うように学べないリモート等での学習は、学生・教職員共に、我慢の連続でした。しかしながら、コロナ感染症からも学ぶことは多くあり、コミュニティの繋がりや予防の観点、正しい知識を得ることの重要性を痛感しました。

令和5年度は、コロナ感染症が感染症法上5類になったことを受け、本来の学修の形態に戻りました。安堵し心待ちにしたフィールドワークに心が高鳴ると同時に、計画の段階から受け入れの調整に多大なご配慮を頂きました。心より、御礼申し上げます。

そして今年度は、「行政と医療機関」6フィールド、「行政」2フィールド、「医療機関」4フィールドで地域に入り込み学習を進めることができました。学生たちは、地域に身を置いて、その地域の風土や歴史、すばらしい自然、人と人を繋ぐ情、中でも地域社会の問題解決に取り組む保健医療福祉職者との触れ合いから多くのことを学びました。フィールドワークの原点は、いかにその地域を尊重し、自分がその地域に合わせた振る舞いができるのか、教わる姿勢をもつことができるのかとすることだと思えます。自分の価値観を押し付けるのではなく共に歩むことを肌で感じとる学習が、「島根の地域医療」の科目にはあります。このような体験を通して、看護学・栄養学の専門職としての基盤ができると考えています。

そして、春になると綿帽子が飛んで芽を出すように、卒業後も島根県の様々な地域で根付いてくれることを期待しています。また、県外でも島根に心をはせて、島根で学んだことを活かしてくれることを願っています。

最後になりましたが、各市町の関係の皆さま、各病院はじめ病院関係スタッフの皆さま、そして地域の皆さまには心より感謝申し上げます。

令和5年11月吉日

目 次

島根の地域医療 授業概要	1
フィールド学習スケジュール	2
フィールド別学習報告	
【行政・医療機関】	
雲南市・雲南市立病院	3
飯南町・飯南町立飯南病院	7
川本町・社会医療法人仁寿会 加藤病院	11
津和野町・医療法人橘井堂 津和野共存病院	15
隠岐の島町・隠岐広域連合立 隠岐病院	21
西ノ島町・隠岐広域連合立 隠岐島前病院	25
【行政】	
邑南町	29
海士町	33
【医療機関】	
出雲市立総合医療センター	39
社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院	43
独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	47
公立邑智病院	51
付属資料	
フィールド関係機関・関係者一覧	55

島根の地域医療 授業概要

【目的】

島根県内の島嶼地域、中山間地域、海岸部における保健医療福祉活動を通して、地域医療への理解と関心を深める。

【目標】

1. 島根県の島嶼地域や中山間地域の住民の生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。
2. 住民の生活や文化と健康課題との関連を認識する。
3. 住民の生活を支える保健医療福祉施設や行政および教育機関の役割を理解する。
4. 住民の生活を支える専門職（看護職・管理栄養士等）の役割や機能を認識する。
5. 保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通して、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。
6. 住民の生活を支えるための今後の地域医療のあり方について考察する。

【授業計画】

1. 島根県の保健・医療・福祉と生活の現状
2. 生活を支える保健・医療・福祉の専門職の役割や機能
3. 地域の医療提供体制について（医療計画など） / 招致講義：村下伯先生（出雲保健所長）
4. 地域包括ケアシステムについて / 招致講義：村下伯先生（出雲保健所長）
5. フィールドの地域特性<グループ学習①>
6. フィールドの地域特性<グループ学習②>
7. ～14. フィールド学習
 - ・フィールドの生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。
 - ・保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通して、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。
15. まとめ

学生達が、フィールドとの交流を通じた学び・これからの地域医療のあり方について考察した内容をまとめ、報告書とさせていただきます。

【フィールド学習スケジュール】

フィールド		実施期間
行政と 医療機関	雲南市・雲南市立病院	8月24日(木)～8月25日(金)
	飯南町・飯南病院	8月24日(木)～8月25日(金)
	川本町・加藤病院	9月12日(火)～9月13日(水)
	津和野町・津和野共存病院	9月6日(水)～9月8日(金)
	隠岐の島町・隠岐病院	9月6日(水)～9月8日(金)
	西ノ島町・島前病院	8月21日(月)～8月23日(水)
行政	邑南町	8月31日(木)～9月1日(金)
	海士町	8月22日(火)～8月24日(木)
医療機関 ※看護学科 のみ	出雲市立総合医療センター	8月22日(火)～8月25日(金)
	社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院	8月28日(月)～8月31日(木)
	独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	8月28日(月)～8月31日(木)
	公立邑智病院	8月21日(月)～8月24日(木)

【行政・医療機関】

雲南市・ 雲南市立病院

<看護学科>

酒井 輝美 清水 陽向 田原 ほのか 原田 菜々子 福本 聡美
船瀬 琴奈 松野 留奈 光田 優月 山崎 あゆみ

<健康栄養学科>

金田 佳香 神崎 楽音 北野 真衣 崎 悠加 團 香帆奈
村上 空良

<担当教員>

中畑 典子 講師

フィールド学習内容

月日		時間	内容	
			1班(8名)	2班(7名)
8/24 (木)	雲南市	8:20	雲南市役所本庁舎到着、あいさつ	
		8:30	松笠交流センターへ出発	
		9:00	うんなん幸雲体操見学・体験 (松笠交流センター)	オリエンテーション
		11:00	昼食	
		12:45		多根交流センターへ出発
		13:30	オリエンテーション	うんなん幸雲体操見学・体験 (多根交流センター)
		14:30	2班帰庁後、学びの共有	
		16:30	終了	
8/25 (金)	雲南市立病院	9:00	雲南市立病院到着	
		9:10	オリエンテーション	
		10:00	看護学科(9名)	健康栄養学科(6名)
			病院見学 ・ベッドコントロール会議 ・薬剤部見学	病院見学 ・栄養管理課見学 ・栄養サポートチームについて
		11:15	市民健康講座準備	
		12:00	昼食	
		13:00	市民健康講座	
		16:30	まとめ等	
		17:00	帰学	

○雲南市の概要

雲南市は松江市、出雲市から約 20 キロ南に位置し、豊かな自然と都市部へのアクセスのしやすいちょうどいい田舎であることから、2022 年に宝島社が発表した「住みたい田舎」ベストランキングで若者世代・単身者と子育て世代の 2 部門で全国 1 位を獲得した。

若者や女性の就労を確保するために、企業団地への事業場誘致に積極的に取り組むほか、専門スタッフ等による経営相談や創業支援に取り組んでいる。

雲南市には各地に神話や伝説、神楽などが伝承されており、加茂岩倉遺跡や神原神社古墳など多くの遺跡や古墳がある。ヤマタノオロチ退治など出雲神話の舞台であるとともに、国宝に指定された銅鐸やたたら製鉄など、地域特有の歴史や文化をもつ。古くから斐伊川の支流周辺の低地では農耕が営まれ、山間地ではたたら製鉄や炭焼きがさかんに行われてきた。

平成の大合併により大東町、加茂町、木次町、三刀屋町、吉田町、掛合町の 6 つの町が合併し、雲南市となり令和 5 年 8 月現在の人口は約 35000 名（最小－最大：吉田町 1457 名－大東町 11258 名）、令和 2 年国勢調査より、雲南市全体の高齢化率は 40.5%（加茂町 38.3%－吉田町 50.8%）と地域によって状況が異なる。

○雲南市の健康課題

雲南市の総医療費は 38 億円にのぼり、国保 1 人当たりの医療費は毎年増加し、島根県より高い値で推移している。医療費に占める高血圧性疾患 41%、また、脳血管疾患の死亡率が男性 36.4%、女性 14.9%、特に男性の高血圧有病率は県より高い状況にある。特定健診受診率は県平均 42.9%に対し 35.8%と県内でも低い。死亡順位 1 位である大腸がんの死亡率低減を目指し、大腸がん検診啓発の取り組みを強化している。また、雲南保健所管内においては、壮年期男性および高齢女性の自死率が県内で最も高いことが課題となっている。

また、広島県境に位置する吉田町、掛合町では救急車の到着に時間がかかるため、雲南市では住民に「救急車を呼ぶことを躊躇わない！」ことを呼び掛けている。

○雲南市の住民の生活を支えるための行政・教育機関の取り組み

雲南市では「地域自主組織の活動拠点」として、地域ごとに交流センターが 30 カ所に整備されており、地域ごとに特色のある住民主体の活動が行われている。



雲南市が地域に声掛けして平成 29 年から開始された「うなんん幸雲体操」は、のべ 295 名が参加する介護予防教室である。おもりを使った筋肉増強のための体操で、10 段階（220g-2.2Kg）に調節可能なおもりを手首や足首に巻き付け、椅子に座って童謡を歌いながら、およそ 1 時間かけて手足をゆっくりと動かす運動である。筋肉の維持・向上を図ることで、転倒予防、骨折、寝たきりを予防を目的に始まった取り組みである。

今回のフィールドワークでは、笠松交流センターと多根交流センターに分かれて、私たちも「うなんん幸雲体操」に参加させていただいた。4 年間継続している女性から「幸雲体操を始めてからつまづきにくくなった」「疲れにくくなった」との感想を聞くことができた。

参加者は高齢女性が多かったが、夏休み期間中であつたため孫と一緒に参加する方や高齢男性も少数ではあつたが参加されていた。地域ごとに参加しやすい時間の設定や、定期的な筋力測定を行い数値化で効果を実感する機会を取り入れるなど、工夫も様々であるがわかつた。



地域からなくなった小売店の代わりに買い物ができる定期的で開催される「笑んがわ市」「波多マーケット」では地域の方が収穫した野菜や手作りの漬物・お菓子の販売が行われ、買い物弱者を救うだけでなく、販売を通じて高齢者の生きがいがづくり、見守りの場にもなっており、一つの活動が2つ以上の役割を果たしていることを理解することができた。

また、独居高齢者の方に中学生が手紙を書いて届ける「にこにこ通信」は、高齢者と中学生の交流の機会となっており、高齢者は「もらった手紙を壁に貼って元気をもらっている」一方、中学生は手紙の書き方の練習になっており、1つの活動がここでも2つ以上の効果をもたらしていることを学んだ。

○雲南市立病院の取り組み

大東町に立地する雲南市立病院（281床、2次医療機関）は地域の中核病院であり、「地域医療日本一を目指します」を掲げ、訪問診療に力を入れている。各町には診療所があるが、医師の高齢化がすすんでいるため、地域の開業医の負担軽減のため早朝・夜間の看取りを24時間体制で担っている。入院患者の最後は自宅で過ごしたいというニーズに応えようとする姿勢が感じられた。現在では多くの若手医師から研修先として選ばれる病院となり、以前は患者を島根大学附属病院や島根県立中央病院に紹介していた手術も雲南病院で行えるようになり、地域住民に高度な医療を提供できる体制が整った。

雲南病院には健康増進課があり、治療ではなく健康診断や保健指導など予防を担当する保健師が配置されている。定期的な市民健康講座の企画も担当し、季節にあわせて大テーマを決め、看護師、管理栄養士、理学療法士、医師へ講演会を依頼し、各専門の立場から講演を行っている。この講演会は市民の学びの場であるとともに、専門職間の互いの専門性への理解を深める機会にもなっていた。

多職種で異なる視点から課題に対する意見交換を行い、異なるアプローチ方法を一緒に考えることによって、病院はより質の高い医療の提供を可能にできるだろう。

○住民の生活を支えるための今後の地域医療のあり方について

これからの地域医療は、地域住民が主体となって取り組むことが重要になる。

地域住民の協力により、地域の人々の異変に早く見つけることができる。病院や行政だけでは解決できない課題も地域住民が参加することで解決できる課題もある。住民自身が健康や医療に対して活動し、助け合うことに対して、病院や行政が専門的に関わることで将来に繋がる取り組みを実現できるだろう。



飯南町・ 飯南町立飯南病院

<看護学科>

大元 珠希 亀谷 瑠花 木村 日菜乃 重見 綾音 周藤 愛里
砂流 榛果 田中 里佳 古谷 花鈴 安井 花音

<健康栄養学科>

井川 瑞穂 石飛 結好 木村 香陽 佐藤 友香 塚本 真央
中島 空音

<担当教員>

加藤 典子 准教授

フィールド学習内容

月日		時間	内容
8/24 (木)	全員	13:00~13:20	オリエンテーション(行政説明)
		13:20~13:50	オリエンテーション(病院説明)
		13:50~14:20	オリエンテーション(看護部説明)
		14:30~16:30	講義(飯南病院 病院長)
8/25 (金)	全員	8:30発~8:45着	移動(⇒保健福祉C)
		8:45~9:00	管理栄養士の業務について
	1班	9:00発	移動(⇒福島邸)
		9:15~11:00	保健福祉実習(長生き体操)
		11:00発	移動(⇒保健福祉C)
	2班	9:15~9:45	保健師業務について
		9:50発	移動(⇒大しめ縄館)
		10:00~11:20	しめ縄説明・体験
		11:30発	移動(⇒保健福祉C)
	全員	12:00~13:00	昼食
	1班	13:00発	移動(⇒大しめ縄館)
		13:10~14:30	しめ縄説明・体験
		14:40発	移動(⇒保健福祉C)
		14:50~15:20	保健師業務について
	2班	13:00発	移動(⇒野営自治会館)
		13:15~15:00	保健福祉実習(長生き体操)
15:00発		移動(⇒保健福祉C)	
全員	15:20~16:20	まとめ	
	16:20発	移動(⇒大学)	

飯南町での学び

1. はじめに

私たちは8月24日から25日にかけて飯南町でフィールド学習を行った。飯南町は人口が4506人(2023年8月現在)、高齢化率は46.23%の高齢者が多い地域である。以下にフィールド学習の学びを3つの視点でまとめ、最後に今後の地域医療のあり方について考えたので報告する。

2. 医療機関での学び

飯南町には飯南病院、来島診療所、谷出張診療所、志々出張診療所の4つの医療機関が存在する。そのため、飯南病院への通院が難しい人も医師に診察してもらうことができる。地域内で診ることを基本としながら、対応しきれない場合には無理して診るのではなく、速やかにへりなどで患者を搬送し、高次医療への架け橋としての役割を果たすことが重要であると学んだ。飯南町の医療のキーワードとして「総合医」「プライマリケア」が挙がっていた。飯南町では少子高齢化により、拡大する需要と、医療人材不足による供給の均衡をとることが課題となっている。そのため、総合的な能力を持った医師や看護師が必要とされており、育成に努めている。例えば、飯南病院のスタッフが直接地域に出向いて、「い〜



にゃん健康祭り」というイベントで超音波検査、内視鏡検査などの体験を通して、地域に住む子供達への職業意識を高める活動も行っている。また、飯南病院ではプライマリケアを中心に行っており、地域住民を全てのケアの対象として捉え、疾病予防、健康の維持・増進まで含めて取り組んでいる。飯南病院は地域住民にとって身近な「かかりつけ医」であり、総合的な医療サービスの提供を行っていることで住み慣れた地域でいつまでも生活することができると思う。

3. 長生き体操での学び

飯南町の健康づくり活動の一つとして「長生き体操」がある。長生き体操は飯南町で考案されたオリジナル体操で、手や足に重りを付け、童謡を歌いながら体を動かす。飯南町には長生き体操を行う場所が45か所以上あり、1か所あたり10人の方が集まり体操を行っている。開催場所が地区の集会所や公民館で行われており住民の方が開催場所に歩いて参加している人もいる。また、週1回では足りないと感じている人は自主的にプラス1か所別の場所で長生き体操に通って体操を行っている方もいた。長生き体操は、地域住民の通いの場や交流・会話の場となって地域高齢者の廃用予防や地域力の向上へとつながっている。住民だけでも行えるようにCDに一連の体操を音楽と共に録音しており、体操は童謡に合わせて歌いながら行っている。音楽を童謡にしたのは、童謡は地域住民にとっても親しみがあって歌いやすく、さらに体操に参加できない高齢者が歌だけでも、何らかの形で体操に参加できるようにするためであるという工夫があることを学んだ。



4、保健師、管理栄養士の方のお話での学び

飯南町の平均寿命は、男性 81 歳、女性 89 歳である。飯南町は縦に長いので、住民の移動手段は主に自家用車や町営バス、タクシーなどである。それによって抱える健康課題は、移動距離が長く、短距離でも車移動が多いことから運動習慣が少ないこと、それに伴って歩行速度が遅いことが挙げられる。また、住民の方の飲酒・喫煙・間食、運動不足、睡眠不足がある。さらに、10 時、15 時のお茶の時間があり、そこで提供されるものはお茶菓子ではなく、漬物、料理などである。そのため食事以外の間食が多くなり肥満、糖尿病、高血圧の割合が増加しているという健康課題があることを学んだ。解決するために、保健師が、特に男性には指導をする機会がないので、会合や検診の後に健康に関する情報を発信する取り組みをしている。LINE や SNS を活用した呼びかけや広報・回覧板の活用など、幅広い世代の人々に健康について働きかけを行っていることを学んだ。

また、飯南町で働く行政の管理栄養士は、健康な方を対象とした一次予防に焦点を置いて活動している。その例として、全世代に対しての個別栄養相談や啓発などの栄養指導を通して、地域の方との交流の機会も多い。しかし、管理栄養士が伝えたいことと地域の方の知りたいことが一致しない場合もある。だからこそ、住民と話し合う中で共にできることを考え、何が必要であるかを考えることを意識していると学んだ。また、管理栄養士としての業務だけでなく、幼児発達支援の親子教室など行政組織としての活動も行っておられることを知った。このように、人手が少ない分、管理栄養士の方も他職種と連携して、総合的に日々の業務を行っていることを学んだ。



5、今後の地域医療の在り方

飯南町でのフィールドワークを通して、私たちが考える地域医療の在り方のキーワードは、総合力だ。飯南町のように少子高齢化や人口減少が進む地域では、医療における人手不足をカバーしていくために総合的な対応力が必要であると身に染みて感じた。そして、それぞれの高い総合力をさらに高めるのが、多職種や組織同士の連携である。行政、病院、保健所がお互い手を取り合い、住民の生活を支える手助け（協助）を行っていることを知った。また、今後の働く世代の人口の減少を考えると、地域医療において、さらに個人が総合的な対応力を身につけていかなければならないと私たちも考える。そういった力を身につけられるシステムの構築も、今後の地域医療の在り方であると感じる。また、保健医療福祉の連携により地域包括ケアにも力を入れ、住民の QOL の向上に寄与していると学んだ。



川本町・ 社会医療法人仁寿会 加藤病院

<看護学科>

小川 日葵 川井 萌花 小前 陽菜 樽見 茉優 中祖 友来
原 明音 福庭 美沙 元山 凜太郎 安田 和佳 山田 楓乃

<健康栄養学科>

井山 志穂 崎村 芙実 山本 優花 古田 美月 嶺崎 かやの

<担当教員>

谷村 綾子 准教授
祝原 あゆみ 講師

フィールド学習内容

月日	時間	内容			
		1班（7名）		2班（8名）	
		健康栄養（3名）	看護（4名）	健康栄養（2名）	看護（6名）
9/12 (火)	7:45~	出雲キャンパス出発			
	10:00~ 12:00	男の料理教室（木路原自治会館）		居宅療養管理指導同行	訪問看護同行、 通所リハビリ見学等
	12:00~ 13:00	昼食		昼食	
	13:30~ 14:30	地域ケア会議（悠邑ふるさと会館）		栄養調査体験等	訪問看護同行
	15:00~ 17:00	オリエンテーション（加藤病院・研修等）			
9/13 (水)	8:30~ 12:00	居宅療養管理指導同行	訪問看護同行	サロン（三原まちづくりセンター）	
	12:00~ 13:00	昼食		昼食	
	13:00~ 15:00	まとめ（加藤病院・研修等）			
	15:15発	帰学			

川本町・加藤病院での学び

(訪問看護・通所リハビリ・サロン・男の料理・居宅療養管理指導・地域ケア会議)

川本町ってどんなところ

川本町は島根県の中央部に位置しており、人口 3043 人、高齢化率 44.6%の超高齢社会である(令和 5 年 8 月時点)。社会医療法人仁寿会があり、島根県の地域医療の課題である「移動困難者・制約者の増加」「医療・介護従事者不足」「労働者不足」の克服に取り組んでいる。また、地域巡回型サービス等、モバイルヘルスケアや相談、オンライン診療、そして、アクセシビリティ(機器やサービスの利用のしやすさ)の推進に川本町と一丸になって取り組んでいる。2040 年を展望し、誰もがより長く元気に活躍できる社会の実現を目指している。

繋ぐ看護・・・「訪問看護について」

様々な事情により病院に行くことが困難な方が利用するシステムが訪問看護である。病棟の看護と同様に利用者の持つ力を維持・増進することの他に、利用者の家族や周りの人達にアドバイスや教育をし、周りの人達全体へのアセスメントも行う。そうすることで、週に数回の訪問看護では網羅しきれない部分を周りの人達に託し、利用者は病院と変わらない看護を受けることができる。今回の活動で、コミュニケーションの重要性や、限られた時間の中でいかに利用者の普段の生活状況を聞き出し、そして周りに伝える事ができるかが訪問看護師にとって重要であるということをもより一層理解することができた。

コミュニケーションの輪を広げる・・・「通所リハビリについて」



身体機能に障がいを持つ人を対象とし、歩行や立ち座りなどの基本動作の向上を行う理学療法士、心身に障がいを抱える人を対象とし、家事などの日常生活動作の向上を目的としたケアを行う作業療法士によってケアが行われる。入浴などの生活支援も行われている。利用者についての、ケアマネージャーを通じた医療者同士の情報共有や、家族との情報共有も行っている。

今回の活動の中で、医療者との関わりは一人で暮らす利用者や閉じこもりがちになっている利用者の人間関係において重要な存在であり、貴重なコミュニケーションの機会になると学んだ。医療者は利用者や家族との人間関係の構築や会話、利用者の背景を考慮しアセスメントすることをより大切にする必要があるのだと感じた。

管理栄養士が行う取り組みとは…「居宅療養管理指導について」

在宅療養指導では対象者の自宅を月1、2回程度、訪問する。患者の情報を毎日確認できる病院とは異なるため、事前情報や蓄積されたデータを確認してから訪問に行くことが大切である。食事調査は、対象者が摂取した食事の内容と目安量を食事記録票に毎日記入する方法で行われていた。対象者が「食事記録をすることで間食は控えよう、野菜を食べようとする意識が高まった。」と仰っていた。このように今までの栄養指導を受けて、ご自身でも健康状態をより良くするために努力している姿が印象的だった。



地域住民と繋がるために…「川本町が取り組む地域活動」

① 男の料理教室

男の料理教室は川本町の介護予防事業の1つであり、食生活改善事業である。対象は65歳以上の方で栄養士が講師となり月に1回実施している。簡単で身体に良い献立を料理教室で作り、男性が自炊できるようにサポートしている。料理教室に通うことにより、食に興味を持つきっかけになったり、自分で料理をすることで達成感や満足感が増し、食事をより美味しく感じられたりするなどの効果があると考えた。

② サロン

地域住民主体の活動として地域ごとのサロン開設・運営が行われており、今回私たちが参加した三原サロンでは、保健師による健康教育や健康相談が行われていた。また、食を通じての健康増進のためのスープの日が設けられている。サロン実施により地域住民の情報を得ることや健康状態を把握し、医療や介護との橋渡しの役割をなしていることが分かった。

地域をよりよくするために…「多職種連携で地域を支える地域ケア会議」

地域ケア会議は高齢者個人に対する支援の充実と、それを支える社会基盤の整備を同時に進めていく地域包括ケアシステムの実現に向けた手法である。参加者は、医療専門職や役場の職員などで構成されていた。今回の会議では、川本町配食サービス利用や川本町緊急通報装置設置等の検討が行われた。利用者の情報を元に多職種間で意見交換を行い、最終結論を出す。多職種連携によって様々な視点から利用者を捉えることができ、よりよい意見交換の場や住民の生活の質の向上に繋がっている。また、対面での話し合いをすることで間違った情報が共有されることなく、確かな情報のもと住民の支援を行うことができると考えた。

川本町・加藤病院での学びのまとめ

3日間のフィールドワークを通して、中山間地域の医療の現状を知るとともに、川本町の皆さんが課題解決に向けての強い意志と思いやりの心を持ち、地域医療に取り組んでおられることが分かりました。貴重な機会をありがとうございました。



津和野町・ 医療法人橘井堂 津和野共存病院

<看護学科>

大田 佳音 二宮 光 平田 ももか 深川 心優 福本 佳正
前田 桃花 松原 萌音 森 舜葉 森脇 みさき

<健康栄養学科>

佐々木 結衣 園山 真央 高角 彩夏 長岡 愛実 布野 実咲
右田 優生

<担当教員>

澤 幸子 准教授

フィールド学習内容

月日	時間	内容
9/6 (水)	12:45着	津和野着
	13:00~13:15	オリエンテーション
	13:15~15:20	各部署へ移動 <ul style="list-style-type: none"> ・介護老人保健施設せせらぎ(3名) ・訪問診療(2名) ・訪問看護(2名) ・通所リハビリテーション(2名) ・津和野共存病院(3名) ・厨房(3名)
	15:20~15:30	休憩
	15:30~16:30	巡回診療説明
	16:30~16:50	当日反省会
9/7 (木)	8:20着	集合
	8:30~9:00	津和野町役場 健康福祉課概要
	9:00~9:20	移動
	9:30~10:20	管理栄養士、保健師による講義(質疑含む)
	10:20~10:40	移動
	10:40~11:20	地域医療連携センター活動概要(質疑含む) (連携・訪問診療・訪問看護・入退院支援等)
	11:20~12:00	地域包括支援センター活動概要(質疑含む)
	12:00~13:00	昼食
13:00~16:30	津和野町探索 <ul style="list-style-type: none"> ・太鼓谷稲成神社 ・旧畑迫病院 ・森鷗外記念館 ・日本遺産センター ・殿町通り他 散策 	
9/8 (金)	8:30着	集合
	8:45~10:30	まとめ及び記録
	10:30~11:30	報告会
	11:30~12:00	終わりの会(記念撮影等)
	12:00発	帰学

フィールド学習を通じた学びと今後の地域医療のあり方について

フィールド：津和野町・津和野共存病院

私たちは9/6～9/8の三日間、看護学科9名、健康栄養学科5名で津和野町を訪問させていただきました。実習を通して私たちは多くのことを学ばせていただき、今後の活動の原動力となることが多くあったと感じています。以下に、今回学んだこと、今後の地域医療のあり方について考えたこと記します。

<各部署見学>

1日目の午後はまず、2～3人ずつのグループに分かれ各部署の訪問をさせていただきました。それぞれの施設で学んだことを簡単にまとめます。

○介護保険施設せせらぎ

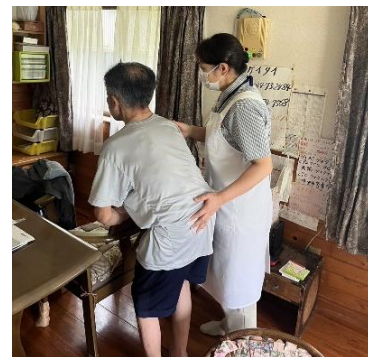
介護士さんの利用者一人一人に合った接し方を学ぶとともに、利用者さんと私たち若い世代と繋がることで、世代を超えた繋がりがお互いにとって良い刺激になり交流が大切なものだと感じました。

○訪問診療

学生にとっては要介護4～5の方を実際に見るのが初めてだったため不安もありましたが、多くの方が笑顔を見せてくださり、日ごろから、医療従事者の方々が利用者さんに対して親しみやすい環境をつくっておられることがよく分かりました。また、入所前の説明の様子も見させていただき、利用者さんの意向だけでなくご家族の気持ちも汲み取り不安を少しでも減らす工夫をしておられるのが印象的でした。

○訪問看護

実際に患者さんの自宅に行かせていただき、訪問看護師には冷静で素早く対応する能力が必要であることや、連絡ノートを使い情報共有を行うことで、様々な専門職の視点から患者さんをみることの利点についても学びました。また、津和野町には自宅が山奥にある方や、一人暮らしをしておられる方も多いため、改めて訪問看護の重要性を感じました。



(訪問看護の様子)

○通所リハビリテーションでは

レクリエーションの内容を工夫されていることや、個人にあったリハビリを提供するためには、多職種との連携も必要不可欠であることを学びました。また、リハビリは、レクリエーションなど簡単に体を動かすものしか想像できていませんでしたが、今回訪問させていただいた施設には、本格的なマシーンがあり驚きました。

○津和野共存病院

2階にある一般病棟では、何か起きてから対策を講じるのではなく早い段階で予防をすることや、同じ人が入退院を繰り返すことが多いため、患者さんの考えを尊重したケアを行うことの大切さを学びました。また、カンファレンスは患者さんに関わる全員が同じ方向を向いて、患者さんの退院を目指したケアを提供するために行われているのだと知ることができました。

○厨房

施設の老朽化や従業員不足などの課題を知るとともに、好き嫌いや利用者さんの健康状態に合わせて一人一人に合った食事を提供するなど、規模が小さい施設だからこそできる工夫を知ることができました。また、らくらく御膳を利用することで効率化を図り、従業員の負担を軽減するなどの対策についても学ぶことができました。

<巡回診療説明>

飯島副院長のお話を聞かせていただき、巡回診療だけでなく、津和野町の現状についても学ぶことができました。令和4年から始められた巡回診療は、診察や薬を処方するだけでなく、レクリエーションなども行っておられました。この取り組みは、バスが多く通っていない地域から病院に通う高齢者の負担を大きく減らすとともに、地域の方同士のコミュニケーションの場にもなることを学びました。

<さんさんサービス>

2日目の午前中は、さんさんサービスの見学をさせていただき、管理栄養士である宗田さんのお話を聞きました。さんさんサービスには、地域住民の方が多く参加しておられ、皆さんが熱心に話を聞いたり、自ら質問したりしておられる姿が印象的でした。また、管理栄養士の方は、声の大きさ、字の大きさ、話すスピードなどに気を配るだけでなく、クイズを行うなど、楽しんで学んでもらえる工夫を行っておられ、このような工夫がこの地域の高齢者の健康意識の高さに繋がっているのだと感じました。

<地域医療センター活動の概要説明・もしばなカード>

来村係長と太田保健師さんのお話では、津和野町の地域医療について各立場からのお話を聞かせていただきました。津和野町は高齢化率が50.2%を超えていることに加え、医師不足や施設不足、町外への転出の増加などの多くの課題があります。その現状の中で「住み慣れた家・住み慣れた地域で暮らせる町つわの」を目指すビジョンに掲げ、地域包括ケアシステムのもとで、地域住民の方々の生活を守っておられることを知りました。



(もしばなカードゲーム)

また、ACPについても学び、私たちも実際にももしばなカードゲームを体験させていただきました。多くの学生が、今まで自分の死生観などについて考えたことがありませんでしたが、このゲームを通して、自分の考えを知ることができたとともに、いつ何が起こるか分からない状況で、家族や友達に自分の考えを伝えておくことの大切さを知ることができました。津和野町ではこの取り組みを地域住民同士で行う機会を設けておられました。家族が遠く離れた所に住み緊急時にすぐ駆けつけることができない際に、近所の方が自分の考えを知っておいてくれることは安心に繋がると感じました。

<地域観光>

地域観光では、太鼓谷稲成、旧畑迫病院、森鷗外記念館、日本遺産センターに行かせていただきました。医療に関することも学んでいる私たちにとっては、特に旧畑迫病院が印象に残っています。昔の器具や機器、病室などを見させていただき、今との違いに驚きがあったとともに、畑迫病院が地域住民にとってどのような病院であったかについても知ることができました。また、どの観光地に行っても、地域の方が笑顔で温かく迎えてくださったことがとても嬉しかったです。地域観光を通して、地域住民の方が協力して歴史を守っていかうとしておられる姿に感銘を受けました。

<今後の地域医療のあり方について>

私たちは、津和野町でのフィールド学習を終えて、今後の地域医療のあり方について考えました。今後の地域医療が目指す姿は、多職種連携や地域住民同士のつながりを大切にするすることで、多くの方が住み慣れた町で最期を迎えることができるような支援を行うことだと考えます。津和野町では、近隣病院との連携や連絡ノートなどによる多職種連携、また、栄養教室や巡回診療などによる地域住民同士の繋がりなど、多くの「繋がり」があるように感じました。このような繋がりが地域医療においてとても重要であると考えます。看護職、管理栄養士を目指す私たちも今後、多職種連携が求められる場面が多くなるとは思いますが、その際には専門的な知識だけでなく、コミュニケーション能力が求められると考えます。そのため、ただ大学の講義を受けて知識を身につけるだけでなく、日常生活の中でも個々の様々な能力を上げていきたいと思いました。

津和野町の地域医療について学び、地域によって抱える問題や課題は異なるかもしれませんが、病院と介護福祉施設、自宅など医療を受ける場が変わっても切れ目のない治療やケアが受けられる体制を整えることの重要性を学ぶことができました。また、どんな状況でも患者さん本人の意思を尊重すること、また、ご家族への配慮をおろそかにしないことの大切さを学ぶことができました。

最後に、今回のフィールド学習を通して学んだことを今後の活動に生かしていきたいと思えます。3日間、ご指導いただきありがとうございました。



(病院食：2日目の昼食)



(最終日の記念写真)

隠岐の島町・ 隠岐広域連合立 隠岐病院

<看護学科>

井上 朝陽 須田 圭祐 伊達 このか 中村 のえる 新田 咲月
山本 理央 高橋 佑奈 伊達 萌莉 本多 優夏

<健康栄養学科>

池田 梨緒 齋藤 緋華貴 佐藤 元葉 田村 朱里 藤木 菜央美
山崎 愛美

<SA>

渡邊 桃加

<担当教員>

小川 智子 講師

フィールド学習内容

月日	時間	内容	
		1班（7名）+SA	2班（8名）
9/6 (水)	6:40	大学発	
	13:00	隠岐の島町役場着	
	13:00～	健康教室（今津地区）	健康教室（港町地区）
	15:00～	隠岐の島町 オリエンテーション	
	16:30～	夕食の買い出し	
	17:30	コテージへ	
9/7 (木)	9:00	隠岐病院集合	
	9:00～12:00	地区踏査（城北町周辺：4班に分かれて）	
	12:00～13:00	昼食	
	13:00～15:30	病院にて講話 病院見学（4班に分かれて）	
	15:30	隠岐病院発	
	16:00～17:30	コテージにて懇親会の準備	
	17:30～	懇親会	
9/8 (金)	9:30	コテージ発	
	10:00～	振り返り（隠岐病院・隠岐の島町役場）	
	11:15～	昼食	
	12:30～	都万海洋センター 自由行動	
	14:30	西郷港集合	
	19:00	大学着	

住民とともに取り組む島の保健と医療

隠岐の島町：健康教室に参加して

島に到着してすぐに、私たちは二つの地区に分かれ、高齢者を対象に行われている健康教室に参加した。

一つサロンでは、冠婚葬祭の時に地区の住民みんなで協力して行う助け合いのこころの中で、配食サービスを始め、このサービスを続けるためには自分たちがまず健康であることが大事だという考えから生まれたという話を聞き、住民の積極性や支え合いのこころの強さを感じた。



サロンの中で保健師の方の血圧測定を観察していると高齢者の目を見て、聞き取りやすい声で話すことはもちろん、一人ひとりの情報をきちんと把握して相談に乗っておられた。これはすぐにできることではなく、時間をかけて皆さんとコミュニケーションをとってきた歴史がわると分かった。地域で暮らす人々がお互いに気遣い合うことが地域の健康を維持する秘訣なのではないかと感じた。地域で健康をつくるという考え方は、診療所・医療従事者の減少の対策に大きな影響を与えると考える。



サロンに参加する住民の方に話を聞くと、男性のサロンの認知・参加が今後の課題であると感じた。隠岐の島町の基本目標である健康寿命を延ばすこと、つまり、元気に長生きしてもらうことへの意識は、個人差はあるが女性を中心に浸透しており、住民と役場、医療従事者が同じ目標で、取り組んでいる地域であると感じた。

隠岐の島町：地区踏査

2日目は、少人数でのグループに分かれ、午前中は島内を歩いて住民の方に住民主体の活動や暮らしについてお話を伺った。まず、町で経営している酒屋さんに行き、未成年の飲酒を防止する取り組み内容について詳しく話を伺った。中高生を中心に酒の提供時に名前や生年月日を聞いたり、酒を取り扱っている店は夜の8時の早い段階で閉めたり、他店と常に連絡を取り合ったりして、学生と酒の距離を取る取り組みを行っておられた。また、島の暮らしでは、島の商店街は閉まっていく傾向にあるため、隠岐島の観光地維持のためにも隠岐の島ならではの店や食べ物といった、生産性のあるものを残すべきと話されていたことから、島民自身が島の未来を考えて日々生活しておられると感じた。次に、学生向けの木工教室や、隠岐病院地域交流の会を開くなど島を盛り上げている方にお会いした。その中でも、隠岐病院地域交流の会の詳細をお聞きしたところ、島外から来られる住民の方や、医療従事者も島の暮らしを理解した上でのアセスメントをしたい、してほしいというニーズをもち、島外の医療従事者や公務員の方に無料で畑を貸し出し、住民の暮らしを分かってもらって島を好きになってもらうという住民目線で病院を支える活動をしておられた。島内の医療発展に向けて、医療従事者だけでなく住民も一丸となって協力しているという医療体制は隠岐島ならではの魅力だと感じた。次に、環境省大山隠岐国立公園隠岐管理事務所を訪問した。管理官の方は2人だけだったが、様々な機関と連携を取り、住民の方々と協力して管理を行っており、「2人だけど2人じゃない」というこの地域の一体感を感じた。このように、「対物」の仕事に思われるようなものでも「対人の仕事」であることから、あらゆる場所で住民間の関係性が重要になっていると感じた。

隠岐病院を見学して

隠岐病院では令和2年10月から「島の医療」に寄り添うことを目的とし、「内科」から「総合診療科」へということで、内科以外の診療対応、診療所支援、在宅診療の充実、本土の高度/専門医療機関との連携強化を行っている。日本最小人口の二次医療圏の拠点病院、離島で唯一の救急医療機関・入院医療機関、他の同規模病院より幅広い診療体制、断らない(断れない)救急が隠岐病院の特性であると学んだ。断らない(断れない)救急については、外部の専門医の助言を受けたフローシートに基づく救急処置の実施と、スムーズな輸送・連携などの判断が重要であり、このスムーズさが地域住民の安心へつながっている。このように病院側が柔軟に変化することで対応し続け、住民の生命や生活を守っていることを理解することができた。



院内を見学させていただいて、特に印象的だったのは各部屋の配置である。救急外来など人命を助けるためには時間をいかに短縮するかが求められる。効率よくスピーディーに移動できるようそれぞれの部屋や通路が考えられた病院の構造になっていた。また、最新の医療機器も取り入れられており、あるものを最大限に活用し、適切な医療を提供しているということを感じた。

島の医療人育成センターでは、「島の医療人」を育むことを目的とし、現在の医療人の育成のため、隠岐病院で働きながらレベルアップしていくことを支え、未来の医療人の招聘のため、小中高生の職場体験の受け入れや、研修・実習の実施、ホームページなどを活用した広報などを行っている。こういった活動により、さらに隠岐の島町の医療の質が向上し、住民の方の安心安全な暮らしにつながっていくのではと感じた。

まとめ

隠岐の島町は人や社会資源が少ないという一見するとあまり良くないイメージをもっていたが、住民と密接に関わることが可能であり、住民の声を聴き、地域についての情報収集が行いやすいという特徴がある。患者さん一人一人の情報を詳しく得ることができる上、変化も感じ取りやすい。そして多職種と関わる機会も多くなるため、連携が図れ、専門性を発揮してより良い治療を行うことを可能にしていると感じた。また、住民間の思いやり・助け合いのところが強く、町役場や医療関係者だけでなく、住民も一体となって地域の発展に向けて取り組んでいることを学んだ。私たちが特に印象的であったのは、島の住民の方の「自主的な活動」である。ボランティアで30年配食サービスを続けておられることなど島の人たちが、自分たちの地域の課題や問題を自主的に感知し、改善するための行動力に長けていると3日間を通して感じた。住民が主体的に問題解決や地域をより良くしようと努め、行政がサポートする姿勢が今後の地域医療にとって必要な力であると思う。



隠岐の島町役場、隠岐病院の皆様ありがとうございました。

西ノ島町・ 隠岐広域連合立隠岐島前病院

<看護学科>

岩田 奈那 大畑 結海 狩野 愛佳 新城 佑依 豊田 優
西迫 結衣 藤山 留華 美崎 麻奈

<健康栄養学科>

岩脇 秀典 小田川 千尋 河合 ひなた 長野 翔馬 成相 美来

<SA>

山田結愛

<担当教員>

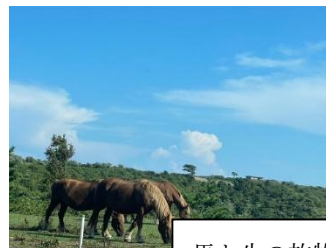
阿川 啓子 准教授

フィールド学習内容

月日	時間	内容	
		看護学科	健康栄養学科
8/21 (月)	13:10	西ノ島町役場到着	
	13:30～	オリエンテーション (西ノ島町の概要、西ノ島町の保健活動)	
	15:00～	町内視察	
	17:30	宿へ移動	
8/22 (火)	8:20～8:30	島前病院着	浦郷役場着
	8:30～	病院ミーティング 病棟・外来	行政栄養士について 社会福祉協議会 (配食サービス施設) 見学
	11:30～	昼食	
	～14:00	オリエンテーション	島前病院へ移動
	14:00～	訪問看護・往診・ 訪問リハビリテーション	島前病院(給食施設)の見学 栄養士の講話等
	16:00～	ケース検討会	
	17:20～	宿へ移動	
8/23 (水)	9:58	西ノ島町役場到着	
	10:00～	まとめのカンファレンス	
	11:50～	昼食	
	13:36	島前病院移動	
	13:45～	院長講和	
	15:45～19:30	別府港出発⇒帰学	

○西ノ島町ってこんな町

西ノ島町は、本土からフェリーで約三時間の距離にある島根県の離島で、隠岐郡の一部である。町内は15の地区に分かれており地区により人口構成と生活環境が異なる。雄大な自然や恵まれた海に囲まれ豊かな水産資源に富んでいる。特産品としては岩ガキと活きイカがある。面積は、55,98 km²、令和5年7月末の時点では、人口2577人、高齢化率に関しては48,5%で年々上昇しており高齢者が主要な働き手となっている。医療機関は島前病院と浦郷診療所の二か所で小中学校は一か所ある。地区によっては商店やスーパーの無い場所もあるので買い物支援バスJA移動販売を行っている。また、商店宅配サービスを行っている。販売品の価格は離島ということもあり運送費がかかり本土より価格が高く、数が少ない。また、台風などで物資が回らない時に備え、ストック用の冷蔵庫が1家一台あることは西ノ島町特有の生活習慣である。



馬と牛の放牧



国賀海岸

○住民の生活や文化と健康課題との関連

西ノ島町では公共交通機関が限られていることや坂道が多いことから、車社会になり運動習慣がない人が多い。漁業が盛んなことにより干物や刺身などのお酒のつまみになるものが多いため多量飲酒や塩分過多による高血圧症になる。また、糖尿病罹患率は低いが重傷者が多い。また、西ノ島町では健診に行きにくい環境であることから軽度の時に糖尿病に罹患していることに気付かず重症化してしまう。そのための対策として、糖尿病の原因である、高血圧症にアプローチが行われている。

○住民の生活を支える保健医療福祉施設や行政及び教育関連の役割

西ノ島町の保健医療福祉では医師不足の影響で、病院が訪問看護を行い、暮らしの場で療養者の日常生活や健康についての情報を収集することで、多職種連携をしている。

行政では、食育活動や配食見守りサービスを行うことで健康増進や維持につなげていることが理解できた。

健康教育に関しては今回の実習では実際に見ることは出来なかったが、保健医療福祉や行政からの情報を用いて地域に必要な教育をおこなっていると考えられる。

よって、保健医療福祉施設や行政及び教育の役割はお互いの組織間で情報共有を行うことで住民の生活と健康を効果的、且つ効率的にケアしていくことができると理解できた。

西ノ島町は、本土の病院では放射線技師が行うようなことも看護師が全て行うため、看護師にはさまざまな技術力が必要だと知ることができた。患者の生活状況を細かく把握しているため、生活状況を踏まえた、患者さんへのアドバイスや、医師との意見交換を行っ

ていると知ることが出来た。

管理栄養士が行っている食育活動は、特定の人を対象としたものと地域全体を対象としたものがあり、特定の人を対象とした食育活動は、糖尿病、腎臓病、高血圧等の患者に対して個別性をもって食事・栄養指導を実施しており、地域全体を対象とした食育活動は、食生活改善推進協議会と連携して、イベントの企画・運営し食育活動を行っていた。

患者を支えるためには、人間関係、情報収集、情報共有、問題解決のサイクルを作成することが大切である。そのためには、周囲との人間関係を構築する個人の努力が必要となる。また、食事に関して、献立作成から患者への食事提供までの経過には、病院であれば看護師、施設であれば介護士、家庭では家族の介入が必要となる。全てを管理栄養士が行うことはできないため他の職種との連携が必要不可欠である。また、患者が食事を食べにくそうにしている、患者の食が進んでいないなどの情報共有を大切にし、伝える際には相手が理解できるような配慮が大切になってくる。それぞれの専門家が近くにいることを活かして自分の専門分野ではなくても気が付いたことがあれば共有していくことにより、より密接な多職種連携によるサービスの提供を行っていくことが、これから求められる看護師・管理栄養士像であると考えられる。

○住民の生活を支えるための今後の地域医療のあり方について

私たちが考える今後の地域医療に必要なことを「社会貢献を高齢者がする」「ポピュレーションアプローチをふやす」の項目に分けて考えてみた。

1つ目については、健康課題として挙げられた運動不足を、地域の環境保全活動で解消していくという案だ。西ノ島町では約半分が高齢者という現状のため、高齢者が積極的に活動することで運動不足の解消だけでなく地域の活性化にも繋がる。

2つ目について、ポピュレーションアプローチを増やすという点である。西ノ島町では医療者や役所の人との距離が近い反面、何かあった時に頼れるという安心感から健康に対する意識が高まりにくいように感じた。そのため、健康への意識を向上させるためのポピュレーションアプローチが重要である。

○まとめ

今回フィールドワークを通して、西ノ島ならではの医療体制を体感し、地域医療や在宅医療について理解することが出来た。西ノ島町は高齢化率が高く、高齢者に対する地域連携や医療の最先端であり、地域の特性や資源を活用した包括ケアが行われていた。少子高齢化の進む中、今回得た学びを参考にして地域医療を展開できるよう、多角的な視点で地域をみる目を養っていきたい。

最後になりますが、皆様ありがとうございました。



【行政】

邑南町

<看護学科>

安食 柚子 天岡 ゆり 大國 咲来 乙加 彩風 亀山 詩
松岡 華加 柳田 瑠南 山本 多恵 山本 莉璃

<健康栄養学科>

前田 楓 大國 和花 滝沢 桃加 錦織 桜和 誉田 思遥
水 葉菜

<SA>

永見あいか

<担当教員>

小田 美紀子 教授
松岡 紗嘉 助教

フィールド学習内容

月日	時間	内容	
		1G	2G
8/31 (木)	10:30	邑南町着	
	10:40～	邑南町の概況・保健活動の紹介	
	11:00～	邑南町地域包括ケアの説明	
	11:30～	昼食	
	12:00～	医師・看護師に話を伺う <三上医院 三上博信先生(出羽)>	
	13:30～	布施運動教室参加 (アイスブレイクを担当)	日和寄り合い処 ひよりの会参加 (アイスブレイクを担当)
	16:00	宿泊施設移動	
9/1 (金)	8:30着	宿泊施設より移動	
	8:45～	行政栄養士、保健師の話(栄養士1人、保健師2人)、 施設栄養士の話聞く 【テーマ】 「地域を支える保健活動の中で大切にしていること」	
	10:00～	公立邑智病院 ①病院概要②院内見学③看護師・栄養士との 意見交換	
	11:15～	邑南町社会福祉協議会の紹介	
	12:00～	昼食(銭宝地区配食弁当)	
	13:00～	邑南町社会福祉協議会にてフィールド学習 「社協として住民を支える多職種の連携・協働」について 話をしていただき訪問看護、ケアマネ、ヘルパー、通所、 社会福祉士に分かれて現場の実際、専門職からの話を聞か せてもらう。	
	15:30～	振り返り 「地域住民を支えるための多職種の連携」をテーマに ラベルワーク	
	17:00	終了	
19:30	帰学		

人と人とのつながりを大切に。思いやる心から生まれる原動力。

フィールド: 邑南町

今回のフィールドワークで、邑南町の地域住民や専門職の方々と触れ合うことで多くの学びや気づきを得ることができた。特に、地域住民・専門職など邑南町に関わるすべての人が町のために一丸となって行動している点が印象的だった。また、思いやりの心が人間関係・専門職としての心構えに影響し、地域課題の解決の一步となることを感じた。

以下から2日間のフィールドワークを通して、連携・人間関係の重要性や専門職の心構え、邑南町の課題、今後の地域医療のあり方の4点について学んだことを述べていく。

1. 連携・人間関係の重要性について

連携といっても他種職間での連携や同じ職種、医療機関と行政、住民と住民の連携など様々であることを学んだ。

専門職・施設間での連携については病院、ケアセンター、介護施設等がグループを組んでいた。専門職同士は、それぞれの知識を補いながら施設同士が迅速な対応ができるように、連携が取られていることを実感した。

医療機関と行政の連携については、何かあったら連絡するという仕組みづくりが整っていた。例えば、病院で診察をした時に栄養指導や保健指導が必要と判断された人の情報を行政の保健師や栄養士の方に連絡し、早期に対応できるようになっていることを知り、地域で暮らす住民の暮らしを支えるためには、医療機関と行政の連携も欠かせないことを学んだ。

住民同士の連携については、サロンや生活サポート応援隊などの活動を通して、公的サービスだけではカバーしきれない部分を住民が担っていた。例えば、布施地区の高齢者集いの場づくり(よりあい処)の方々は、地域住民の要望に応じて、ゴミ出しなどの家事支援、配食サービス、交通支援、草刈りや除雪などの支援を行い、地域の方々の暮らしを支えている。それぞれの人が他の人のことでも我がごととして考え、何かあったら助け合うという関係性が構築されており、住民が課題に対して主体的に解決していく意識が高いことが、地域力の向上につながっていることを学んだ。



2. 専門職の心構えについて

医師や保健師、看護師、管理栄養士、社会福祉協議会の方々からお話を伺ったが、皆さん仲が良く、「まずは仲良くなるのが大切だ。」と仰っていた。また、地域住民の方も、職業や年齢、性別を超えて、多くの人が仲良くお互いの家族関係やその人の性格など多くの事を知り、理解していると感じた。このことによって、良い人間関係を築くことでコミュニケーションがとりやすくなることはもちろん、効率的で効果的なサービスの提供もしやすくなる。そして、気軽に相談できる環境があることで働く人のモチベーション維持向上や、相手に寄り添った地域医療・福祉が展開できるのだと学んだ。また、どの職種もその専門職に関するだけでなく、同じ指導が多くの住民にできるよう、

自分の強みを生かせるようにお互いの知識を一緒に学んでいくことが大事であると学んだ。さらに、専門職の関係性ができていることが、異常の早期発見、早期対応につながるのではないかと感じた。

3. 邑南町の課題について

邑南町のような中山間地域では、医療福祉従事者の人材不足や、交通の便が不十分であることなどが課題とされている。

医療福祉従事者の人材不足については情報発信の強化や子供たちへの医療福祉教育などを行い町の医療提供体制の充実を図っている。また、医療機関への負担を減らすために一次予防の視点を大事にして運動教室やサロンなどの事業が多くあることを学んだ。

交通の便については、13時までに自宅から病院へ行って帰られる交通体制の整備をしたり、地域お助け隊が希望者に無料で送迎を行う事業をしたりしている。中山間地域は人口が少ないデメリットの部分だけでなく、小さなコミュニティのため色々な人が顔見知りで連携が取りやすいなどのプラス面もあり、その面をどのように活かして医療を展開していくかが大切であるということ学んだ。



4. 今後の地域医療のあり方について

上記に述べた連携・人間関係の重要性や専門職の心構え、地域の課題についての学びをもとに最後に、今後の地域医療のあり方を述べていく。私たちは、今後地域医療を展開していく上で、人と人との交流の輪や、交流を通して生まれる人を思いやる温かい気持ちがとても重要になるのではないかと考えるに至った。運動教室やサロンなどの取り組みを通して、人と人とのつながりを持つことで、相手を思いやる心が生まれる。そして、思いやりの心があることで、職種や住民という枠を気にせず、何かあったらお互いがお互いのことを支え合うことができ、地域課題の解決へと繋がるのではないかと考える。また、地域住民と医療従事者が密接な関係を構築することで、些細なことでも気軽に相談し合えることができたり、いざという時に迅速な対応ができたりするのではないかと考える。さらに、地域住民との関わりを通して得た情報を専門職同士で共有するときには、自分の強みを生かせるようにお互いの知識を一緒に学んでいくという姿勢が大切である。

また、働き手の人材不足や高齢化が邑南町では課題の一つとなっているが、このような地域課題は対策を講じたからと言ってすぐに解決できるものではない。そのため、10年、20年先の将来を見据えて、病院でキャリアアップ制度を導入したり、学校に出向き福祉教育を行ったりするなど、長期的な見通しを立て行動することが大切だと考える。また、人材不足に対する医療機関への負担を減らすために一次予防の視点を大事にし、運動教室やサロンなどの事業を増やし、介護予防や疾病予防などの「予防」に力を入れることが大切だと考える。

このフィールドワークで学んだ知識・経験・現場の生の声の大切さなどを今後の活動につなげていきたい。

海士町

<看護学科>

杵築 佑実 楠原 さくら 武田 雛 樋野 友香 平川 陽菜
松浦 優羽

<健康栄養学科>

板垣 伶奈 今村 花 松本 聖那 蓑田 楓

<担当教員>

落合 のり子 准教授

フィールド学習内容

月日	時間	内容
8/22 (火)	7:20	大学発
	12:40	菱浦着
	13:00～	オリエンテーション ・町の概況と福祉について ・保健事業について
	15:30～	海士町福祉施設等見学 社協、ふくぎ、あまの里、さくら他
	17:30	宿へ移動
8/23 (水)	9:00	海士町役場着
	9:15～	健康相談（2地区）
	11:00～	健康相談の振り返り
	12:00～	昼食
	13:30～	地域医療について（海士診療所）
	15:00～	海士町探索（金光寺、明屋海岸他）
	17:00	宿へ移動
8/24 (木)	8:30	海士町役場着
	8:35～	健康教室プチ体験
	9:00～	講話
	9:45～	献立の立てかた、カロリー計算
	10:30～	調理実習
	12:00～	昼食（調理実習）
	13:00～	まとめ
	15:15	菱浦発
	19:30	大学着

フィールド学習 海士町 まとめ

杵築佑実、楠原さくら、武田雛、樋野友香、平川陽菜、松浦優羽
板垣伶奈、今村花、松本聖那、蓑田楓

1. 海士町の実態をどう捉えたのか

海士町は、人口約 2,200 人(令和 5 年)の隠岐島前地域の島であり、高齢化率は 39.5%と老年人口が年々増加している。県立の隠岐島前高校では「島留学」として日本全国から生徒を積極的に受け入れており、そのほかにも、町では「大人の島留学」なども実施しているため、流動的ではあるが、若者世代の人口は維持されている。

現在の課題は、少子高齢化による地域の支え手の減少と、診療所や学校など生活や文化を維持し続けるための施設もまた減少傾向にあることである。農業・漁業の担い手の育成や医療等に従事する専門職の確保が困難であり、継続して居住し続ける若者の確保が強く求められている。

現在これらの課題に対し海士町では、島での生活体験による就労のきっかけづくり、職員と応募者でキャンプをして相互理解を図り、その結果を踏まえて採用を決める「キャンプ採用」などに取り組んでいる。

2. フィールド学習の内容と感じたこと、そこから得た学び

町内にあるグループホームや、就労継続支援 B 型事業所などの福祉施設、診療所を見学した。その際、どこの事業所でも行政とのつながりの強さを感じた。どこの施設に行っても役場の職員と施設の職員が親しそうに話している。日頃からコミュニケーションがきちんととれているようで、診療所の方から「初めて受診された方のことを保健師に聞くと、その人の性格や家族関係などを詳しく教えてもらえて、その人にあつた指導などができるので本当に助かっている」というお話があつた。

現代のプライバシー重視社会からすれば、真逆な社会が存在しているわけだが、島嶼地域特有の濃い人間関係こそが、皆で支えあう地域の維持には欠かせないといった事情もあるのだろう。多職種間での協働体制、さらに、医療機関・訪問看護・介護事業所等を相互につなぐ、医療情報ネットサービスである「まめネット」も効果的に機能していたことが印象的だった。たとえば福祉施設で利用者に褥瘡ができた際に、診療所の医師に電話するのではなく、ネット上に画像付きのメッセージを公開することで、効率よく関係機関との情報共有が行われていた。行政と施設が密な関係を築くことにより、多職種連携がしやすくスムーズで、話し合いが行いやすく、質の高い効率的な活動によって人材不足を補っていると感じた。

また、海士町では人と人の距離が近く、顔と名前がわかる地域社会が築かれている。保健師の方がすれ違う住民を見て、その人がどこの家の誰であるのか知っていたこと、健康相談では、一人ひとりの価値観や生活を理解し、それぞれに合わせた関わり方をしていたことから理解できた。このことは島嶼地域に限らず、どんな地域で保健師活動を行うにしても、

個々人とその生活背景について、深く理解しようとする姿勢が大切であると学んだ。

医療機関やそこに携わる人が少なく、地域の繋がりが親密であればあるほど、対象者にとって行政の取り組み方や人との接し方が、健康づくりに大きな影響を与えられられる。現場では、知識だけでなく一人ひとりに対応するための応用力や、コミュニケーション力が必要であると感じた。健康相談を実施しておられるところを見学させてもらい、保健師にとって重要なのは、疾患や課題だけを見るのではなく、その人を取り巻く環境全体を総合的に見る力だと学んだ。海士町では、地域住民と行政との距離が近いこと、あらかじめ多くの情報を得ることができており、その人を取り巻く環境を正確に掴むことができていることも良さであると感じた。

フィールド学習全体を通して、海士町では人間関係の強みを生かして対策を立て、多様なアイデアや資源を生かしつつ課題に取り組んでおられた。町づくりを行う上では、その地域の特徴や良さ、不便さなどを正しく知り、地域にないものはないと割り切り、その上で良さや特徴を生かした活動を行うことが大切であると学んだ。

3. 今後の地域医療のあり方について

海士町の現状から、今後の地域医療のあり方について考察した。

1) 多職種連携の強化としてのまめネットの普及とそれに伴う人間関係の構築

地域医療では人口の増減に関わらず、距離の近い医療を提供できる体制や、取り組み方が必要である。人口の少ない海士町のような地域における、保健・医療・福祉を軸にした密接なコミュニティは、維持することができれば理想的でもある。

今後のチーム医療の課題として「まめネット」の利用者の普及を目指すことで効率化を図り、人手不足に負けない深い連携を継続することがあげられる。

2) 飲酒・喫煙など生活習慣改善への取り組み

海士町では狭い人間関係特有の、行事の度に酒を飲む昔ながらの習慣が、健康を害する一因であることは否めない。飲酒率や喫煙率の高さとそのリスク軽減については、海士町の住民を尊重した心を持ちながら向き合う必要がある。改善案として、健康教室で喫煙や飲酒のリスクを啓発すること、漁師の方へのハイリスクアプローチを行うことが考えられる。

3) 人材不足に対する取り組み

今回のフィールドワークを通して、深刻な人材不足が問題となっていることを理解した。この改善案として、海士町独自で行っていくのではなく、他人事と考えずに国や島根県が全国民の問題として捉え、一体となって対策を進めていくことや、より多くの人に海士町の魅力、特色や強みをPRしていく必要があると思う。限りある資源を有効に使いながら、ITなどの技術も取り入れて業務の効率化を図ることが必要であると考えられる。

4) 緊急時の対応の仕方、早期発見、患者移送短縮への取り組み

海士町では、重症患者や手術が必要な患者は船やヘリコプターで、島後の隠岐病院や、本土の基幹病院へ運んで医療を受けてもらうしかない。治療開始までに時間がかかってしまうため、普段から住民に対しては、定期的な健康教育などで自身の健康に関心を持ってもらう取り組み、健康診断による病気の早期発見、早期治療に努めること、訪問診療や訪問看護などで診療を受けやすい環境づくりを進めることが必要だと感じた。

また医療従事者の方でも、脳梗塞や心筋梗塞など、治療開始時間によりその後の病状が変化する疾患への救急対応を、より高度化、システム化していく必要があると考える。

考えられる改善案として、病気の予兆を見逃さない日頃からの健康観察と、設備の整った病院への速やかな移動手段の確保があげられる。余裕があればフェリーによる移送が普通だが、ドクターヘリによる移送もためらうべきではない。夜間や荒天時の移送は危険を伴うため、安全確実な移送手段の確保が望まれる。



調理実習で作成した昼食(さざえご飯等)



海士町の景色を背景にした集合写真

【医療機関】

出雲市立総合医療センター

<看護学科>

種平 葉月 中谷 瑠七 中村 寧々 目次 夏々実

<担当教員>

吉松 恵子 講師
板持 智之 助教

フィールド学習内容

日時		学生	内容	
8/22 (火)	9:00 9:30~10:30	全員	副院長・看護部長室前集合 病院・看護部について	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・病院の概要 役割 機能 ・看護部の概況 ・地域の特性 健康課題
	10:30~11:30		出雲市（平田地域）における地域包括ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・平田地域における地域包括ケアシステムの特徴 ・具体的実践
	11:30 ~		病院見学	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携部門の役割と活動 ・病院見学
	13:30 ~16:30		回復期リハビリテーション 病棟での看護師追跡	<ul style="list-style-type: none"> ・病棟の説明 ・退院前カンファレンス出席、 家族指導の実際
8/23 (水)	8:30~ 16:30	A	地域連携部門（退院支援部門）での看護師の追跡	退院調整カンファレンスに出席 退院調整のための多職種連携の 実際
		B	訪問看護師の訪問に同行	訪問看護・家族支援の実際
8/24 (木)	8:30~ 16:30	B	地域連携部門（退院支援部門）での看護師の追跡	退院調整カンファレンスに出席 退院調整のための多職種連携の 実際
		A	訪問看護師の訪問に同行	訪問看護・家族支援の実際
8/25 (金)	8:30~ 12:30	A	ロビーマン体験 回復期リハ病棟看護師追跡	病棟看護師の実際を知る
		B	ロビーマン体験 外来・内視鏡室見学	外来・内視鏡看護師の実際を知る
	14:00~ 15:00	全員	まとめ カンファレンス	担当者・担当看護師との意見交換 医療施設から見た地域医療の 実際と課題 フィールドワークの振り返り

地域・病院全体をつなぐ関わりと連携の必要性

フィールド名：出雲市立総合医療センター

氏名：中谷瑠七 中村寧々 種平葉月 目次夏々実

1. 出雲市立総合医療センターについて

出雲市立総合医療センターは、出雲医療圏の東部地域（平田・斐川地域）において地域医療を担う、急性期病棟・回復期リハビリテーション病棟・地域包括ケア病棟・療養病棟を備えた、病床数 199 床を有するケアミックス型の中核病院である。平成 28 年 12 月に策定した出雲市立総合医療センター新改革プランにおいて、島根県が策定した地域医療構想を踏まえた当院の役割を明確にし、急性期、回復期及び慢性期から、在宅復帰までの切れ目ない医療の提供を目指している。近年は在宅医療への取り組みを進めており、平成 30 年度には訪問診療を、令和元年度には訪問リハビリテーション事業を、令和 2 年度にはみなし訪問看護事業を開始し、令和 3 年度には訪問看護ステーションを開設した。また、予防医療にも力を入れており、健康管理センターにおいて人間ドックや各種健康診断等を行っている。

2. フィールドワークを通じた学び

〈病棟〉

病棟の中でも回復期リハビリ病棟は、廊下が他の病棟よりも広くなっていたり、廊下の真ん中に 10 メートルごとに色を変えてテープが張られてあったりした。また、手すりや 2 部屋ごとにトイレが設置されていた。このことから、リハビリの行いやすい環境が整えられており、在宅への退院を見据えて、自宅で安全に生活できるように支援を行っていることを学んだ。回復期リハビリ病棟の看護師追跡では、S 言葉である「すごい・さすが・そうだね」というプラスの言葉を大切にしていることから、患者が痛みや葛藤と戦う中で、毎日の訓練を意欲的に継続してもらうために言葉にも注意して患者と関わっていつていることを学んだ。また、患者に「〇〇さん、おはようございます。」などのはじめの声掛けを大切に、患者とコミュニケーションをとることで、信頼関係を築いていた。信頼関係を築き、患者の今の気持ちや今後どうなりたいかを知ること、目標を共有し自宅退院に向けて共に進んでいけることを学んだ。

〈訪問看護〉

訪問看護では、患者への視点や目的・目標・療養環境が病棟と在宅では変わってくるため、ケアの方法やアプローチも病棟看護師とは異なる。そのため、患者一人一人の個別性を理解したり、「多くの目で見る」ことで質の高い看護を提供したりすることが大切である。実際に同行した中で患者に応じて一人一人のケアの方法や家族とのかかわり方が異なっており、個別性に対応したケアになっていると気づくことが出来た。また、家族へのケアも怠らず、共に患者の療養生活を限られた環境と時間・資源の中でコスト面も考慮した支援をしていくことが必要となると学んだ。

〈地域連携課〉

家屋調査では、実際に患者の自宅に伺い、患者・家族の言葉だけでは正確に把握する事が出来ない、使用家具や配置、家の構造などを測定したり患者に実際に動いてもらったりしていた。安全に自宅で生活するために必要なリハビリが行われているかを、患者の動きを実際に確認す

ることで個別性に合わせた支援を行うことができていると学んだ。また、患者本人も同行するため、患者のモチベーションアップに繋がり、身体的にも精神的にもプラスになると身をもって学んだ。また、地域連携課があることで、早期から退院を見据え、住み慣れた自宅に少しでも早く安心・安全に帰ることが出来るように多職種・他施設と連携して支援を行い、患者や家族の想いを尊重し計画を立てることで、最善の看護に繋がると学んだ。

〈カンファレンス〉

私たちは、医療従事者間で行う1週間カンファレンス・2か月カンファレンスと、患者本人やその家族も交えての退院支援カンファレンスに参加した。退院支援では医療従事者からの説明だけでなく、患者やその家族が不安に思うことがないか尋ねたり、退院後の生活へのアドバイスを行うなど病院でのかかわりで終わりにしない、退院後を考慮した話し合いとなっていた。さらに従事者間でのカンファレンスを通じた連携は、誰もが意見を言いやすい環境＝心理的安全性の保たれた場の雰囲気があることで、可能にしていると感じた。そうすることで職種関係なく、それぞれの視点から見た患者や家族についての情報を共有することができ、最善の看護を提供することができると学んだ。また、患者のマイナスな部分だけを取り上げるのではなく、新たにできるようになったことなどプラスな面についても情報共有をしており、常に前向きな姿勢で今後について話し合ったり看護を提供したりすることも大切なことであると気づき、その気づきを病棟の看護師がケアとして実践していることを理解した。

3. これからの地域医療

出雲市立総合医療センターで地域連携課や訪問看護が連携しているように、入院前から退院後も含めて一連の流れで切れ目のない・誰一人取り残さない看護を提供することができる仕組みを増やすことで家族の方の負担軽減にもなる。また、一番長く看るのは家族であり、その家族が必ず医療知識があるとは限らない。そのため、適切な看護・介護を安心して行えるように必要な医療知識を家族に提供していかなければならない。

高齢化・独居・老々介護・入院の短期化・人材不足・地域格差など様々な問題がある中で、どれほどの情報を収集し患者さんに寄り添うことができるか。多職種の目で見て話し合いをすることが地域の方の健康を守りそれぞれの持つ力で生活するために必要になると思う。以上から、各専門職間の話し合いが十分に行いやすい環境であり、病院内外の繋がりを強く持ち、患者さんにとっての健康の価値観や社会資源・環境から将来を見据えた医療を提供できることが今後の地域医療の在り方であると私たちは考えた。

〇おわりに

この度はお忙しい中4日間に渡り、貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。実際に病院から地域を見ることで、患者や家族の望みにできる限り寄り添い、最善の看護を提供するためには、信頼関係の構築や多職種・地域の施設との連携が必要不可欠であると改めて学ぶことができました。今回の学びを今後の学習や病院実習に活かし、患者や家族のそれぞれの気持ちを尊重した看護を行えるように日々努力していきたいと思っております。本当にありがとうございました。

社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院

<看護学科>

栗原 言奈 佐々木 莉佳子 新居 真由 三船 結理

【担当教員】

吉松 恵子 講師
板持 智之 助教

フィールド学習内容

日時		内 容		
8/28 (月)	午前	全員	オリエンテーション	施設概要と実習概要について
				済生会支部3施設連携について
	午後		江津市の現状の講義	保健医療福祉に関するニーズと課題、取り組み
			地域連携室の看護師追跡	地域連携室の役割と業務の実際見学
8/29 (火)	1日	全員	コミュニティライフケア合同会社 「訪問看護びいす」で見学実習	コミュニティ活動や訪問看護の実際
8/30 (水)	午前	A	3階東病棟（一般病棟）	入院の受け入れ、カンファレンス見学（栄養・せん妄・抑制・褥瘡・意思決定）、振り返り
	午後		6階東病棟（療養病棟）	患者とのコミュニケーションの実際、ポジショニング体験、カンファレンス、振り返り
	午前	B	5西病棟（療養病棟）	特定行為研修修了者の活動の実際、経管栄養とポジショニング、カンファレンス、振り返り
	午後		3階西病棟（地域包括ケア病棟）	心不全デイケアの実際、カンファレンス、振り返り
8/31 (木)	午前	全員	外来	オリエンテーション
				透析・救急外来見学
				外来ブロック見学・検査・在宅療養支援見学 心リハ見学
				振り返り
	午後	全員	講堂にて振り返り	実習の学びの共有や次年度への課題等

地域密着型の看護の本質を学べたフィールド学習

フィールド名:社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院

氏名:栗原言奈 佐々木莉佳子 新居真由 三船結理

【済生会江津総合病院について】

社会福祉法人恩賜財団済生会の一員であり、済生会の県支部である島根県済生会として島根県浜田圏域における保険・医療・介護・福祉を担っている。また、敷地内に介護老人保健施設（高砂ケアセンター）や特別養護老人ホーム（白寿園）といった介護福祉施設も設置されている。それに加え、在宅医療後方支援や地域医療連携室の設置、訪問看護ステーション、訪問リハビリテーションの設置により、施設・在宅へとスムーズな対応を可能している。

【フィールドワークを通じた学び】

療養病棟と地域包括病棟を見学した際には、患者の生活と医療が共存していくための学びを得ることができた。療養病棟とは「毎日を穏やかに過ごすための看護・支援」を主にしているところであった。他の病棟と違い、数年、数十年間の残された日々を療養病棟で過ごす患者が多い。長い付き合いが大切で、患者にとって病室・ベッドが生活の場になっていた。患者にとっての生活の場である以上、「看護師はその生活にお邪魔させていただいている」という意識が特に必要であると学んだ。療養病棟の看護師さんたちは、患者との会話でのコミュニケーションだけでなく、患者さんのわずかな表情の変化や発した声・動きなどから感情を汲み取っており、長い時間看護をしてきた信頼関係を目の前で学ぶことができた。

療養病棟の見学を通して、環境整備に対する認識が大きく変化した。看護師が患者の持っている力を維持できるような環境をつくるという目的で環境整備を行っていた。ただ患者が安楽に過ごせるようにするためだけではなく、日常的な動作がリハビリに繋がるということを意識することが必要であると学んだ。

地域包括病棟は、入院患者の在宅医療に向けてリハビリ・教育を行うところであった。レスパイト入院や短期手術などで入院される方が多く、退院支援看護師と調整看護師がそれぞれ3施設連携に関する業務や、退院時に必要な社会サービスなどの調整など、役割分担をすることで、入院という非日常を早く日常に戻すための医療の提供を行っていた。退院支援を在宅につなげるには、家族、患者の背景、生活、信条を考慮することが必要であるが、限られた面談時間の中で患者・家族の意向を汲み、多職種との交流を行いながら、退院調整をするため難しさがあると感じた。また、看護師の良いと思うことが必ずしも患者・家族の良いことになるわけではないと改めて学ぶことができた。

心不全ダイケアなどの患者に行う教育活動では、心不全連携パスや心不全手帳など活用した参加型のダイケアが行われていた。そこでは搬送時の体調の変化について振り返るなど、実体験と心不全ダイケアを結びつけて心不全とはどのような病気なのか教えており、ただ退院させるだけでなく、再入院を防ぐために実体験と地域を照らし合わせ、今後の留意点を伝えるための教育もしていることを学ぶことができた。

訪問看護ステーションびいすでは、その人の空間を大切にすることを意識しなければならないと学んだ。訪問看護は病室や病院で提供されていた看護をそのまま提供するものではない。訪問看護では処置台など置かず、生活の場に医療を出さないことが重要である。そのため、看護師は患者の生活の中に療養があるという視点で関わる必要があると学んだ。また、対象者の住む家の立地や、家族状況、災害時のリスクなども考慮して看護を行う必要があると知ることができた。在宅での医療は、患者さんだけでなく、地域のサービスを知り地形を学び、対象者の取り巻く環境についても看護の視点で考えなければいけないのだと感じた。この点が病棟での看護にはない在宅医療の楽しさなのではないかと感じることができた。

患者の意思決定支援などが重要視されている中で、患者や家族の選択に正解・不正解がないと看護師自身が理解していることが非常に重要であると今回のフィールド学習で強く感じた。訪問看護でも病棟でも、対象者の葛藤や不安などが入り混じった複雑な感情を受け止め、患者や家族の変化する意思をその時々で

尊重しなければならない。そのため、看護師自身が患者や家族の曖昧な感情や意見を受け入れられるように、患者・家族の選択に正解や不正解がないと理解する必要がある。

済生会江津総合病院は患者一人一人を地域で暮らしていたころから入退院するまでの「流れ」を意識して看護を提供していると学んだ。済生会江津総合病院は入退院支援を行っており、これは病棟看護師の存在が大きく関わっている。病棟看護師が看護計画立案の目的と何を根拠に行うのかということを理解している必要がある。患者は、入院という非日常の中で生活をしている。その為、病棟看護師は、日頃から患者の現状だけでなく退院の為に必要な計画を立案することが重要な事だと学んだ。患者が退院し、元あった日常の生活や地域にいち早く戻る為に、患者個々の環境や過去、現在を根拠とした未来に繋がる看護が必要であると感じた。

【これからの地域医療のあり方】

今回のフィールド学習で、看護師や地域住民ひとりの努力と志で地域がより良いものになることを目の当たりにした。そこで、地域医療は個人が持っている強みや志が積み重なることによって創り上げられるものであり、地域に住む人ひとりひとりの想いや意気込みから始まると感じた。自主的・意欲的に取り組むことにより地域内や病院内でスムーズな連携や地域のための活動が生まれ、それが病院外やさらなる広範囲の地域の人や様々な施設、医療従事者への連携や取り組みに繋がり、最終的に市や他の施設を巻き込んで地域一丸となり、地域全体で活発な活動や健康の普及などの充実した地域医療が生まれるのだと実感した。

地域医療は医療従事者や市の職員だけで行えるものではなく、そこに住む地域住民の協力や正しい知識も必要不可欠であると考えた。心不全デイケア、介護予防手帳、いきいき百歳体操など地域住民が自主的に健康へ働きかける取り組みや正しい知識を知ってもらう機会が多くあることから、地域全体で健康レベルの向上に働きかけていると考えた。病院で病気を治すことだけではなく、地域で暮らす人全員の健康寿命の延伸を目標とした医療や患者さんが非日常の病院から日常である地域・在宅に戻れるように支援し、予防に力を注ぐことがこれからの地域医療の在り方ではないかと考えた。そのため、コミュニティナースのような健康おせっかいを率先して行うことができる方や、地域のためにイベントや教室などを開催できる方を育成したり、実現できるよう支援したりすることも大切だと考えた。職種や年齢に関係なく同じ地域に住む人々が、地域のために、そこで暮らす人々のために、活発に多様な活動を行える環境が整うことで、繋がりが生まれ、広がり、地域医療もより良いものになると考えた。また、これからの地域医療ではコミュニケーションがより必要になると考えた。医療者对患者ではなく、ひと対ひとのような同等の関わり方で何気ない会話も大切にし、より専門性が高く、より幅広い看護のあり方を尊重し、広い視野を持って家族や背景などの様々な要素に考慮して適切な看護や患者さんとの関わりを行うことがより大切になると感じた。

【終わりに】



この度はお忙しい中、私達にフィールド学習をさせて下さり有難うございました。初めての病院や訪問看護ステーション等での学習を経験し、講義では学べない沢山の体験をさせていただきました。今回のフィールド学習を通して看護の本質に触れることが出来、看護というものはどうあるべきか、地域医療の在り方等、自分の中でひとつの見通しが出来、道が見えてきました。また、看護師は患者さんやご家族に対して真摯に向き合う姿勢を持つ事が何よりも大切だと実感しました。フィールド学習を通して学んだ事をこれからの病院実習や大学生活に活かし、それぞれの目標に向けて邁進したいと思います。最後になりますが、お世話になった皆様の今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。

独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター

<看護学科>

永島 彩名 長瀬 佳苗 福田 萌々 森山 すず菜

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

フィールド学習内容

日時		内 容		
8/28 (月)	午前	全員	病院概要オリエンテーション 感染管理オリエンテーション	病院概要：浜田圏域の状況 病院の役割・機能について 感染防止対策・注意点について
			院内案内	外来・健診センター、救急外来、救命センター ヘリポート～病棟、各部門（リハビリ部門他）
	午後	全員	地域医療連携室オリエンテーション	地域医療連携室の役割と活動
		学生1名～ 2名ずつ	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス
8/29 (火)	午前	全員	がん相談支援室について 入退院サポートについて 入退院サポート看護師の追跡	がん支援看護師の役割と業務について 入退院支援看護師の役割と業務について 入退院サポートの介入見学 2名ずつ
		学生1名～ 2名ずつ	地域医療連携室看護師追跡	11：00～3階南病棟(外科、消化器内科) 退院支援カンファレンス見学
	午後	学生1名～ 2名ずつ	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス 15:00～整形外科リハビリカンファレンス
8/30 (水)	午前	9：00～ 10：00 全員	MSWによる説明	退院支援に活用できる社会資源について (介護保険他、実際の事例を通して説明)
		上記の時間 以外 学生1名～ 2名ずつ	地域医療連携室看護師追跡	11：00～地域包括ケア病棟 退院支援カンファレンス見学
	午後	全員	診療看護師より説明	診療看護師の役割及び地域医療の中の 診療看護師の役割
			認定看護師・特定行為看護師	特定行為看護師の役割について
	学生1名～ 2名ずつ	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス 14：00～緩和ケアリハビリカンファレンス 14：15～緩和ケア退院支援カンファレンス 14：45～呼吸器外科リハビリカンファレンス 15：30～呼吸器内科リハビリカンファレンス	
8/31 (木)	午前	全員	地域医療連携室 看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス
	午後		まとめ	「病院からみた地域医療の現状」 担当者・担当看護師との意見交換 フィールドワーク振り返り

※ 退院時共同指導や介護認定調査等は日程が決まり次第 予定表に追加します。

地域医療連携室から見た地域医療の現状とそこから考える今後の地域医療の在り方

フィールド名: 浜田医療センター

名前: 永島彩名 長瀬佳苗 福田萌々 森山すず菜

①浜田医療センターの詳細

浜田医療センターは島根県西部の医療の中核を担う総合医療センターとして救急救命センターを有し高度な急性期診療機能を担っている。浜田医療センターは“医療を通じて「地域で生きる」を支援する”を基本理念とし、地域のニーズを掌握し、急性期医療以外の医療サービス(回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟)も提供している。地域医療支援病院として、地域医療連携室を充実させ、地域の医療・福祉施設と密接な連携をはかり疾病連携・病診連携を行いながら、患者の社会復帰と QOL の向上に努めている。

②学び

4 日間のフィールド学習では、主に地域と密接に連携する地域医療連携室を拠点として、病院内で幅広く活躍する看護師の方々の働きを間近で見学することができた。入退院の際には、患者を支えるケアマネジャーや施設の職員の方などが関わっており、入院から退院までの流れをサポートしている実際を見学した。そして、入退院に際して、多職種連携によって包括的に患者を支えることができると同時に、多職種連携による支援の複雑性や難しさが増すため、職種間を繋ぐ看護師の重要性と責任の大きさを感じた。よって、早期から全体の動きを俯瞰し、把握する力が必要であると感じた。また、地域医療における情報共有においては、院内では電子カルテ、院外では医療・介護連携シートを用いて連携がとりやすい体制をとっている。そのため、外来のない日や医師が不在の時でも医師と連携がとれ、患者の情報共有が容易でリハビリや退院支援がより正確に行えることを学んだ。

次に、家族やケアマネジャーとのカンファレンスを見て学んだことについて述べていく。病院内だけでは分からない、ケアマネジャーなどの他の職種を通じて得られる患者の情報が大切であるとともに、それを踏まえて地域で生活する患者を想定することが重要であるため、現在の患者の身体状態で、地域(家)や施設に移ったときにどうなるかを予測することが必要であることに加えて、退院時に求められる状態(ex.日常生活動作のレベル)であるために、今病院内で最大限できること(リハビリなど)は何かを考えることが必要であることを学んだ。また、リハビリ見学や介護認定調査の際には、本人の体力により結果が異なるため、直前にほかの処置が入らないようにスケジュール管理が必要であることを学んだ。

次に、退院や転院の支援の流れについて学んだことを述べていく。家に帰ることを望んでいる人が多い一方で、介護認定や施設の受け入れ申請に時間がかかるため、入院してすぐに退院後の生活について考え、決めることが大切であることを学んだ。また、退院後に移る施設によって、必要な医療行為や日常生活動作の自立度が異なるため、病院内でそれに合わせたリハビリや医療器具の使い方についての教育が必要であることを学んだ。

最後に、浜田市の特徴を踏まえて考えたことを述べていく。独居や高齢者のみの家族形態が多いことに加えて、家族が県外などの遠方に住んでいる人が多く、緊急時にすぐに治療の同意を得ることが難しいため、家族とのカンファレンスの時に緊急時の対応を決めておくことや意思確認書を書いてもらうことが大切であることを学んだ。また、浜田圏域には、老人ホームや介護施設、訪問介護が少な

い一方で、独居の高齢者が多く、在宅での療養が難しい患者が多いため、医療現場や介護施設の逼迫が起りやすいことが分かった。それに対処するには、人材の確保と一人一人の技術向上が必要であることを学んだ。

③地域医療の在り方

今後の地域医療の在り方について、多職種連携と看護師が積極的に地域で活動するという二つが挙げられた。

〈多職種連携〉

地域医療を支えているのは看護師だけでなく、病院内では医師や病棟看護師、作業療法士や栄養士など、病院外では施設のスタッフやケアマネジャーなど様々な職種がある。フィールド学習の中で多職種が集まって行われたカンファレンスに参加した際、患者の入院前の暮らしを知っているケアマネジャーからの情報をもとに作業療法士と退院後に向けたリハビリテーションを決定したり、病棟看護師からの患者の入院中の情報をもとに市の役員と認定調査が行われたりと、一人の患者の入退院を支援するために、多くの職種が関わっているということを実際に見たり聞いたりすることで学んだ。このことから、様々な職種が専門的な知識を持ち寄って、一人の患者の地域での暮らしを支えていくことが今後の地域医療において重要だと考える。

〈看護師が積極的に地域で活動する〉

高齢者独居や要介護の方が多く、特養や老健も入所待ちの状態、医療・介護サービスも利用したいときにいつでも利用できる状態ではないのが現状である。今後ますます高齢化が進むと考えられる中で、どれだけ健康で過ごすことができるか、どうすれば医療や介護が必要になってからも残存機能を生かした生活を送ることができるかを検討することが重要だと考える。それを踏まえて地域の中核病院として活動の幅を院内だけにとどめるのではなく診療看護師や認定看護師を主体として積極的に院外に出て地域住民への健康教育活動に参画して健康寿命を延ばす取り組みを行い、自分の力で生活を送れるような方を増やしていく必要があると思う。また、病院完結型から地域完結型の医療になる中で自宅でも必要なサービスが受けられるように訪問看護や診療所だけでなく、中核病院の看護師も地域に出向きより質の高い看護、生活を送れるように支援していく必要がある。しかし、課題として人員が確保できなければこのような取り組みは難しい。この課題を解決する一つの方法として看護師＝病棟看護師というイメージを持ってもらうだけでなく、病院内には地域と病院をつなげる看護師がいることや地域連携室などの取り組みをもっと知ってもらう必要があると思う。地域に限ったことではないが、このような役割があること、地域で取り組まれていることを見たり聞いたりして知ることで興味を持ち、地方で働きたいという思いを持つ学生は増えると思う。

④お礼の言葉

4日間フィールドワークをさせていただき、ありがとうございました。とても緊張していましたが、副看護部長の坂本様をはじめ、地域連携室の皆様、医療センターの皆様が分かりやすくご説明くださり、浜田医療センターの役割や地域連携室の仕事内容、地域医療における地域連携室の重要性を学ぶことができました。今回の学びを活かして地域に根差した看護師を目指していきたいと思います。



公立邑智病院

<看護学科>

神田 瀨奈 森 陽向 吉村 茉祐 渡部 涼海

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

フィールド学習内容

日時		内 容	
8/21 (月)	午前	10:30～ オリエンテーション 地域連携室	当院の概要 各部署の特徴と役割
	午後	回復期病棟【Aグループ】 急性期病棟【Bグループ】 リハビリテーション（訓練室）見学	病棟看護師に随行し看護業務の説明を受けながら 看護業務を見学 リハビリテーションの概要の説明と見学
8/22 (火)	午前	8:30 集合 回復期病棟【Bグループ】 急性期病棟【Aグループ】 10時～ 外来（初診、整形外科、外科） 【Aグループ】	急性期病棟：朝のミーティング見学 初期評価見学 ガーゼ交換、配膳、下膳、ラウンド随 回復期病棟：朝のミーティング見学、ラウンド随 退院支援業務、初期評価見学 外来：看護師の初診患者対応、継続看護見学 ご家族を含めた入院への対応見学
	午後	小児科予防接種	小児科外来で予防接種、診察見学 手術があれば見学あり
8/23 (水)	午前	8:30 集合 回復期病棟【Aグループ】 急性期病棟【Bグループ】 10時～ 外来（初診、整形外科、外科） 【Bグループ】	急性期病棟：朝のミーティング見学 初期評価見学 ガーゼ交換、配膳、下膳、ラウンド随 回復期病棟：朝のミーティング見学、ラウンド随 退院支援業務、初期評価見学 外来：看護師の初診患者対応、継続看護見学 ご家族を含めた入院への対応見学
	午後	手術室、サプライ、 分娩室、新生児室見学 薬剤科見学	手術室（手術があれば見学あり）、サプライ業務見学 助産師業務見学 薬剤師業務見学
8/24 (木)	午前	8:30 集合 9時～10時 透析 10時～初診外来【Bグループ】 回復期病棟【Aグループ】	透析業務、患者指導見学 病棟での看護業務見学 看護師の初診患者対応見学
	午後	まとめ	実習を振り返って意見交換

退院調整会議、栄養指導、家屋調査、退院後訪問指導、救急車搬入などは不定期にありますので、適宜見学に入れていきます。

邑智病院での学び

フィールド名：公立邑智病院

名前：神田瀬奈 森陽向 吉村茉祐 渡部涼海

○邑智病院について

邑智病院は、島根県のほぼ中央に位置し、邑智郡を構成する3町（美郷町、川本町、邑南町）が共同で運営する病院である。邑智郡内で唯一の急性期・救急告示病院として機能している。基本方針としては、①患者さんを家族と思い、良質で親身な医療の提供をすること②明るくて清潔で快適な療養環境の維持向上をすること③職員同士がお互いのやりがいと誇りを尊重し合う、あたたかい職場づくりをすること④地域に信頼されるよう、健全な経営であることである。

○邑智病院で学んだこと

邑智病院で学んだことは4つある。

1つ目は、PNS制度の活用である。邑智病院は、2人の看護師で1人の患者さんを看護するというPNS制度を活用していた。この制度を利用することで、2人の看護師の考えから患者さんを観察することができ、より質の高い看護を提供することが出来る。また、若手の看護師とベテランの看護師がペアになることで、最新の医療知識の共有が出来たり、積み重ねた看護知識の共有が容易にできたりすることも可能になる。そして、仕事量を分担することが出来ることにも繋がり、過重労働予防にも繋がることも期待できる。

2つ目は、邑南町の地域の特徴に合わせた医療体制や地域との連携についてである。特に、外来にくる方や入院患者には高齢者が多く、退院後の生活を視野に入れた看護が求められる。邑智病院には地域連携室があり、そこでは行政、老人福祉施設等の外部との連携や院内との連携が図られていた。外部との連携によって退院後に患者さんが住み慣れた地域で安心して暮らせるための仕組みになっていた。また、院内との連携では医師、看護師をはじめ理学療法士や薬剤師、地域連携室の看護師などの多職種との連携により様々な角度から患者さんの現状から退院後の生活を見据えてどうしていくべきかのカンファレンスが行われており、このような多職種でのカンファレンスは患者さん一人一人に合ったケアや治療を提供できるのはもちろん、退院後についても様々な視点からの意見によって患者さんがより安心して退院できる仕組みになっていた。このような医療従事者同士の連携や医療と地域の連携は高齢者の多い山間地域では必要不可欠なことであると学んだ。

3つ目は、ケアを行う際の声掛けである。看護師は患者さんにケアを行う際に方言など患者さんが聞きなれた言葉を使い、語り掛ける際は体のどこかに触れ、目を合わせながら非言語コミュニケーションなども用いて会話を行っておられた。会話をすることが難しい患者さんに対しては、一言で答えられるような質問を行っていて、患者さんの状態に合わせてコミュニケーションをとっていくことが大切であることも学んだ。患者さんのMRI室への移送に同行させていただいたときも、すごく小さく感じる段差でも患者さんに毎回声掛けを行い、これからどの通路を通過してどこに向かっているのかきちんと患者さんに伝えていて、初めは緊張されていた患者さんも少しずつ口数も多くなっていったりリラックスされている様子だったので、フィールド学習中に何度も言われていた次に行う動作を患者さんに伝えるということの重要性を改めて感じる事ができた。

4つ目は、邑智病院は高齢者の方がとても多いということである。色々と調べていく中で、高齢者の方が多いということは知っていたが、予想以上だった。急性期病棟と回復期病棟のどちらも見学させていただいたが、寝たきりの高齢者の方などがとても多く、外来でも受診される方は高齢者の方が

ほとんどだった。高齢者の方が多いので、看護師さんも話しかけたりする際は、耳元で大きな声でゆっくりと話しかけたり、ふらつきや転倒の恐れがある方のベッドにはセンサーを設置したり、ベッドの下に緩衝マットを敷いたり、それぞれの患者さんの個別性に合った対応をされていた。このように患者さんをよく観察し、転倒・転落が実際に起きてしまった時、またその恐れがあるときはカンファレンスを行い、看護師全員で注意することや対策を考え、共有しておられた。このように高齢者の方が多いのでどうしても起きてしまいがちな、転倒・転落などについての対応の仕方、防止の仕方についても学ぶことが出来た。

○今後の地域医療の在り方

今後ますます高齢化が進み、高齢者の医療需要量が増えていくと考える。邑南町の高齢化率は高いため、邑智病院は今後の地域医療に必要であることを以前から長年取り組んでいる病院である。邑智病院で学んだことを通して、医療従事者同士の連携や地域との連携が必要であり、地域医療の在り方であると考えた。まず、医療従事者同士の連携については、医師、看護師だけでなく理学療法士、薬剤師など病院内の医療従事者が連携することで患者の情報を共有することができ、さらに1つの視点だけでなくさまざまな職種の方の視点で患者さんを見ることができると、患者さん一人一人に合ったより適切なケアを提供でき、治療や方針を決めることができる。また、医師や看護師のゴールと他の職種のゴールが違っている患者さんが混乱してしまうため、医療従事者が連携することによって、医療従事者同士が同じ目標に向かいケアを提供し、患者さんも安心して治療や回復に向かっていけると考えた。次に、地域との連携については現在も地域との連携は重視されているが、退院後は家で暮らせるのか、それとも施設への入所になるのか、どういった介助が必要で保険が適応されるかなど自宅や地域に帰ってからも安心して暮らしていけるように今後の地域医療にはさらに強い地域との連携が必要だと考えた。そして、NPや医師クラークなどの人材を導入し、看護、医療的なケアが必要な患者さんへ医師や看護師が対応にまわる仕組みづくりが必要であると考えた。中山間地域での医療は特に人手不足が問題になっているため、少ない医療従事者を多くするという取り組みも大切であるが今回のフィールド学習から、現状を受け止めて、その現状に対して実現可能で適切な対処を考え、行動を起こすことが今後の地域医療で重要なことであると学んだ。そのため、それぞれの職種の持つ力が十分に発揮できるように、医師クラークやNPなどの医師や看護師の仕事を手伝える人材を導入し、現状に応じながらも看護の質を落とさないような新たな仕組みを作ることが今後の地域医療に必要なことだと考えた。

○おわりに

お忙しい中、4日間の指導をしてくださってありがとうございました。邑智病院での学びから今後の地域医療の在り方を考えることができました。初めての病院での学習ということもあり、手探りながらの日々でしたが、邑智病院の看護師さんはとても優しく様々なことを教えてくださったため、多くのことを考えることができ、体験することができました。沢山の貴重な体験をさせてもらったため、このフィールド学習で養った知識や技術を今後の病院実習などに生かしていきたいです。

本当にありがとうございました。



資料

フィールド関係機関・関係者一覧（敬称略）

1) 行政と医療機関

<雲南市・雲南市立病院>

雲南市役所

住 所：〒699-1392 雲南市木次町里方521-1
T E L：0854-40-1040 F A X：0854-40-1049
担当者：（健康づくり政策課）保健師 本田 晶子

雲南市立病院

住 所：〒699-1221雲南市大東町飯田96-1
T E L：0854-47-7510 F A X：0854-40-1049
担当者：（保健推進課）保健師 渡部 初枝

<飯南町・飯南町立飯南病院>

飯南町役場

住 所：〒690-3207 飯石郡飯南町頓原2064番地
T E L：0854-72-1770 F A X：0854-72-1775
担当者：（飯南町保健福祉課）課長補佐 後長 隆哉

飯南町立飯南病院

住 所：〒690-3207 飯石郡飯南町頓原2060
T E L：0854-72-0221 F A X：0854-72-1333
担当者：事務長 高橋 克裕

<川本町・社会医療法人仁寿会 加藤病院>

川本町役場

住 所：〒696-8501 邑智郡川本町大字川本271-3
T E L：0855-72-0633 F A X：0855-72-0635
担当者：（健康福祉課）主査 安田 育子

社会医療法人仁寿会加藤病院

住 所：〒696-0001 邑智郡川本町川本383-1
T E L：0855-72-0640 F A X：0855-72-3039
担当者：看護部長 中平 右子

<津和野町・医療法人橘井堂 津和野共存病院>

津和野町

(医療対策課)

住 所 : 〒699-5604 鹿足郡津和野町森村口141

T E L : 0856-72-4088 F A X : 0856-72-0688

担当者 : (医療対策課) 課長補佐 清水 孝倫

(健康増進課)

住 所 : 〒699-5605 鹿足郡津和野町後田口64-6

T E L : 0856-72-0657 F A X : 0856-72-1650

担当者 : (健康福祉課) 保健師 小山 久美

医療法人橘井堂 津和野共存病院

住 所 : 〒699-5604鹿足郡津和野町森村口141

T E L : 0856-72-0660 F A X : 0856-72-0774

担当者 : 看介護部長 喜島 悦子

<隠岐の島町・隠岐広域連合立 隠岐病院>

隠岐の島町

住 所 : 〒685-8585 隠岐郡隠岐の島町下西78番地2

T E L : 08512-2-8562 F A X : 08512-2-6630

担当者 : (保健課) 主幹 岸本 幸子

隠岐広域連合立 隠岐病院

住 所 : 〒685-0016 隠岐郡隠岐の島町城北町355

T E L : 08512-3-1770 F A X : 08512-2-6149

担当者 : 地域連携部地域連携室長補佐 上野 俊之

<西ノ島町・隠岐広域連合立 隠岐島前病院>

西ノ島町役場

住 所 : 〒684-0211 隠岐郡西ノ島町大字美田600番地4

T E L : 08514-6-0104 F A X : 08514-6-0683

担当者 : (健康福祉課) 保健師 草苺 恵里奈

隠岐広域連合立 隠岐島前病院

住 所 : 〒684-0303 隠岐郡西ノ島町大字美田2071-1

T E L : 08514-7-8211 F A X : 08514-7-8702

担当者 : 看護部長 家中 ふみ代

2) 行政

<邑南町> 邑南町役場

住 所 : 〒606-0393 邑智郡邑南町淀原153-1
T E L : 0855-83-1123 F A X : 0855-83-0165
担当者 : (保健課) 主任保健師 大島 萌々果

<海士町> 海士町役場

住 所 : 〒684-0403 隠岐郡海士町大字海士1490
T E L : 08514-2-1822 F A X : 08514-2-0208
担当者 : (健康福祉課) 主査 木村 理恵

3) 医療機関

<出雲市立総合医療センター>

住 所 : 〒691-0003 島根県出雲市灘分町613番地
T E L : 0853-63-5111 F A X : 0853-63-4228
担当者 : 看護部長 安食 豊子

<社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院>

住 所 : 〒695-8505 島根県江津市江津町 1016-37
T E L : 0855-54-0101 F A X : 0855-54-0171
担当者 : 看護部長 大崎 恵子

<独立行政法人 国立病院機構 浜田医療センター>

住 所 : 〒697-8511 島根県浜田市浅井町 777 番地 12
T E L : 0855-25-0505 F A X : 0855-28-7070
担当者 : 副看護部長 坂本 栄美子

<公立邑智病院>

住 所 : 〒696-0193 島根県邑智郡邑南町中野 3848-2
T E L : 0855-95-2111 F A X : 0855-95-2313
担当者 : 診療看護師 大田 美穂子
企画調整課 白鹿 里紗

コロナ禍以降、リモート等での学習が中心となっており、フィールドでの参加が難しい状況が続いておりました。今年度は、「行政と医療機関」6 フィールド、「行政」2 フィールド、「医療機関」4 フィールドで宿泊を伴うフィールド学習が実施しました。

学生たちは、地域医療に実際に触れ、自分自身、グループで考えることができ、充実したフィールドワークになりました。

学生達は、この経験を活かし、地域医療にさらに興味を深め、今後の学修や自分のキャリアに活用してくれることを期待しています。この場を借りて、各市町の関係者の皆さま、各医療施設の関係者の皆様、地域の住民の皆様、指導者の皆様に深く御礼申し上げます。

担当 吉松恵子・小田美紀子・澤幸子

令和5年度 島根の地域医療

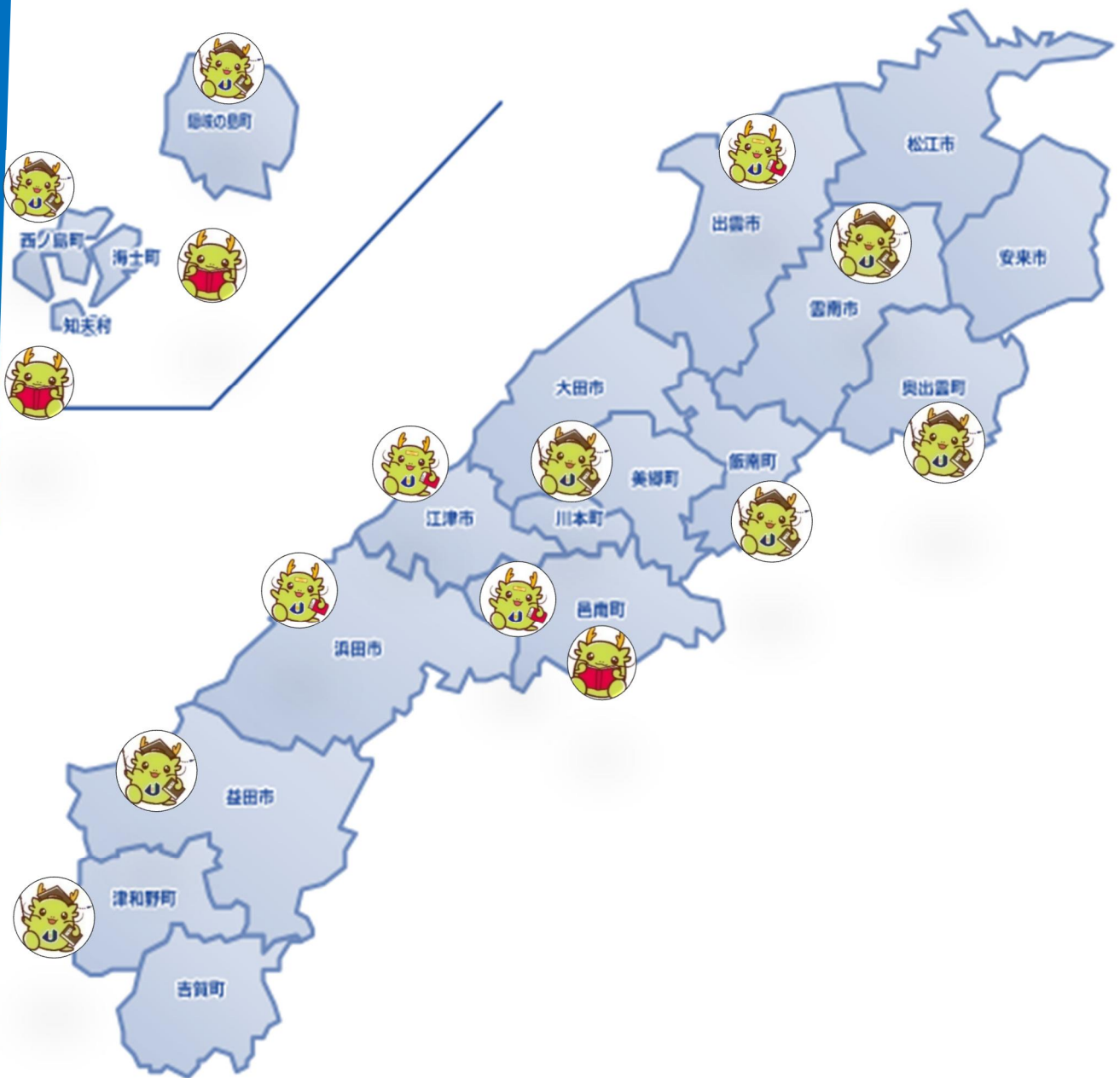
フィールド学習報告書



令和6年度

「島根の地域医療」

フィールド学習報告書



島根県立大学 看護栄養学部

ごあいさつ

島根県立大学出雲キャンパス 学部長 大森眞澄

能登半島の地震と豪雨など災害に対する危機意識が高まっています。また、今年も猛暑も続き、人々の暮らしも過酷であったと感じています。

そのような中、7月9日の大雨により日御碕地区でも道路の崩落が起き、地区の孤立状態が続きました。このような時、私たちに何ができるのか日々考え、地域の取り組みから学ぶことが重要だと考えています。

島根県立大学看護栄養学部で取り組む科目「島根の地域医療」は、中山間地域や離島を有する島根県の各地に出かけ、その地に身を置いて、住民の皆さんと交わりながら学んでいきます。フィールドワークの原点は、いかにその地域に溶け込み、自分がその地域に応じた立ち振る舞いができるのか、常に教わる姿勢をもつことができるのかとすることだと思えます。地域と共に歩むことを肌で感じとる学修が、「島根の地域医療」にはあると考えています。このような人と人との繋がる体験を通して、将来のありたい自分を描き、看護学・栄養学の専門職としての仕事についても理解が深まると考えています。

今年も、昨年よりフィールドが増え、「行政と医療施設」8フィールド、「行政」3フィールド、「医療施設」4フィールドの計15フィールドになりました。これもひとえに、ご協力いただきました自治体の皆様、病院関係者の皆様、多くの時間を割いて調整して下さいました全ての皆様のお陰と、深く感謝しております。

最後になりましたが、各市町村の関係者の皆さま、各病院はじめ病院関係スタッフの皆さま、そして地域の皆さまには心よりお礼申し上げます。

令和6年11月吉日

目 次

島根の地域医療 授業概要	1
フィールド学習スケジュール	2
フィールド別学習報告	
【行政・医療機関】	
雲南市・雲南市立病院	3
飯南町・飯南町立飯南病院	7
川本町・社会医療法人仁寿会 加藤病院	11
津和野町・医療法人橘井堂 津和野共存病院	15
隠岐の島町・隠岐広域連合立 隠岐病院	19
西ノ島町・隠岐広域連合立 隠岐島前病院	23
益田市・益田地域医療センター医師会病院	27
奥出雲町・町立奥出雲病院	33
【行政】	
邑南町	37
海士町	41
知夫村	45
【医療機関】	
出雲市立総合医療センター	49
社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院	53
独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	57
公立邑智病院	61
付属資料	
フィールド関係機関・関係者一覧	65

島根の地域医療 授業概要

【目的】

島根県内の島嶼地域、中山間地域、海岸部における保健医療福祉活動を通して、地域医療への理解と関心を深める。

【目標】

1. 島根県の島嶼地域や中山間地域の住民の生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。
2. 住民の生活や文化と健康課題との関連を認識する。
3. 住民の生活を支える保健医療福祉施設や行政および教育機関の役割を理解する。
4. 住民の生活を支える専門職（看護職・管理栄養士等）の役割や機能を認識する。
5. 保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通して、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。
6. 住民の生活を支えるための今後の地域医療のあり方について考察する。

【授業計画】

1. 島根県の保健・医療・福祉と生活の現状
生活を支える保健・医療・福祉の専門職の役割と機能
2. 地域の医療提供体制について（医療計画など） / 招致講義：村下伯先生（出雲保健所長）
3. 地域包括ケアシステムについて / 招致講義：村下伯先生（出雲保健所長）
4. フィールドの地域特性<グループ学習①>
5. 離島でみつける医療の原点 ～隠岐から見る次世代の医療～
/ 客員教授特別講義：助永親彦先生（隠岐病院）
6. フィールドの地域特性<グループ学習②>
7. 外から見た島根らしさと展望・保健医療福祉からみた島根らしさと展望
/ 招致講義：旗野敏行先生（島根県総務部長）
安食治外先生（島根県健康福祉部長）
8. ～14. フィールド学習
・フィールドの生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。
・保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通して、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。
15. まとめ

【フィールド学習スケジュール】

	フィールド	実施期間
行政と医療 機関	雲南市・雲南市立病院	9月5日(木)～9月6日(金)
	飯南町・飯南病院	8月22日(木)～8月23日(金)
	川本町・加藤病院	9月10日(火)～9月11日(水)
	津和野町・津和野共存病院	9月18日(水)～9月20日(金)
	隠岐の島町・隠岐病院	9月10日(火)～9月12日(木)
	西ノ島町・島前病院	9月4日(水)～9月6日(金)
	益田市・医師会病院	9月4日(水)～9月5日(木)
	奥出雲町・奥出雲病院	8月28日(水)～8月29日(木)
行政	邑南町	9月19日(木)～9月20日(金)
	海士町	8月28日(水)～8月30日(金) 予定 ※台風のためオンラインにより下記の日程で実施 9月2日(月)・9月4日(水)
	知夫村	9月9日(月)～9月11日(水)
医療機関 ※看護学科 のみ	出雲市立総合医療センター	8月28日(水)～8月30日(金)
	社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院	8月20日(火)～8月22日(木)
	独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	8月20日(火)～8月22日(木)
	公立邑智病院	9月4日(水)～9月6日(金)

学生達が、フィールドとの交流を通じた学び・これからの地域医療のあり方について考察した内容をまとめ、報告書とさせていただきます。

【行政・医療機関】

雲南市・ 雲南市立病院

<看護学科>

坪倉 茉友子 井戸 美琴 大國 尊 菊地 幸
中尾 胡奈 松崎 和奏 松本 心

<健康栄養学科>

青木 咲奈 梶谷 朱里 金築 彩華 河本 早希奈

<担当教員>

山口 扶弥 教授
加藤 典子 准教授

フィールド学習内容

月日		時間	内容	
			1班(6名)	2班(5名)
9/5 (木)	雲南市立病院	9:00	雲南市立病院到着	
		9:10	オリエンテーション	
		10:00	病院内見学	
		11:15	市民健康講座準備	
		12:00	昼食	
		13:00	市民健康講座	
		16:30	まとめ等	
		17:00	宿泊先へ移動	
9/6 (金)	雲南市	8:20	雲南市役所本庁舎到着	
		8:50	大東交流センターへ出発	中野交流センターへ出発
		9:30 10:00	うんなん幸雲体操見学・体験 (大東交流センター)	うんなん幸雲体操見学・体験 (中野交流センター)
		11:00 12:00	市役所へ移動弁当到着後、昼食	
		13:30	オリエンテーション *雲南市保健事業全般について *うんなん幸雲体操について *栄養士業務について	
		15:30	学びの共有	
		16:30	終了	

雲南市での学び

1, はじめに

私たちは9月5日から6日にかけて雲南市でフィールド学習を行った。雲南市は人口が34,591人(2024年8月末現在)、高齢化率は40.91%の高齢者が多い地域である。

以下にフィールド学習の学びを3つの視点でまとめ、最後に今後の地域医療のあり方について考えたため報告する。

2, 医療機関での学び

私たちは雲南市立病院で看護師・保健師・栄養士の方の話聞いたため、その学びを共有する。雲南市の中核病院には、雲南市立病院と平成記念病院の二つの病院が存在する。雲南市立病院は平成記念病院の他にも島根大学医学部付属病院や松江赤十字病院、県立中央病院などとまめネットをはじめとした新しいシステムを取り入れて医療連携を行っていた。

医療での連携において同部署・院内・地域内など、様々な場面でお互いを思いやる気持ちが最も重要なことであると学んだ。つまり患者に寄り添い、信頼関係を築くことが大切である。特に高齢者には家に帰るまでのリハビリや支援など病気を発症する前の生活や社会に



戻れるようなサポートを実施していた。そのため、患者の生活状況や背景など患者のことを知る必要があると学んだ。雲南市では、筋肉量があり低栄養やフレイルのリスクが少ないという人が67%であった。これは、退院後の医療従事者によるアプローチだけでなく、入院前の一次予防や二次予防に力を入れているからであると理解できた。

3, うんなん幸雲体操での学び

雲南市で行われている健康活動の一つである「うんなん幸雲体操」は雲南市で考案されたもので、手足におもりをつけ、季節の童謡を歌いながら行う筋力運動である。うんなん幸雲体操は、1週間に1回地域の交流センターで実施しており、市内83か所以上総勢987人が実践している。また、うんなん幸雲体操はケーブルテレビで放送されているので、実施場所に通えない人でも自宅で取り組めるようになっている。参加者たちは、健康でいるための体力の維持と向上が目的なだけでなく、週に1回みんなと会ってお話することを楽しみとしている方も多くおられ、うんなん幸雲体操が地域の人たちの交流の場となっていることがわかった。地域の交流の場であり、楽しく続けること



ができる「うなんん幸雲体操」が雲南の人たちの健康をつくり、守っていることを学ぶことができた。

4, 保健師、管理栄養士の方のお話からの学び

雲南病院には病院保健師が配属されており、地域包括ケアを推進する中心的な役割を担っている。住民が住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、病院での医療だけでなく、在宅医療や予防医療にも力を入れている。また病院保健師は、介護保険や福祉事業所と連携しており、入院患者の退院後のサポートや在宅でのケアプランの作成に関与していた。

雲南市役所には、総務部と健康福祉部に保健師が配属されている。特に、健康福祉部の健康推進課の保健師は地区ごとに担当し、地域住民との密接なコミュニケーションをして必要に応じて他機関につなげ、個々のニーズに合わせたサポートを実施していた。このように市役所に所属する保健師は、各部署に配属されているが、月に一度保健師同士が集まり、情報交換や協議を行っている。この協議により、地域の課題に対して一層効果的な対応ができ、より良いまちづくりに貢献しているのだと感じた。

雲南市で働く管理栄養士は、雲南市立病院の管理栄養士、雲南市役所の管理栄養士のどちらも雲南の住民の方の特徴を把握しそれに合わせた栄養指導を行っておられた。今年度の雲南市役所では母子保健、成人保健(青壮年期)と成人保健(高齢期)の3点を重点的に取り組んでおられた。また、職員の方々は日頃から住民の方々と交流し、良好な関係を築いておくことにより、栄養指導をやりやすくしておられることが分かった。雲南市の管理栄養士は2人しかいないため、保健師やその他の様々な職種と連携し、業務を行っておられると学んだ。

5, 今後の地域医療の在り方

雲南市のフィールドワークを通して、私たちが考える地域医療の在り方のキーワードは、積極性を持ち、支え合うことだ。実際に雲南市での地域住民の方々の関わりを見て、住民同士が日常生活の中で支え合い、健康を維持・増進していると感じた。雲南市の現状として、高齢化の進展に伴い、高齢者の医療需要がますます増加することや担い手の高齢化による医療体制の維持の困難も考えられる。そのため、地域医療で求められるのは、病気や健康問題を治療することだけでなく、予防医療や健康増進の実施、医療・福祉・保健の連携であると考え。住民同士での支え合いにより、疾病を予防、または悪化を防ぐことで、医師不足や病床不足などにも対応できるのではないかと考える。

住み慣れた地域で最期までその人らしい生活を送るためには、ひとり残さず地域全体で健康に取り組んでいくことが大切だと感じる。その中心となる私たちも地域の情報や医療の在り方を学び続ける必要があると考える。



飯南町・ 飯南町立飯南病院

<看護学科>

安達 美衣菜 木佐 彩乃 園山 優空 松本 清香
三崎 陽菜 柳田 麗

<健康栄養学科>

大城 彩綺 坂本 茉歩 下野 結 藤原 彩夏
森山 葉月

<担当教員>

谷村 綾子 准教授

令和6年度フィールド学習日程表

月日曜	班	時間(所要時間)	体験内容	場所
8/22 (木)	全員	～9:20着	移動(⇒保健福祉C)	
		9:30発	移動(⇒もりのす)	
		10:00～12:30 (150)	森林セラピー体験	もりのす
		12:30～13:00 (30)	昼食	もりのす
		13:00発	移動(⇒保健福祉C)	
		13:30着	10分間休憩・準備	保健福祉C
		13:40～13:55 (15)	オリエンテーション①	保健福祉C
		13:55～14:10 (15)	オリエンテーション② 病院説明	保健福祉C
		14:10～14:40 (30)	オリエンテーション③ 看護部説明	保健福祉C
			10分間休憩	
		14:50～16:20 (90)	院長講義	保健福祉C
	16:30発	移動(保健福祉C ⇒山柱)		
8/23 (金)	全員	8:30発～8:45着	移動(山柱 ⇒保健福祉C)	
	全員	8:50～9:00 (10)	管理栄養士の業務について	保健福祉C
	1班	9:00発	移動(⇒福島邸)	
		9:25～11:10 (105)	保健福祉実習(長生き体操)	福島邸(赤名)
	2班	11:10発	移動(⇒保健福祉C)	
		9:15～9:45 (30)	保健師業務について	保健福祉C
		9:50発	移動(⇒大しめ縄館)	
		10:00～11:20 (80)	しめ縄説明・体験	大しめ縄創作館
		11:30発	移動(⇒保健福祉C)	
	全員	12:00～13:00 (60)	昼食	保健福祉C
	1班	13:00発	移動(⇒大しめ縄館)	
		13:10～14:30 (80)	しめ縄説明・体験	大しめ縄創作館
		14:40発	移動(⇒保健福祉C)	
		14:50～15:20 (30)	保健師業務について	保健福祉C
	2班	13:00発	移動(⇒野苺自治会館)	
13:15～15:00 (105)		保健福祉実習(長生き体操)	野苺自治会館	
	15:00発	移動(⇒保健福祉C)		
全員	15:20～16:20 (60)	まとめ(グループワーク・発表)	保健福祉C	
	16:20発～17:30着	移動(⇒大学)		

今回の飯南町・飯南町立飯南病院でのフィールド学習では、主に四つの内容について体験・出席させていただいた。一つ目は森林セラピー、二つ目は病院・保健師・看護師・管理栄養士等の業務についての講義、三つ目はしめ縄づくり体験、四つ目は長生き体操である。これらの体験を通して私たちが学んだ四つの点について挙げる。

<地域でのつながりの重要性>

飯南町では、どこへ行っても私たちのことを暖かく迎えてくださり、この人々の暖かさが地域医療へも結びついていると感じられた。長生き体操や「健康にい〜にゃん週間」など様々なイベントも行われ、これらのイベントに町民が集まりコミュニケーションを取り合うことが心の健康へとつながり、健康状態の把握や心の健康の維持という形で地域医療にも貢献していると考えられた。ご講義で



は保健師の先生から第一印象が重要であると教えていただき、これも地域でのつながりを強固なものにするために大切なことなのだと感じた。飯南町ならではの方法で人々との繋がりを大切にし、笑顔で一日を過ごすことが健康増進になり、健康寿命の延伸につながることを学ぶことができた。

<飯南病院・診療所・保健福祉センターにおける連携>

飯南病院と飯南町内の診療所、保健福祉センターの間では十分な連携があり、病院や診療所では飯南町に合った医療が行われ、総合的な医療体制を通して、医療という観点から健康や生活などの地域全体を支えていた。飯南病院では地域医療をより充実させるために、プライマリケアの理念であるACCCA(A：近接性、C：包括性、C：協調性、C：継続性、A：責任制)を発展させ、飯南病院独自の「地域医療・総合医の10か条」を設けている。QOL向上を使命とし、24時間365日体制の、総合医を軸とした地域の救急告示病院であり、様々な分野の技術や知識がある総合医が身近なかかりつけ医となっている。これらのことを踏まえ、地域の方々が訪れやすく、いつでも診てくれる病院づくりが、飯南町住民の安心や健康な暮らしにつながっているのだと感じられた。



<多世代を対象とした管理栄養士による活動>

飯南町において管理栄養士は、乳幼児から高齢期の方までの幅広い世代に多くの役割を果たしている。食を介して健康課題である糖尿病などのリスクを減らしたり、食の伝統を通して地域住民のつながりを深めたりすることができるため、住民のニーズに応えつつ、より多くの方が健康に生活するための手助けを管理栄養士が担っていると感じた。また、今回のフィールド学習では、保健福祉センターで四か月健診が行われており、これから離乳食が始まる時期であるため管理栄養士の先生によって離乳食に関する相談会が行われていた。この中で、実際の離乳食のレトルト食品や月齢に合わせた食品サンプル、子どもも母親も食べられるおやつレシピと試食用おやつを見せていただいた。これらのことから、栄養相談や献立作成だけでなく、離乳食に向けた相談会や離乳食教室なども地域の方のために行われているということを知ることができた。

<対象者に寄り添った健康のための活動>

ベジチェック隊などの活動では、こちらからの無理強いはいらない、対象者ができることを一緒に考える、伝える側も楽しめるかという三つのことを大切に、対象者に寄り添って、実施者も対象者も明るく気軽に健康について考えられることを重要と捉えていることを学んだ。私たちがベジチェックを行い、ベジチェック隊の方々が実際に保健福祉センターで行っている活動を紹介して下さった。測定で出た数値によって、野菜が不足している人には励ますように、野菜が取れている人にはほめるように、それぞれに合わせた声掛けをして下さることで、野菜を取ることの大切さや健康づくりをより身近に感じることができ、健康を意識することができたため、このようなやりとりが地域の方々との交流でも行われていることで多くの方々が健康を意識することにもつながっているのだろうと考えられた。



<まとめ>

今回のフィールド学習で学んだことを通して、これからの地域医療の在り方として、新型コロナ禍の影響で地域内交流の減少がみられる中で、飯南町だからこそ、地域内交流や飯南病院における地域医療の将来を支える人材が非常に重要になってくるのではないかと考えた。

長生き体操に参加した際には参加者に合わせた声掛けを行っていたり、地域の方々同士で「健康にい〜にゃん相談会」に一緒に行こうというような会話があたりと、地域内での医療従事者と地域の方、あるいは地域の方同士のつながりが深まっていき、さらに充実した地域医療の提供につながっていることがうかがえた。また、飯南病院の院長先生がご講義において、地域包括ケアの未来を考えることは地域社会の未来を考えることに繋がるとおっしゃっておられたことから、飯南病院で行っている研修医の受け入れ等の地域医療の将来を支える人材育成が、飯南町の未来のためにも繋がることを学ぶことができた。他にも、今回のフィールドワークにおいて体験した森林セラピーやしめ縄づくりなど、飯南町ならではの自然や伝統を生かした施設を活用することで、地域の活性化と住民の健康状態の両方を充実させられることがわかり、これらも地域医療につながる要因の一つであると考えている。



今回のフィールドワークを通して、たくさんの貴重な体験をさせていただく中で、それぞれの地域に合わせた地域医療を行うことができるように地域の特徴を学び、その地域で何が重要なのかを理解し、行動することが大切だと学ぶことができた。また、フィールドワークで学んだ四つのすべてにおいて、他者とのつながりが非常に重要だと感じられたため、年代でのコミュニケーションをとることはもちろん、それだけでなく幅広い世代の方々とコミュニケーションを取り、相手に合わせた接し方ができるように努めていきたい。

川本町・
社会医療法人仁寿会
加藤病院

<看護学科>

加藤 咲智 重山 瑞希 庄見 色葉 福原 嘉恋
堀江 優菜 森 音葉 山本 真輝

<健康栄養学科>

川島 悠愛 岸 詩乃 黒崎 七菜 河野 ほのか

<担当教員>

加藤 典子 准教授

R6島根の地域医療フィールド学習(川本町・加藤病院)

学習日	時間	内容	看護学科		健康栄養科(4名)					
		川本町役場 ●の内容に参加	1班(3名)	2班(4名)	1班(2名)	2班(2名)				
	AM	9:30	到着							
		10:00~12:00	オリエンテーション場所: 加藤病院 更衣研修棟							
		12:00~13:00	昼食							
9/10 (火)	PM	13:30~14:30	●地域ケア会議 (悠邑ふるさと会館)	●	●	●				
		14:30~16:30					●データヘルス計画に ついて・グループワーク	●	●	●
		16:30~17:00								
9/11 (水)	AM	8:30~9:00	●オリエンテーション	●	●	●	●			
		9:00~12:00	●サロン(三原まちづくり センター)	●				●		
		12:00~13:00	昼食							
	PM	13:00~	まとめ場所: 加藤病院 更衣研修棟							

川本町での学び

1. はじめに

私たちは9月10日から11日にかけて川本町でフィールド学習を行った。川本町は人口3003人（2024/8/31現在）、高齢化率は46.1%の高齢者が多い地域である。以下に5つの視点でまとめ、最後に今後の地域医療の在り方について考えたので報告する。

2. オリエンテーション

私たちは、オリエンテーションとして管理栄養士・訪問看護師・保健師・仁寿会の加藤理事長に話をいただいた。他の病院では低栄養に該当する患者のみNSTカンファレンスを行うが、加藤病院では、全ての患者を対象に行うことが特徴である。小さい町であるからこそ顔がわかり、地域全体・住民同士で心配りや見守りを行っていることを学んだ。仁寿会加藤理事長の話の中で、川本町の大きな課題として人口減少・少子高齢・移動困難3点があげられていた。その中で、働く人が健康であることが重要で、質の高い医療の提供と患者さんの満足度の高まりに繋がる取り組みの大切さを学んだ。

3. 三原のサロンでの学び



川本町には4つのサロンがあり、その中の三原地区にあるサロンに参加した。三原の郷未来塾・たすけあい川本の事務局長である平田さんにお話を伺った。このサロンの目的は介護予防と生活支援であり、特徴は、住民が地域のことを真剣に考え主体的・積極的に取り組んでいるところである。この地区のサロンをモデルにして、ほかの地区でもまちづくりが進んでいった。活動内容として、年に一

回の健康教育や、本や映画の自主製作、コーヒーの日やスープの日といった地域のつながりの場の設営などがある。今回は健康教育に参加した。保健師が川本町の住民の特徴として肥満や喫煙率の高さから、血管の老化予防をテーマに話をしていた。今回、地域づくりはみんなで作るもの、言葉にすることで実感して共感することができるということを学んだ。

4. 地域ケア会議・データヘルス計画での学び

地域ケア会議には、個別課題解決・ネットワーク構築（多職種間での関係構築）・地域課題発見・資源開発（支援に活用できる人、物など）・政策形成の5つの役割がある。今回の会議は、個別課題解決・ネットワーク構築の2つが中心であった。管理栄養士、薬剤師、ケアマネージャー、保健師、社会福祉士などが課題の解決に向けて、専門的な視点から取り組んでいた。形式に縛られた会議ではなく、川本町の特徴として和やかな雰囲気でも職種が専門的な知識を出し合いながら、一つの職種では出せない解決策を出すことが出来ると学んだ。



データヘルス計画は、特定健康診断をもとに健康課題の明確化、課題解決の計画立案、実施を行っている。今回私たちは、川本町の課題である運動不足と喫煙の解決策について考えた。これを通して、川本町には支援制度が充実していることや健康意識には格差に向けての取り組みの計画について学んだ。

5. 訪問看護での学び

川本町での訪問看護の現状として、訪問看護を必要とする人数 53 名のうち、独居・老々介護が半分以上である 32 名を占めている。今回私たちは、川本町内、桜江町の訪問看護に同行させていただいた。訪問看護ではバイタルサインの測定だけではなく、入浴介助や服薬確認、理学療法士が行うようなストレッチなどの幅広い援助を行っていた。訪問看護師の話では、ヘルパーなどの職種と看護師の行うことの線引きが難しい事や人数が少ないうに川本町では訪問看護ができる病院が加藤病院の 1 つしかないため、移動時間が長く一日に訪問ができる件数が限られていること、限られた時間で対象者だけでなく家族のケアも行う必要があることの大変さがあった。これらを通して、看護師だけではなくヘルパーや医師、理学療法士などの多職種連携で情報を共有しながら質の高いケアを提供していること、対象者やその家族に接する際に方言を交えたり、丁寧であるが親しみやすい話し方をしたりすることでなんでも話すことが出来る関係性を築けていると学んだ。

6. 居宅療養管理指導での学び

今回私たちは川本町の居宅療養管理指導に同行させていただき、グループホームと対象者の居宅に訪問させていただいた。グループホームでは栄養状態や飲み込みの状態をスクリーニングし、低栄養のリスクがないか調査した。スクリーニングの際に、対象者一人一人に合った声のかけ方をしていたことで意思疎通を図りやすくする工夫をしていた。また、グループホームの職員の方の管理があっても気づかないうちに低栄養になる可能性はありと分かり、定期的な訪問が大切であると学んだ。在宅の栄養指導では、脱水症予防のために適度な水分補給をしているかの質問や身の回りにコップやペットボトルが置いてあるか確認する様子が見られた。また、患者さんの食事記録とごみ箱や冷蔵庫の内容にズレがないかも把握していた。同行訪問を通して、効果的な栄養指導のためには広い視野を持つことが重要だと学んだ。

7. 今後の地域医療の在り方

川本町でのフィールドワークを通して、少子高齢化が進んでいき、働き手が減少していくがニーズは多様化している。そのニーズに応えるために ICT 技術の活用や多職種連携、地域全体の見守りなどを行うことで医療の支援や予防につながる。これらが達成できることで個人が望む最後を迎えることが出来るかと考える。また、地域医療の一環である在宅活動があまり認知されていないことが課題であると知った。川本町では、積極的に在宅医療や訪問指導に取り組んでいることが分かった。さらなる認知度の向上を図るためには、介護支援のみでなく介護予防・健康維持の段階から住民が集まる場に医療関係者や行政の職員が出向き、指導や住民と関わり合うことが必要であると考えた。

津和野町・ 医療法人橘井堂 津和野共存病院

<看護学科>

岩垣 澄音 大島 杏奈 滝川 凜 田中 愛梨
寺井 咲希子 新田 彩海 室田 晴香

<健康栄養学科>

田邊 彩絵 山根 麗奈 勝見 紗織

<担当教員>

澤 幸子 准教授

フィールド学習内容

月日	時間	内容
9/18 (水)	12:45着	津和野着
	13:00~13:15	オリエンテーション
	13:15~15:20	各部署へ移動 <ul style="list-style-type: none"> ・介護老人保健施設せせらぎ(2名) ・訪問診療(1名) ・訪問看護(2名) ・通所リハビリテーション(2名) ・厨房(3名) ※津和野共存病院(時間が空いた場合に見学)
	15:20~15:30	休憩
	15:30~16:30	巡回診療説明
	16:30~16:50	当日反省会
	9/19 (木)	8:20着
8:40~9:50	地域医療連携センター活動概要(質疑含む) (連携・訪問診療・訪問看護・入退院支援等) 地域包括支援センター活動概要(質疑含む)	
9:50~10:00	移動	
10:00~10:10	講義(健康福祉課 土井課長)	
10:10~10:25	移動	
10:25~11:30	ふれあいの場	
11:30~11:45	移動	
11:45~13:00	昼食	
13:00~16:30	津和野町探索 <ul style="list-style-type: none"> ・太鼓谷稲成神社 ・堀庭園散策 ・旧畑迫病院 ・森鷗外記念館 ・殿町通り他 散策 	
9/20 (金)	8:30着	集合
	8:45~10:30	まとめ及び記録
	10:30~11:30	報告会
	11:30~12:00	終わりの会(記念撮影等)
	12:00発	帰学

1. 津和野町について

津和野町は、島根県の南西部に位置する町で山口県との県境にある。「山陰の小京都」として知られており観光地として多くの人を訪れる町である。山間部に位置し、清流・高津川が流れる美しい自然が特徴である。人口は約 6,700 人で、そのうち 50% を 65 歳以上の高齢者が占めている。

フィールド学習では、津和野共存病院や在宅医療などの見学、また多職種の方からの講義などを通して津和野町の医療の現状や取り組みについて学んだ。その他にも、森鷗外記念館、太鼓谷稲成神社、旧畑迫病院などを訪問し、津和野町の文化や歴史についても知ることができた。

2. 各部署見学の概要

○訪問診療

訪問診療の見学では 3 軒の訪問に同行した。問診はカルテに沿って行われており、対象者の情報を細かく聴取しておられた。また、注意すべき事は相手に伝わるまで繰り返しお話されていた。対象者に合わせた対応ができるのは、それぞれの対象者のことをしっかりと理解されているからだと感じた。また、今回訪問した方は薬を忘れずに飲んでおられ、これは医療者と対象者が深く丁寧に関わり合っているからだと感じた。

○訪問看護

1 人の高齢者の方の訪問に同行させていただいた。訪問看護師の方は、他愛もない会話を通して健康管理や日頃の困りごとの把握、薬の管理を行っておられ、対象者に寄り添った生活の場での看護を提供しておられた。また、連絡ノートを利用して多職種と情報共有しながら様々な視点から対象者を支えておられることを知った。高齢者の多い津和野町では 1 人で悩みを抱えておられる方も多いため、訪問看護師の存在はとても重要だと実感することができた。

○通所リハビリテーション

日原にある通所リハビリテーションに訪問させていただいた。要支援 1,2 と要介護 1~5 で分かれてリハビリを実施されていた。津和野町にある唯一の通所リハビリテーションであるため、利用者の居住地区は広範囲にわたることを知った。リハビリは普段の生活の延長であるため、自宅でも継続してできることを目標としておられた。利用者一人一人が日常生活で困っていることを把握し、それに応じたリハビリを考え実施していくことが大切だと感じた。

○介護老人保健施設

ご利用者の在宅復帰を目標とし、リハビリスタッフの方や、栄養課、看護師が連携されていた。また、高齢化率が高く老々介護になっている家庭が多いことから、家族とも連絡を取りながら関わっていくことが必要になると伺った。利用者の方とも話す機会を与えていただき、聞き取りやすい話し方を心がけることや、利用者の方の普段との違いに気づく視点を

持ちながら関わっていくことが大切であると学んだ。

○厨房

アレルギーや嚥下機能に応じた食事形態の選択、嗜好への配慮をされていることを通して、利用者の方一人一人に寄り添った食事を提供していると知ることができた。また少ない人員と設備の老朽化という課題がある中で、いかに効率的に業務を行うかを日々考え工夫をしておられることを学んだ。

3. 巡回診療について

津和野町では、住み慣れた家や地域で最期まで安心して暮らせるまちを目指すために、コミュニティドクター、コミュニティナース、生活支援コーディネーター等がチームで支援活動を行っている。また、それは診察や治療の時間としてだけでなく、人とつながる大切な場になっていること、その活動自体がまちを元気にすることを知った。このことから、地域包括ケアシステムの重要性を再認識できた。

4. ふれあいの場



津和野町役場主催の高齢者サロンを見学した。保健師による健康相談や歯科衛生士によるお口の健康チェックが行われていた。参加者の方々は、この集まりをとっても楽しみにしておられると仰っていたことが特に印象に残っている。このような活動が住民の健康を支え、住民同士がつながる機会を提供していると学んだ。

5. 今後の地域医療のあり方

誰一人として置いて行かないような医療と介護を提供できることが今後の地域医療の在り方ではないかと考える。地域の集まりを活用しながら、多職種で連携を取り医療や介護を提供することが大切である。特に1人1人の健康寿命を伸ばしていくことを念頭に、地域医療体制をつくっていくことが大切である。

6. おわりに

津和野町での学びを通して、人と人が支えあいながら生活していくことの大切さ、これからの医療に求められること、津和野町の文化や歴史を学ぶことが出来ました。津和野町を歩いているとたくさんの方が私たちに話しかけてくださり、皆さんの温かさを肌で感じました。津和野町で学んだことや感じたことを大切に、これからの学習に活かしていきたいと思っております。本当にありがとうございました。



隠岐の島町・ 隠岐広域連合立 隠岐病院

<看護学科>

池田 愛華 大庭 愛結 景山 萌栄 上別府 史帆
小杉 和湖 榊原 そら

<健康栄養学科>

青木 ひなた 井野 沙奈江 松本 奈緒 道橋 桃香

<SA>

吉竹 千乃

<担当教員>

小川 智子 講師

島根の地域医療 隠岐の島町フィールド学習スケジュール

日 時	1班（学生：6名 SA含）	2班（学生：5名）	備考
9月10日 6:40	大学発		大学マイクロバス
9:00	七類港発		フェリー
11:30	西郷港着		
	港まわりで各自昼食		
12:40	西郷港発		タクシー
	宿泊施設に荷物を置いて昼食・隠岐病院へ		
14:00 16:30	隠岐病院 OR・病院見学		
17:00	スーパーへ買い出しして宿泊施設へ		タクシー
18:00	宿泊施設で夕食づくり		
	一日の振り返り		
9月11日 8:30	地区踏査 隠岐病院を經由して 都万方面へ	地区踏査 隠岐病院を經由して 五箇方面へ	行：路線バス 帰：タクシーor 迎え
12:00	隠岐の島町役場にて昼食		
13:00	港町地区 健康教室 健康講話・ベジチェック など		
16:30	隠岐の島町 OR		
17:30	宿泊施設に移動		タクシー
18:30	交流会準備 交流会		
9月12日 9:30	宿泊施設でまとめ・片付け・自由行動		タクシー
13:00	振り返り（隠岐病院）		
14:30	西郷港へ移動後・自由行動		
15:10	西郷港発		フェリー
17:35	七類港着		大学マイクロバス
19:00	大学着		

フィールド学習のまとめ

フィールド名 隠岐の島町・隠岐病院

メンバー 看護学科：池田愛華、大庭愛結、景山萌栄、上別府史帆、小杉和湖、榊原そら

健康栄養学科：青木ひなた、井野沙奈江、松本奈緒、道橋桃香

①住民の生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。

隠岐の島町の住民の方からお話を聞くと、病院や診療所、スーパー、学校もあり、空港があるため飛行機で行き、そこから短時間で様々な場所へ行くことができる。しかし、町内のバスの本数が少ないことを不便に感じておられた。地域の方は親戚のように仲がよく、車を使わなくなったお年寄りは近所の方が車で出かける際に一緒に乗せてもらうこともあるそうだ。このように住民同士でお互いのことを理解し合っていて互助がしっかり構築されていると感じた。

②住民の生活や文化と健康課題との関連を認識する。

隠岐の島町の年間出生数は 80 人程度であり、高齢化率は 40%以上に達している。入院患者に多い疾患を調べると、誤嚥性肺炎、慢性心不全、尿路感染の 3つであることを学んだ。まずは慢性心不全の予防政策に取り組もうとされている。また、隠岐の方々は漬物などの塩分濃度が高いものを昔から食べており、高血圧の方が多い。このことから「ちょこっと減塩」という取り組みが行われている。都万地区など住民の生活地域によっては、隠岐病院に行く交通手段が少なく、軽度外傷の処置や予防接種は行えるが、お産や外傷手術ができないというように、診療所で行える医療処置には限界がある。

③住民の生活を支える保健医療福祉施設や行政及び教育機関の役割を理解する。

本土と比べると病院や町の規模は小さいが、小さいからこそ地域の方々と交流できるイベントを開き、医療従事者と患者という関係だけでなく、同じ島の住民として気軽にコミュニケーションをとれるような機会を設け、信頼関係を構築している。また、「健康教室」を開き、定期的な血圧測定やベジチェックを行うことによって地域の方の疾病を予防している。それぞれの職種がそれぞれの役割を担い、包括的に地域の健康をサポートしている。



図1 健康教室での地域の方との交流



図2 「隠岐楽体操」

④住民の生活を支える専門職(看護師・管理栄養士等)の役割や機能を認識する。

隠岐病院では1つの専門の科のスペシャリストより色々な科に幅広く対応できるジェネラリストな専門職が求められる。限られた人員で隠岐の島町の健康を支えているため、様々なライフステージにある人々を対象にそれぞれ異なるケアを提供しなければならない。また、診療所でも薬の処方や臨床検査などの広い分野の知識と技術が必要になる。



図3 ヘリポートでの他の医療機関との連携についてのお話



図4 隠岐病院の医療システム等についてのお話

⑤保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通じた、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。

地域包括ケアシステムを行うために隠岐病院や市役所などの行政においては、医者や看護師、管理栄養士はもちろん、保健師や社会福祉士などの様々な職種が連携しあっている。また、医療事務は委託の方が担っており、様々な関連機関が協働しあって地域の医療を支えている。地域医療においては立ち上げ支援のみならず、無くならないための継続支援を大切にしなければならない。隠岐の島の素晴らしい風習や文化はもちろん、医療や行政の政策なども絶えないように継続していくことも大切であると考えます。

⑥住民の生活を支えるための今後の地域医療の在り方について考察する。

これから進む少子高齢化に伴い、医療従事者の数が減ることが考えられる。その中で、医療従事者の人手不足が起きると、隠岐の島の医療のような広い分野に従事できるような看護師が必要となると考えられる。このため、隠岐の島の医療の在り方は将来的に進んだ医療であると感じた。隠岐の島町の方も、市内から離れた場所に住んでいる人は病院までの交通手段が限られており、特に高齢者では自家用車を運転する人も少なく、家族や親戚など周りのサポートなしには医療体制が確保できない事態が発生するという問題がある。このような問題を抱える中で、地域医療において訪問看護や往診などの制度を活用し、診療所がない過疎地域にも医療が行き渡るような環境をつくる必要があると考える。社会資源が少ないことをマイナス面と捉えるのではなく、関係機関同士の連携や協働を強め、住民自身が社会資源を作り上げ、それを医療職種が活用できる形を形成していく強みがあると感じた。そして、医療福祉介護スタッフも含んだ住民全体が一丸となって地域の健康を保っていくことが重要であると考えます。

お忙しい中、ご指導いただきました隠岐の島町役場・隠岐病院の皆様、隠岐の島町民の皆様には深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

西ノ島町・ 隠岐広域連合立隠岐島前病院

<看護学科>

大西 未紗 椽木 凜 中村 福 福原 凜々花
宗川 芽以 米山 直花

<健康栄養学科>

石波 心 柴田 千歩 陶山 未友羽 田尾 優奈

<SA>

山根 瑞紀

<担当教員>

田原（阿川） 啓子 准教授

フィールド学習内容

月日	時間	内容	
		看護学科（6名+SA1名）	健康栄養学科（4名）
9/4 (水)	6:30	大学→西ノ島町 移動	
	12:27	西ノ島役場到着	
	13:30	オリエンテーション 西ノ島町の概要、西ノ島町の保健活動	
	15:00	町内視察	
	17:00	宿泊施設へ移動	
9/5 (木)	8:09	島前病院到着	
	8:20	病院ミーティング	
	9:00	病棟・外来	移動
	10:00		行政栄養士について 社会福祉協議会（配食サービス施設）見学
	12:00	昼食・休憩	
	13:00	オリエンテーション	移動
	14:00	訪問看護・往診・訪問リハビリテーション	健康教室 終了後、島前病院へ移動
	16:00		島前病院（給食施設）の見学 栄養士の講話等
17:25	終了→宿泊施設へ移動 一日の振り返り・翌日の確認		
9/6 (金)	9:52	西ノ島町役場到着	
	10:00	まとめのカンファレンス	
	11:50	昼食・休憩	
	13:36	島前病院到着	
	13:45	院長講話	
	15:00	終了 西ノ島町→大学へ移動	

1. 西ノ島について

西ノ島は、人口 2515 人、世帯数 1478 世帯、高齢化率 48.8%、出生数 12 人（R5 年度）という少子高齢化の地域である。地域の暮らしは、病院やスーパーの数は少なく、物資の値段は高額でキャベツが 600 円であった。また、居住地には坂道が多く車やバスといった交通手段の確保が重要と感じられた。交通の要であるバスでさえも 1 時間に 1~2 本程度の運行であった。一方、バスの昇降時に苦勞されていた住民の方に対しては、乗車中の住民の方々が自ら介助をされるなど助け合いの姿が様々な場面で見られ、住民の方のおすそわけ（魚など）の会話などからも、日常的な助け合いの関係性が伺えた。西ノ島の方々はお互いに支え合おうという気持ちがとても強く、思いやりの心をもった方々であふれており、この支え合いや人柄の良さが高齢になっても地域で安心して生活していている 1 つの要素となっているのではないかと感じられた。人口が少ない島であるからこそ地域全体の把握がしやすく、住民やその住民の詳しい家族関係、生活などの把握が可能となり、常に地域全体で支えている状態であるということを学ぶことができた。



2. フィールド学習の内容と感じたこと、そこから得た学び

島前病院の看護部長から「患者さんに興味をもつことや患者さんなしで看護はできないから、まずは患者さんに感謝を示すのが大事だよ。」という話があり、このような考えを一生忘れずに患者さん中心の看護を大事にしていきたいと強く思い直した。島前病院の看護師は業務が忙しくても、患者さんの部屋に入った途端、忙しい素振りは一切見せなかった。そのため患者さんもご家族も遠慮なく体調のことや心配なことなどを看護師に話すことができていた。患者さんの診察が終わった時にも「またいつでもきてくださいな」という言葉かけをされていた。看護師のこのような患者さんを思いやる行動や言動の 1 つひとつは、住民の方々が我慢しないですぐに島で唯一の病院にやってくることを可能にし、このような安心して医療が受けられることが、病気の早期発見・治療に良い影響をもたらし、健康を守ることができているのだということ_{を学んだ}。また、病院内では、医師が上で看護師が下という上下関係があるようなイメージがあったが、実際はそういうことはあってはならず、医師と看護師などの医療従事者が対等な関係で誰もが意見を言え、患者さんにとって最善なケアを様々な方が積極的に提案することが大切だと感じた。

役場の保健活動である健康教室では、骨折防止の観点から骨粗鬆症の教室が行われた。実際に参加した住民1人ひとりの骨密度測定が行われ、自分がどのくらい骨粗鬆症のリスクがあるかをひと目で理解できるプログラムとなっていた。参加した住民は後期高齢者の方が多くみられたが、自立して歩ける方が多かった。医師の講義をメモしていたり、健康教室にいつも参加している方だったり西ノ島の住民の方は健康意識が高いと感じた。また、医療従事者や行政の方が住民の方の名前を覚えておられ住民の方と楽しくお話しされている姿をみて、堅苦しくない親しみのある関係を構築されていることを実感した。医師の方は「病院は一つしかないから、もし自分達が冷たい態度をとると住民の方は孤立してしまう。だから住民の方に愛をもって接している。」と話されていた。役場の方も同様に地域全体で同じ方向を向いて支援をされていることを学んだ。また、住民への栄養面からのサポートとしては、配食見守りサービスが印象的であった。西ノ島はスーパーや商店がない地区や買い物が困難な方が多く存在し、その方々への配食サービスを行うことで住民の健康状態や安否確認ができる。一方、西ノ島には労働人口が少ないことを背景に配食はボランティアで行っていた。このように地域の方同士が密接に関わり、高齢化や働く世代の不足の問題に対して対応していることを実感した。

3. 今後の地域医療のあり方について

西ノ島では地域の住民と専門職の関係性の距離が近く感じられた。住民が安心して生活できるための医療を継続的に提供することや、住み慣れた場で最期を迎えることができる在宅医療を進め、それを地域全体で支える環境づくりの推進がなされていた。住民が安心できるためにも「病院」と「地域」が密接な連携を取り、病院という



存在が地域の中でも敷居が低い状態で維持されることが重要と考えられる。これらを遂行させるためには、地域に関わる全ての人が協力して住み慣れた場所でその人にとって幸せな生活が送れるようサポートしていく必要があるのだと学ぶことができた。

4. 謝辞

フィールド学習を通して学んだことをこれからの大学生活に活かしたいと思えます。最後になりましたが、お世話になった皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

益田市・ 益田地域医療センター 医師会病院

<看護学科>

伊藤 光希 桐原 七海 須田 沙雪 又賀 花菜
村上 沙弥香 森山 玲衣 渡辺 胡桃

<健康栄養学科>

和泉 帆南 今井 遥奈 山下 夏奈 馬場 真帆

<担当教員>

小田 美紀子 教授

フィールド学習内容

月日		時間	内容		
			A (4名)	B (4名)	C (3名)
9/4 (水)	益田地域医療センター 医師会病院	10:00	益田地域医療センター医師会病院到着		
		10:30	オリエンテーション		
		11:00	介護医療院ふたば 口腔・リハ、介護技能実習	栄養科 病棟での嗜好調査	
		12:00	昼休憩（患者食を用意・治療食（ムース・おかゆ等）の試食も）		
		13:00	栄養科 病棟での嗜好調査	リハ科 病棟・訓練室での訓練見学	
		14:00	回復リハ病棟 カンファレンス/ ラウンドなど	栄養科 病棟での嗜好調査	包括ケア病棟 カンファレンス/ ラウンドなど
		14:55	会議室集合・休憩		
		15:10	グループワーク（情報共有・課題協議） *若手職員・認定看護師等と一緒に		
		16:30	各グループ発表（各5分×3）、 質疑応答・若手職員感想等（各3分×3）、学生からの全体質問等		
		17:00	終了		
9/5 (木)	益田市	8:30	オリエンテーション		
		8:45	豊川公民館へ移動		
		9:00	市民とのふれあい、草取り 茶話会、健康講話など		
		11:30	保健センターへ移動		
		12:00	昼休憩		
		13:00	講話まちづくりについて 連携のまちづくり推進課		
		13:45	益ます元気教室 益田市医師会長 松本祐二先生講演 （受付、各種測定の補助等）		
		15:40	フィールドワーク振り返り		
		16:00	終了		

「益田市でのフィールド学習を通して」

フィールド：益田市・医師会病院

馬場真帆 伊藤光希 桐原七海 須田沙雪
又賀花菜 村上沙弥香 森山玲衣 渡辺胡桃
和泉帆南 今井遥奈 山下夏奈

○益田地域医療センター医師会病院

☆回復リハ病棟「生命を継ぎ足すのではなく、人生に豊かさと彩を」

- ・益田医師会病院は回復期病院で多職種が連携し、業務を行っており職種別に多方面から患者さんに関わり、家庭環境、性別、年齢、性格などにより、患者さんの目指す目標まで回復できるよう1人ひとりにあった治療やリハビリテーションを行いサポートする姿勢が見られた。カンファレンスで退院後の生活も視野に入れ、患者さんの情報共有を密に行っていた。へき地診療を行い、住民の健康の支えになっているため、住民にとってなくてはならない存在となっている。また、益田市の高齢者が多いという実態とニーズに応じ、歯科衛生士が常勤し口腔ケアを徹底していた。個人に応じたリハビリテーションを行うことで患者の可能性を広げることが仕事だと理学療法士から学んだ。患者さん中心で考え、今まで通りの生活が可能な限りできるようサポートしていた。



☆栄養科



- ・管理栄養士は食を楽しむことを大切にしており、食事は患者さんの生きがいに繋がる効果があることを学んだ。食の彩り、ミキサー食であっても魚は魚の形にする工夫、行事食、バイキングなど約60種類の約束食事箋を患者さんの様態に合わせ看護師と連携し選定することで、一人ひとりに応じた食事提供が可能となっていた。

☆包括ケア病棟

- ・地域包括ケア病棟とは急性期医療を終了し、すぐに在宅や施設へ退院するには不安のある患者に対し、在宅復帰に向けて入院療養やリハビリを行い、退院支援を行う病棟のことである。包括ケア病棟は一般的に入院期間の限度を60日としているが、益田医師会病院の包括ケア病棟は40日以内を目標としている。60日を過ぎてしまった場合、一般病棟へと戻されるが、今までそういった事例はないとのことであった。また、カンファレンスを週に2回、1時間程度、看護師長、ロングリーダー、プライマリーナース、セラピスト(理学療法士、作業療法士、言語聴覚士)、社会福祉士を交えて行っていた。カンファレンスでは、患者の基本情報、それぞれの職種でたてた目標(長期目標・短期目標)、利用できる

サービス、自宅の部屋の構造、構造から予測できる退院後の動線、退院が40日を過ぎるかどうかなどを話し合っていた。利用できるサービスや自宅の部屋の構造などまで調べて話し合っていることから、患者一人ひとりのことまで考えられていると感じた。このことから、包括ケア病棟では、多職種で連携し、ささいな情報でも共有し、退院支援を行うことが大切だと考えた。



〈感想〉

- ・益田市のニーズにあった治療を行っていることが印象的であった。今後どの地域でも必要になると考えられる。また、職種、地域間での繋がりを感じる事が出来た。多職種連携の大切さを学んだ。あらゆる角度から患者さんを観察しサポートする体制が整っていると感じた。
- ・多職種連携のイメージが大きく変化した。ひとつの動作をするためにも専門家が観察し、PDCAサイクルを行っていた。
- ・延命ではなく、生きがいを与える言葉をかけることが地域医療にとって必要だと学んだ。

〈まとめ〉

- ・人との繋がりがあってこそそのチーム医療や多職種との連携であり、患者と向き合うことの大切さを感じることができたが、その中でも常に対象者が中心にいることを忘れてはならない。また、チームの中心は対象者自身である。対象者に合わせた健康づくり、治療をしており、目標設定も対象者のニーズや人格を大切に行うことが重要である。

○益田市役所

☆草トーク（豊川地区）



・豊川公民館で実施されている草取りで適度な運動や、簡単なクイズ、茶話会、足つぼマットで身体を刺激するなどの活動に参加した。参加者は、年齢、所属に関係なく純粋に会話を楽しみ、月1回の草トークを生きがいと話してくださいました。アットホームな空間で心地よく、互いに元気を与えあっていた。豊川地区が好きだと言う人が多い印象を持った。1回の参加でも満足感があり、豊川地区で楽しい思い出を作ることができた。また、保健師と地域の方との深い繋がりを感じる事が出来た。

☆連携のまちづくり推進課の講話

- ・益田市は人口に偏りがあり僻地が存在すること、合計特殊出生率が増加していることなどの特徴を学んだ。地域魅力化応援隊員や地域マネージャーを各地区に配置し、地域支援が

行われていた。また、地域自治組織の活動を知り、その地域の課題を明確にし、地域を改善する活動のため、住民全員が参加できるようにアンケートなど調査やフォーラムを開催されていた。



☆益ます元気教室

- ・参加者に継続的な健康支援を行うために目標ノートを配布し、達成可能な目標を提案したり、次回の益ます元気教室で評価し合ったりしており、質の良い健康的な生活ができるように支援していた。保健師がその人の健康に役立つ情報を伝達し健康への架け橋として、健康教室を定期的で開催していた。血圧測定でいつもとあまり変わらないなどといった発言が参加者自身からあり、自分の健康に関心がある人が多いと感じた。



〈感想〉

- ・益田市の良いところを他の場所でも広げられたら良いと思った。高齢者に対し、手厚く予防、治療でサポートされていると感じた。
- ・初めて活動に参加する私たちを温かく迎えてくれ、地域の良さを知ることが出来た。保健師は地域の人から地域の事を知ることが出来るため、沢山関わることが大切であると学んだ。
- ・草トークは地域の人限定ではなく、他の所属の人も集まりやすい場所となっており、これからの地域医療・地域保健のお手本になると考える。

〈まとめ〉

- ・健康をつくる・維持するには人と繋がり言葉を交わす、笑うことで心の健康も保たれる。
- ・健康づくりのための環境が整っており、予防が健康寿命の延伸に繋がる。

○今後の地域医療

今後の地域医療のあり方について以下のことを考えた。

- ・人との繋がり、人との会話を大切にすること。
- ・その街、その人について知り一人ひとりにあった医療を行うこと。
- ・僻地などアクセスが不便な人の事も考えて行うこと。
- ・地域との医療連携が大切。
- ・地域の特性に合わせた地域医療を提供する必要がある。しかし、地域の特性というのは常に変化し続けるため、その時々に合わせて体制を確保し、医療提供を継続的に行うことが大切になる。



奥出雲町・ 町立奥出雲病院

<看護学科>

岩崎 楓香 岡田 みのり 飛田 美咲 平野 朱里
村上 優菜 山本 麻央 吉田 倫子

<健康栄養学科>

阿部 一步 今岡 春花 佐野 瑞香 森田 華奈

<担当教員>

吉松 恵子 講師
板持 智之 助教

フィールド学習内容

月日	時間	看護学科 A・B	健康栄養学科	
8/28 (水)	9:00	奥出雲町役場仁多庁舎到着 オリエンテーション (201会議室)		
	9:40	玉峰交流施設、八川コミュニティセンターへ出発		
	10:00	かめさんサロン見学・体験 (玉峰交流施設)	八川地区高齢者サロン見学・体験 (八川コミュニティセンター)	
	12:00	昼食 (合同)		
	13:00	ゆうげ交流センター、八川コミュニティセンターへ出発		
	13:20	小馬木サロン見学・体験 (ゆうげ交流センター)	管理栄養士の業務について講話 (八川コミュニティセンター)	
	15:30	石田豆腐店・豆腐づくり体験 (八川コミュニティセンター)		
	16:50	まとめ (八川コミュニティセンター)		
17:00	終了			
月日	時間	看護学科 A	健康栄養学科	看護学科 B
8/29 (木)	9:00	オリエンテーション (健康センター)		
	9:30	地域連携業務見学 (退院支援などの連携業務)	管理栄養士業務見学	訪問看護同行見学
	12:00	昼食 (健康センター)		
	13:00	認知症ケア (認定看護師による地域連携での活動)		
	14:00	訪問看護同行見学	管理栄養士業務見学	包括ケア病棟業務見学 (多職種カンファレンス中心)
	15:30	振り返り (健康センター)		
	16:30	終了		

地域に暮らす人々を支える地域医療

看護学科 岩崎楓香 岡田みのり 飛田美咲 平野朱里
村上優菜 山本麻央 吉田倫子

健康栄養学科 阿部一步 今岡春花 佐野瑞香 森田華奈

1. フィールドとの交流からの学び

1) サロン見学

健康栄養学科はサロンでミニゲームなどを行いながら地域の方と交流し、実際に地域住民の方と触れ合うことの大切さを理解した。また、高齢者サロンに管理栄養士が参加することで、集団への栄養指導が行えるだけでなく、普段病院には行きたがらない方にも指導ができ、早期発見の機会にもなると理解した。加えて、個々の健康問題だけではなく、その町全体の健康状態や栄養状態の傾向や、現在行われている地域での活動を知る手段ともなる。そしてこれらの情報を行政や、医療・福祉従事者と共有することで多職種との連携がとれ、より地域医療が進み、住みやすい地域になると考えた。また、これらの活動を行政や医療従事者が支え、活発にしていくことで、高齢者の心の支えとなり、より健康で長生きできる心身をつくっていかないと考えた。



続いて、看護学科は今回、2つのサロンを見学した。一つ目のサロンでは、参加者全員で輪になって頭を使ったり声を出したりしながら身体を動かした。主催者の中にも奥出雲町の方がいたことから、地元の人々が主体となって健康を支えていると考えた。またこのサロンでは、車を運転できない方のための送迎サービスや、お昼ご飯を一緒に食べることができるサービスなど、高齢者が孤立しないようなサービスが提供されていた。二つ目のサロンでは、地域の人々が集まり、お茶を飲みながら地域の人々の寄りの場となっていた。このサロンでも地元住民が主体となって地域の高齢者の交流の場を提供しており、元気な高齢者が集まっているという印象を受けた。また、どちらのサロンにも奥出雲町の保健師が参加し、参加者のお話を聞いたり、血圧を測ったりしており、実際に地域に出て地域住民と触れ合うことで、よりその地域に合った健康活動を行うことが出来ると理解した。そして、それぞれ違う形ではあるが、地域の人々が協力してお互いの健康を支えているということを理解した。

続いて、看護学科は今回、2つのサロンを見学した。一つ目のサロンでは、参加者全員で輪になって頭を使ったり声を出したりしながら身体を動かした。主催者の中にも奥出雲町の方がいたことから、地元の人々が主体となって健康を支えていると考えた。またこのサロンでは、車を運転できない方のための送迎サービスや、お昼ご飯を一緒に食べることができるサービスなど、高齢者が孤立しないようなサービスが提供されていた。二つ目のサロンでは、地域の人々が集まり、お茶を飲みながら地域の人々の寄りの場となっていた。このサロンでも地元住民が主体となって地域の高齢者の交流の場を提供しており、元気な高齢者が集まっているという印象を受けた。また、どちらのサロンにも奥出雲町の保健師が参加し、参加者のお話を聞いたり、血圧を測ったりしており、実際に地域に出て地域住民と触れ合うことで、よりその地域に合った健康活動を行うことが出来ると理解した。そして、それぞれ違う形ではあるが、地域の人々が協力してお互いの健康を支えているということを理解した。

2) 訪問看護同行

訪問看護同行では、訪問看護におけるケアを見学した。限られたスペース、道具、時間の中で効率よく行うことが大切であると理解した。ベッド上での足浴の際には、洗い流す際にはペットボトルを使い、お湯がベッド上にこぼれないよう配慮したり、必要以上にお湯を使って足にかかったりしないようにする配慮が必要であると理解した。また、複数の薬が処方されていたため、飲み忘れがないよう確認を行い、患者さんと一緒にセットしておられた。看護師のみでセットするのではなく、患者さんと一緒に行うことで患者さん自身が服薬を管理しているという自覚を持つことができると理解した。患者さんが確実に服薬できるよう、患者さんの生活の特性を理解し、その人に合った方法で看護支援を行う必要があると理解した。そして、訪問看護を行うにあたって、患者さんとの関係も大切であるが、その家族との関係も大切であると理解した。普段ケアを行うのは家族であり、在宅でのケアには家族の協力も必要である。そのため、家族の負担を軽減できるよう話を聞いたり、提案したり、または相談に乗ることが必要であると

理解した。そのため、家族との信頼関係を築き、話しやすい、相談しやすい環境を作ることが必要であると理解した。

3) 管理栄養士業務見学

在宅訪問栄養食事指導について初めて知り、血圧や酸素濃度、何を何時頃食べたのかなど健康状態を詳しく聞き取るだけでなく、患者さんの料理の手伝いもすると学んだ。



料理の手伝いをするだけでなく、患者さんの健康面から判断して減塩するなどの患者さんに合わせた料理を作らなければならないため、状況に応じて臨機応変に行動ができる力が必要だと理解した。月2回、30分～60分という限られた短い時間の中で、コミュニケーションを通して患者の変化に気づく洞察力が必要であること、在宅訪問が患者の安否確認にもなっていることを理解した。

2. これからの地域医療の在り方

今回のフィールド学習を通して、看護の視点からは3つのことを理解した。

まず、地域で暮らす全ての人が住みやすく安心して生活できる町になるような取り組みが重要であるということである。これを実現するために、人と人との関りを絶やさないこと、繋がりをもつこと、運動や交流の場を作ること、安心して暮らせる生活環境を整えることが必要となる。また、地域で暮らす人の健康状態の把握につなげるためにも、地域での取り組みの中に医療職者や保健師などが介入することも必要となる。次に、患者・病院・地域において、それぞれの間での信頼関係が重要であるということである。地域で暮らす人々の生活を支えるためにも、連携体制を整え、それぞれの職種の強みを活かして役割分担することが必要となる。最後に、地域の特性を理解することも重要でありということである。これが適切で迅速な医療・ケアの提供につながると理解した。地域の状態に応じて、医療や看護を求めている方々のところに医療職者や行政が出かけることが必要となる。

また、今回のフィールド学習を通して、栄養の視点からも3つのことを理解した。

まず、健康寿命延伸のためにも良い食生活を呼びかける活動を増やすことが重要であるということである。地域で暮らす全ての人を対象として呼びかけを行うことで、若い世代の人にもアプローチすることができ、若い頃から健康な体づくりをすることができるかと理解した。また、予防医療に力を入れ、健康診断などを定期的にするような呼びかけや、高齢者サロンなどの取り組みを活性化し運動機能や認知機能の低下を防いで健康な体をつくるのが大切であると理解した。次に、管理栄養士の専門性を活かし、自らが患者や地域住民の所に出向いて健康活動を行うことが重要であるということである。これは、病院や行政機関内で住民の健康を支えるだけではなく、地域で暮らす人々の健康を支えることにもつながる。また、コミュニケーションをする中で、信頼してもらえるような栄養相談や、食の楽しみを再認識してもらう活動を行なっていく必要があると理解した。

これからの地域医療には地域連携が重要であり、病院・施設を利用している人だけでなく、在宅で療養している人、生活している人の生活を支える取り組みが必要となると理解した。また、高齢化が進み高齢者に目を向ける機会が多くなるが、高齢者だけでなく、子どもや働く世代など、地域に暮らす全ての人を対象として医療を行っていくことが必要となると理解した。

最後に、今回のフィールド学習を通して学んだことを今後の学修に活かしていきたいと思っております。奥出雲町役場の皆様、奥出雲病院の皆様、ご指導いただきありがとうございました。

【行政】

邑南町

<看護学科>

板山 奈央 奥村 芽唯 澤津 悠香 西野 梨花
山口 彩華 岡田 有華

<健康栄養学科>

川上 結愛 原 波音 渡部 彩華 佐藤 友香

<担当教員>

祝原 あゆみ 講師

フィールドワーク計画表

日にち	時間	体験内容	場所
9月19日 (木)	9:45	邑南町着	瑞穂支所
	10:00	保健課長あいさつ	元気館
	10:05	邑南町の概況・保健活動の紹介	
	10:20	邑南町地域医療構想・取組について	
	11:00	昼食	
	11:50	移動	
	12:00	地域のDr・Nsの話(質疑応答あり)	三上医院
	13:30	日和寄り合い処 参加 ⇒体操の体験、地域の方の暮らし、思い等のヒアリング	日和公民館
	16:00	行政栄養士の話	本庁
	16:30	いわみ西保育所見学 ⇒保育園の見学 ⇒行政との連携、食支援など	いわみ西保育所
9月20日 (金)	8:20	口羽公民館集合	よほしば
	8:30	特定非営利法人はすみ振興会 作業療法士の話	
	9:30	口羽発	
	10:30	公立邑智病院にて実習 ①病院概要、看護業務、栄養業務の説明 ②院内見学	邑智病院
	12:00	昼食	元気館
	13:30	邑南町地域包括ケアシステムについて	
	14:15	保健師の話	
	15:00 ～ 16:00	実習のまとめ ラベルワークと発表 ・・・①2日間で感じたこと・学んだこと ②専門職(看護師・管理栄養士)として多職種の連携での役割	

邑南町から学ぶ人と人とのつながり

1. 邑南町の地域医療について

邑南町は、島根県の中心に位置する、人口 9,520 人(令和 6 年)の中山間地域である。高齢化率は 45.9%となっており、平成 16 年の旧羽須美村、旧瑞穂町、旧石見町の合併時から高齢化率は上昇、人口は減少している。島根県の高齢化率は 34.7% (令和 5 年) であるため邑南町の高齢化率は島根県内でも高い割合といえる。

医療面では、公立邑智病院を中心に、邑南町独自の地域医療構想を策定し、必要な医療機能や医療福祉従事者の確保、公共交通の充実を図っている。現在の町内の医療体制を維持、また医療の充実を図るため、閉業するクリニックを邑智病院の附属診療所として市町村が運営を行う計画や邑南町内でのクリニックの開業や次世代への継承時には独自の助成をするなどの取り組みを行っている。

2. フィールド学習で得た学び

1) 多職種連携について

邑南町のフィールド学習を通してまず学んだことは、多職種連携を大切にしているということである。学習の中で話を聞いたほとんどの方が多職種連携について言及していたため、そう考えた。実際の例としては、邑南町の医療法人が行っている週に一度の全体会議や、邑智病院の部門ごとの話し合い後の全体会議といったミーティングでの連携が挙げられる。また、保育園の管理栄養士は行政栄養士と連携して、それぞれが得た情報を交換することで不足している部分を補い合っていた。さらに、邑南町は保健師が多いことが特徴であり、違う課の保健師同士で異なる視点からの情報を交換していると知った。このように、邑南町では多職種連携のための環境づくりが盛んに行われていることを学んだ。

2) 人と人とのつながりについて

次に学んだことは、邑南町の人と人とのつながりについてだ。学習の中で日和寄り合い処という会に参加し、地域の方たちと体操をした後にお話をさせていただいた。そこで、1人暮らしの人に「会に参加しないか」と声をかけるようにしていることや、買い物や移動は家族に助けられていること、移手段がない場合は福祉タクシーを利用していることなど、日々の生活の中で様々な人が助け合って生活しているということを学んだ。また、初めて会った私達にも親しく話してくださったり、お土産をいただいたりして、地域の方の優しさをとても感じた。このように、フィールド学習の中で、人と人とのつながりを多くの場面で感じる事ができた。



3) 看護職の視点から

看護師の視点から学んだことは、地域住民に質の良い医療を提供するために、スタッフが働き

やすい環境をつくることが重要だということである。地域住民が安心して暮らしていくために質の良い医療を提供することが必要だが、そのためにはスタッフが「ここで働きたい」と思える働きやすさが前提としてあると分かった。そして、保健師の視点から学んだことは、地域における保健師の役割の重要性である。保健師は、人と人だけでなく機関と機関もつなぐことで、地域住民とスタッフの関係をサポートする仲介的な役割を担っていると学んだ。そして、住民が慣れ親しんだ場で最後まで自分らしく生きられるよう、予防医療等の支援で暮らしを守っていることも分かった。

4) 管理栄養士の視点から

管理栄養士の視点から学んだことは、料理の見た目が大切であるということだ。高齢者施設で働く管理栄養士は、ソフト食を作る際に、他の方が食べる普通食と見た目ができるだけ同じになるよう工夫していた。また、保育園の管理栄養士もアレルギー食を普通食と見た目が同じになるようにして、子どもが疎外感を感じないよう配慮していた。このことから、食べる上での安全面だけでなく、対象の方の気持ちを考えて食事の見た目にも気を配ることが大切であることを学んだ。

3. 地域医療のあり方

まず、地域医療を展開していくために、多職種連携が重要であると考えた。邑南町の例を挙げると、邑智病院から施設などに移るときには、施設間での連携が必要である。施設間で情報共有をすることでスムーズに施設を移動することができ、行政と連携することで地域住民の声をより取り入れることができる。多職種連携で重要なことは、関係機関について理解することである。また、周りの人とつながりを持つことも必要である。多くの人とつながりを持つことで、行動が起こしやすかったり、頼み事や相談がしやすくなったりするためである。

また、邑南町の現状として、病院などの医療現場での人材不足がある。つまり、少ないスタッフの数で多くの患者をみなければならない。邑智病院では医師不足の現状を支えることや医師の負担を軽減する目的で、2名の看護師が診療看護師の資格を取得している。

さらに、医療の提供を効率的にするためにICT化を進める必要がある。医療のICT化の具体的な例としては、オンライン診療やAI問診、院内スマホや、救急隊とアプリで連絡を取ることなどがある。邑智病院の新しい病棟では、自律搬送ロボットも導入するなどICT化を進めていた。一方で、看護に必要な「感性」は、人しか持ち得ないためICT化を進めるうえで人の手をどう残していくかは考えていく必要がある。

4. まとめ

今回のフィールド学習を通して、住民の温かさや、それを支える医療従事者の強い連携といった邑南町固有のよさを間近で感じる事ができた。中山間地域特有の課題も多く残っているが、住民が「声を上げればサポートしてくれる」と考えることができるスタッフへの信頼、それに応える行動力が解決につながると感じた。



海士町フィールド学習のまとめ

●海士町での工夫あるライフスタイル

離島という一見不便に見える環境であるからといって、住民は私たちが想像するほどの不便さを感じてはいないということに驚いた。生活の面では、長年の経験と知恵を駆使している。例えば、天候が悪くなる予報の際、船の欠航は事前に把握できるため店頭では物資を多めに入荷したり、家庭では物資不足に陥りやすい冬場は食材を冷凍したりすることで対策を行っている。工夫することで不自由を感じることなく生活を送っている様子に、海士町の人々の力を感じた。

●海士町が挑む人材不足解消のための取り組み

「人材不足」という点では大きな課題があるようだ。農林水産業の担い手や海士町の文化・歴史・風土を受け継ぐ人材の不足、医療従事者の人材不足などさまざまな分野で表面化していることを学んだ。こうした課題に、海士町では独自の工夫をして取り組んでいる。実際に役場職員が現場に赴いて、町民とともに汗を流し多様な仕事に挑戦する「半官半X」や、海士町複業協同組合が仕事量に応じて労働力を派遣・育成する制度も導入している。さらに、外部からの人材を呼び込む「島留学制度」という取り組みも行っている。「島留学制度」を行うことで島外の人々が海士町の魅力を学び、島の活性化につながっていた。また、Iターン者やUターン者の増加を目的とする人材の還流を図ることにもつながる。

福祉面では、海士町の高齢者福祉施設が満床でないにも関わらず、職員の人材不足により空きを待つ待機高齢者を発生させているという現状がある。この課題に対し、多職種が連携を図ったり1つの職種が複数の立場を担当したりすることで人材不足を補っていることを学んだ。加えて「まめネット」を活用し、患者の診療情報をさまざまな医療・介護・福祉関係者で共有することで、多職種が連携できる環境が整えられている。また海士町唯一の診療所では常駐の医師が2名のみであるため、現状少ない人数で多くの分野を担当しなければならない。そのため、初めは特定の分野を専攻していた医師も、海士町に来てから専門外の事を学び、患者を広く浅く診察できるようになることで、乳児から高齢者までを対象に救急医療から慢性疾患まで幅広く対応できるようにしているようだ。

さらに、医師だけでなく、海士町には薬剤師がいないため、その役割を看護師が担っている。他にも、乳幼児の予防接種を集団接種にすることで医療従事者の出勤日をまとめ、結果として病院側の負担を減らすことを可能としている。一方で診療所に医療機器は十分に揃っており、不足に困ることはほぼないそうだ。

そして、離島であるという小さいコミュニティだからこそ、人と人のつながりが強く、地域全体で支え合いながら生活を送っていることも学んだ。海士町では、地域で集まる行事が多く開催されており、住民同士の交流が盛んに行われていた。また、保健活動では、保健師や管理栄養士が自ら出向いて対象の住民に通知をしたり、直接声をかけたりするなどし、地域住民が積極的に参加できるように働きかけられていた。

このように、離島であっても海士町のスローガンである「ないものはない」という、今あ

るものやいる人の中で工夫して暮らしていこうとする方針で住民は生活し、地域医療を行っていることを学んだ。

●今後の地域医療のあり方

今ある資源の有効な活用法を模索することが今後の地域医療の継続につながる。今回の海士町でのワークを通して、既存事業では ICT による医療情報連携ネットワークの活用の推進、新規事業としては住民参加型の医療体制の構築が有効であると考えた。例えば健康管理について住民の主体性を育むことができれば、疾患の重症化や、要介護状態になるリスクが低減し、特別養護老人ホーム入所待機者の減少、あるいは自己管理による自立が医療福祉施設の負担軽減へつながることが見込まれ、多方面で将来性があると考えられる。また、同時に住民同士のつながりの場を推進することで、互いに健康意識を高めるような雰囲気づくりが期待される。「住民と一緒に健康づくりをする」これは海士町保健師がおっしゃっていた言葉であるが、今後の地域医療では医療者と患者の隔たりが埋まり、一方向ではなく多方面にベクトルの生じる姿があるべきだと私たちは考えた。

また、海士町の人々は他人を動かすより先に、自らが主体的に行動しようとするのではないだろうか。「ないものはない」に基づき、自らが様々な現場へ出向いて現状に変化をもたらそうとする姿勢こそ、多様な課題を抱える地域医療の未来に重要であると考えられる。

●まとめ

海士町は離島という環境にありながら、住民が知恵や経験を駆使することで不便を感じることなく生活しており、医療や福祉の面でも「まめネット」を活用した多職種連携が進んでいた。また、課題とする人材不足への対応として、1つの職種が複数の役割を担ったり、人材の還流を行ったりするなど様々な工夫がなされていた。今後の地域医療では、住民が自身の健康管理に関心を持ち、主体的に健康活動に参加していくことや、住民同士のつながりをより強固なものにすることで健康活動に取り組みやすい環境をつくり出すことが重要である。また、住民による健康意識の向上にとどまらず、あらゆる職種が住民の健康の維持増進のために、主体的に新たな活動に取り組んでいく姿勢が求められるだろう。



知夫村

<看護学科>

岩谷 萌桃 岩本 彩芭

<健康栄養学科>

安食 未瑠 片寄 妃那 藤原 小雪

<SA>

正木 彩織

<担当教員>

松岡 紗嘉 助教

知夫村フィールドワーク

≪1日目≫

時間	内容
7:20	大学→知夫村 移動
12:00	昼食、休憩
13:30～ 16:00	知夫村役場 オリエンテーション、診療所について説明
16:00	景勝地巡り
17:00	宿泊施設へ移動

≪2日目≫

時間	内容
8:20	知夫村役場 集合
8:30～ 12:00	知夫村役場 食育活動、保健活動について説明
12:00	昼食、休憩
13:00～	大江集会所 運動教室(レクリエーション実施)
15:30～	地域包括支援センターについて
16:30	宿泊施設へ移動

≪3日目≫

時間	内容
8:00	移動
8:30～ 10:00	離島で保健師として働く魅力
10:00～ 11:30	知夫小中学校 学校給食について説明
11:30～ 12:20	知夫村役場 ここまでのまとめ
12:20～	知夫小中学校 学校給食を体験・交流、休憩
13:00	知夫村役場 まとめ、ワーク
15:00	知夫村→大学 移動

海士町

<看護学科>

秋山 恋夏 阿曾 桃子 石田 晴菜 遠藤 凜々
大門 ひな 永田 悠星

<健康栄養学科>

久保 好未 榊原 蒼 中島 未来 渡邊 紗羽

<担当教員>

松岡 紗嘉 助教

海士町フィールドワーク

<台風のため、現地でのフィールドワークを学内でのフィールドワークに変更>

≪1日目≫

日時:9月2日(月)14:30~17:00

オリエンテーションをしますので、13:30に集合してください。

場所:217 講義室

内容:海士町役場・海士診療所とリモート接続し、海士町の生活に関することや地域医療に関する説明を受け、質問や意見交換を行う。自己学習課題や事前学習の記録をもう一度確認し、質問したいことや深めたい内容を準備して参加しましょう。

13:30~14:00 集合、オリエンテーション

14:30~17:00 海士町役場健康福祉課より説明・学生からの質問、意見交換

14:30~ ・海士町のまちづくりや福祉について

(健康福祉課 淀課長)

15:30~ ・海士診療所について (診療所 澤井看護師)

16:15~ ・保健活動について (健康福祉課 高畑保健師)

≪2日目≫

日時:9月4日(水)13:10~18:00

場所:217 講義室

内容:海士町との意見交換を通して得た学びの共有と課題C・フィールド学習のまとめの作成

13:10~13:20 集合、オリエンテーション等

13:20~14:40 課題Cを意識して、海士町との交流を通じた学びを共有する

~休憩~

15:00~16:20 これからの地域医療のあり方についての考察

(2Gに分かれてラベルワーク)

~休憩~

16:30~18:00 発表、意見交換、まとめ

今ある資源を活用した地域包括ケア

I. フィールド学習を通しての学び

現在の社会では、人口減少や高齢化による課題が深刻化しているが、人口が少ないからこそ、村民間の厚い信頼や協力体制ができていて、本土では味わうことのできない人の温かきがあった。人口が少ないことは問題ばかりではなく、次のような良い側面や魅力も多いと感じた。村民の日常を互いが把握しあっているという地域性があるため、緊急時や高齢者のみの家庭で何かあったときに、役場職員の力だけでなく村民同士での助け合いの文化が形成されている。しかし、そうした強みがあっても人口減少が続くと、やはり仕事の担い手不足により店をたたまなくてはならない場合や、人々を支える体制がより小規模になっていく。そのため、村外から地域おこし協力隊や大人の島留学生、SNS 等を活用した人口減少に歯止めをかける対策が行われているようだ。出生率が0の年はなく、複数人の子どもがいる家庭も多いため、出生率の低さが原因で人口減少が進んでいるとは考えにくい。また、子育てする上での環境や支援体制も整っている。知夫村は短時間滞在する「通過型観光」となっているが生活の体験や村民との交流を取り入れる等し、長時間滞在する「滞在型観光」ができると若い層のU・Iターン者の増加につながるのではないだろうか。また、役場職員もそれぞれが複数の役割をもち足りない部分を互いが補い合っていることや、村民の力を借りて安心できる暮らしを実現させている。役場職員も職員である前に一村民であるため、常に同じ目線に立ち、対等に関わることができる。実際、行政で働いている方々の話を聴くと、普段から村民として密接に関わっているため、間違えても大丈夫である雰囲気があり新しい取り組みにチャレンジできると言っておられた。また、知夫村の方々は新しいアイデアや意見を積極的且つ主体的に考え発信していることから、共に暮らしをよりよくすることができていると感じた。本土と体制や暮らしぶりは大きく異なるが、職業関係なく助け合える関係性により、保健活動や健康増進活動が成り立っている。こうした様子から住民同士で地域全体を支えていく地域包括ケアの意識が芽生えているのではないかと感じた。そして、このような人と人との繋がりが密接であることを知夫村の強みとして活かしながら、村民がよりよい生活を送ることができるように、島根県全体で知夫村の今後の在り方について考えていく必要があると考える。

知夫村では、地域の特性に合わせながら地域包括ケアシステムが展開されている。少ない人数で複数の役割を担いつつ、日頃の密接な連携がとれる体制があることにより、今後はさらに住民側の健康への意識を向上させることが求められる。しかし、参加した「いきいき運動教室」では女性の参加者の方が多く、役場の方も男性の参加率が課題となっておりとおっしゃっていた。



また、離島の流通の関係から野菜不足や、レトルト食品やおやつを多く食べることによる塩分過多などの実態もあり、住民の健康づくりには課題も多い。だが、地域の活動に参加していなくても、個人で実施していることもあるため、ウォーキングやストレッチといった健康運動をどのくらい行っているかのアンケート調査等により実態把握をしながら、住民側の理解を促したり、住民皆で健康をめざす村づくりを検討したりする必要があるとわかった。

II. 知夫村の今後の地域医療について

1人1人が暮らしやすく社会参加しやすい環境をつくる必要がある。住民が「やりたい」と主体的に思わなければ取り組みは長続きせず、かえってその人の負担となり悪循環に陥ってしまう。専門職や行政が村民の声を聞き、個人やグループそれぞれの意見や考え、ニーズを取り入れることで、村民にとって参加しやすく長年続く通いの場ができるのではないかと考える。また、住民一人ひとりのことを十分に理解すること、対象に応じて適切な健康づくりの対策が重要である。知夫村の資源は顔の見える関係性が構築されていることと直接的に意見を言える村民の性格であると考え。また、地域全体の距離が近いことで連携がとりやすく支援しやすいことは地域包括ケアに活かせる材料である。知夫村の高齢化率は46.5%と村民の約半数が高齢者であり、担い手の若者を増やすことも大切であるが、高齢者がいかに元気で過ごしていけるかということも重要である。産業の発展や文化の継承など若者だけではできない事も多い。例えば、漁業が盛んであることに注目し、高齢者が子どもに釣りや魚のさばき方を教えるなど、地域での役割を担い、いきいきと暮らせるような活動を行うことが高齢化を前向きに捉えることにつながると考える。



III. 島根県全体の今後の地域医療の在り方について

中山間・離島地域等、あらゆる特徴の地域があるが、どの地域に住んでいても安心して過ごすことのできるよう、地域医療の連携体制や健康づくりができる環境の整備が必要である。今後の地域医療は、その地域だけの問題で終わらせるのではなく、近隣の地域と協議しながら協力体制を築き多職種とより連携し、時代や状況に応じて発展させていくことが必要である。そして、限られた資源を十分に活用し、取り残される地域や人がいないようにすることが重要となる。また、小さい村だからこそ出来ていることもあり、それを他のまちでも参考にして活用することで、島根の地域医療が全体的に大きく、充実したものになるのではないだろうか。また、その仕事のプロとしての意識を持ち、それぞれの職種が信頼し協力することや、柔軟に対応できる力が必要である。さらに、それぞれの時代や地域によってやり方が違ったり、今まで経験したことの無い事に出会ったりするかもしれない。最新の知識をもってケアが提供できるよう、日々学び続けることも重要であるが、その土地に合わせた方法で地域医療を行う柔軟性や工夫が重要であると考え。

【医療機関】

出雲市立総合医療センター

<看護学科>

青木 未貴 今川 あかり 中屋 亜純 渡部 七海

<担当教員>

吉松 恵子 講師
板持 智之 助教

島根の地域医療 医療施設版 プログラム

〈出雲市立総合医療センター〉

日時		内 容		
1日目 8/28 (水)	午前	全員	看護部長室前集合 病院・看護部について	オリエンテーション 当院の概要・役割・機能 病院見学
			出雲市（平田地域）における地域 包括ケア	地域連携部門の役割と活動 平田地域における地域包括ケアシステムの特徴 具体的実践
	午後	A	地域包括ケア病棟での看護師の 追跡	病棟説明 退院前カンファ、介護調査などの見学
		B	回復期リハビリ病棟での看護師の 追跡	家族指導の実際
2日目 8/29 (木)	午前	A	地域連携部門での看護師追跡	退院調整のための多職種連携の実際 退院調整カンファレンスに参加
	午後		訪問看護師の訪問に同行	訪問看護・家族支援の実際
	午前	B	ロビーマン体験（9:30～10:30） 地域包括ケア病棟看護師追跡	病棟看護師の実際を知る
	午後		地域連携部門での看護師追跡	退院調整のための多職種連携の実際 退院調整カンファレンスに参加
3日目 8/30 (金)	午前	全員	情報共有・まとめの準備	オンラインでの実施
	午後	全員	まとめ・カンファレンス	オンラインでの実施 担当者・担当看護師との意見交換 医療施設から見た地域医療の実際と課題 フィールドワークの振り返り

※ 8/30（金）は台風のためにオンラインで実施

患者さんの暮らしを考えた看護の大切さ

フィールド名：出雲市立総合医療センター

学生名：青木未貴 今川あかり 中屋亜純 渡部七海

1. 出雲市立総合医療センターについて

出雲市立総合医療センターの基本理念は「市民に信頼され、地域と共にあゆむ病院をめざします」である。一般病棟は147床、療養病床は52床である。1～4階まであり、2階からが入院病棟である。入院病棟には急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、療養病棟、地域包括ケア病棟がある。救急診療も行っており、第二次救急医療施設として、休日・夜間を問わず24時間体制で救急医療を行っている。また、検診や人間ドック、訪問診療や訪問看護などの取り組みも行っている。

2. フィールド学習での学び

●退院前カンファレンス

退院前カンファレンスでは、患者の家族、入院中に関わったスタッフや退院後の生活を支える関係者が集まり、それぞれの職種が専門性を生かした情報共有、意見交換が行われ、地域で安全に生活するために退院後の生活を見据えた課題やサービス調整などを検討していた。在宅に移行する患者さんは、みな複数の疾患を有し、何らかの支援を受けることが必要となって退院することが多い。入院前とはADLが変化しており、そのギャップに対する検討や介入の必要度が高く、退院後の生活環境の見直しも求められる。ADLの低下について介護を行う家族の理解を促すことも必要である。そして、患者とともに歩む視点を持ち、患者本人だけではなく、介護を行う家族の生活も考慮した関わりが求められると学んだ。

●訪問看護

訪問看護では、生活に病気が加わると言われるように、患者さんにとって自分のフィールドが主体となる看護であり、患者個人のニーズや生活する上で大切にしていることを肌で感じることができる。ADLが低下しても生活の質の向上と医療の継続性の保証に貢献することで、患者が有する能力に応じ、その人らしい生活を送り続けることができるようサポートすることが求められる。患者は一人一人が今まで生きてきた長い人生があり、それはこれからも続いていく。過去の経験から培った価値観も大切にしていることも異なっており、患者の望む生活を支える看護のあり方は、多種多様で、正解はないのだと思うが、その人にとっての最善を考え続けることが重要だと分かった。

●地域包括ケア病棟

地域包括ケア病棟では退院後の生活を見据えた看護を大切にしておられるのが分かった。退院してからの生活がある程度自分で行えるようにADLを上げないといけないので、そのケアが今その患者さんに必要かということを常に考えていないといけないということを学んだ。また、家族背景や自宅の造りがどのようになっているのかということも考えて計画を立てていかないといけないので難しいと感じた。レスパイト入院というものがあることも学んだ。患者さんだけでなく、そのケアをしている家族の人の健康にも目を向けて病院内だけでなく地域の人が健康を維持できるような取り組みはとても重要だと思

った。ケアをする家族が休める期間をつくることにより心に余裕ができると患者さんへの思いも変わってくると思うので双方に良い影響があるシステムだと感じた。地域包括ケア病棟では特に「伝える力」が必要になるということを知った。患者さんやその家族の方への説明を理解できるように伝えたり、理学療法士などの多職種との連携も多いのでその患者さんの状態を伝えたりするときに円滑なコミュニケーションをするためにも相手に伝えたいことが伝わるかという視点は大切であることを学んだ。

●地域連携課

出雲市立総合医療センターの連携窓口として、他院や他施設そして地域をつなぐ部署である。医療機関(病院や診療所)や訪問看護事業所、高齢者介護施設、地域包括支援センター、ケアマネジャー、行政などと密接な多職種連携を円滑に進めるために、「顔の見える関係づくり」を心がけている。入院初期から多職種の専門性を活かして患者・家族に関わることにより、安心して療養生活が切れ目なく行えるように手伝いをされていた。

●回復期リハビリ病棟

入院できる疾患や、病名が限定されている。入院期間が限定されているが、集中してリハビリを行うことができる。入院期間は最大 180 日となっている。病室は、在宅への退院がスムーズに行うことができるように、個々にあった環境調整を行っている。多病棟の病室と違い、テレビ台の他にタンスが設置されている。食堂に出てきて食事を行うことで、多患者の方とのコミュニケーションを図り、食堂へ出ることで、起きて座る回数を増やし、普段の行動から ADL の拡大ができるような環境づくりを行っている。また、自身が使用したお箸や、スプーンを洗うことも、退院後の生活を見据えた支援であり、リハビリも兼ねている。トイレやお風呂の動作も、日常生活を送るには大切な動作である。まずお風呂では、個々の患者さんの ADL によって、お風呂の入り方は変わってくるため、できることは患者さん自身にやってもらい、退院しても不安がないようにサポートを行っている。全ての患者さんのベッドに ADL 表「更衣・整容・移動・食事・排泄・入浴・目標」が設置されており、全ての患者さんに全ての医療者が同じ対応をすることができるようにしている。その ADL 表は、医師・看護師・PT・OT・ST・栄養士・医療ソーシャルワーカーといった各職種の担当の方たちで行われるカンファレンスで情報共有することで、患者さんの ADL は日々変動するため、新たに目標の設定を行い、多職種が連携して 1 人 1 人の患者さんにあった支援を行っておられた。

3. これからの地域医療について

フィールド学習を通して、地域医療においては患者が望む生活を支えていくために、患者や家族など相手の価値観を大切にしておかかわることが重要であると考えました。また、様々な職種や地域の多くの機関と連携を取っていくために、「顔の見える関係づくり」を行い、一人一人の患者に合わせた支援を行っていくことが必要であると学びました。

4. 最後に

この度はお忙しい中、3 日間のフィールドワークをさせていただきありがとうございました。患者さんへの関わり方や病院として何を大切にしているかなどを丁寧に教えてくださり、看護師として地域とどのように関わっていくべきなのかということをもっと身近な問題として考えられるようになりました。このフィールド学習で学んだことをこれからの実習にも活かしていきます。

社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院

<看護学科>

石飛 葵 成相 日菜 原 聖恩 森脇 春華

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

島根の地域医療 医療施設版 プログラム

< 済生会江津総合病院 >

日時		内 容		
1日目 8/20 (火)	午前	10:00～	オリエンテーション・3施設見学	施設概要
	午後	12:30～14:00	5西病棟（療養病棟）	特定行為研修修了者の活動の実際、経管栄養とポジショニング、カンファレンス
		14:00～15:30	5階東病棟（療養病棟）	患者とのコミュニケーションの実際、ポジショニング体験、カンファレンス
		13:00～15:00	太田サロン 見学	百歳体操グループでの運動機能測定（立ち上がり時のスピードやバランスを測定）フレイルアンケート、保健師講話、ちょい足し運動の提案
2日目 8/21 (水)	午前	8:30～12:00	外来 看護師 追跡 見学	外来ブロック見学・検査・在宅療養支援見学
				透析・救急外来見学・心リハ見学
	午後	13:00～16:00	入退院支援課 追跡 見学	入退院にかかる調整・支援の実際
			地域連携課 追跡 見学	医療介護連携事業 など
3日目 8/22 (木)	午前	8:45～10:30	3階東病棟（一般病棟）	入院の受け入れ、カンファレンス見学（栄養・せん妄・抑制・褥瘡・意思決定）
		10:30～12:15	3階西病棟（地域包括ケア病棟）	心不全デイケアの実際、カンファレンス
		9:00～11:00	下河戸サロン 見学	百歳体操グループでの運動機能測定（立ち上がり時のスピードやバランスを測定）フレイルアンケート、保健師講話、ちょい足し運動の提案
		13:15～14:10	実習まとめ	実習振り返りの準備
		14:20～15:00	地域ケア会議	ケアマネ、地域包括ケア事例②見学
		15:00～16:00	振り返り・統合	各学びの共有

「地域医療の在り方と多職種での連携」

フィールド名： 済生会江津総合病院

氏名： 石飛葵 成相日菜 原聖恩 森脇春華

I. 病院紹介

済生会江津総合病院は島根県浜田圏域における保険・医療・介護・福祉を担っています。島根県済生会は、ほぼ同一敷地内に介護老人保健施設（高砂ケアセンター）や特別養護老人ホーム（白寿園）といった介護福祉施設も設置運営しており、それに加え訪問看護ステーション、訪問リハビリテーション等の在宅系のサービス事業も幅広く展開しています。済生会江津総合病院は、急性期から地域包括ケアを経て施設・在宅へとスムーズな対応ができ、それぞれの施設が持つ特徴を十分活かし、切れ目のないサービスを提供しています。

II. フィールド学習の学び

今回の島根の地域医療のフィールド学習を通してより高齢化が進み、地域・在宅医療が求められている江津市での医療体制だけでなく、地域包括ケアの実情や目指すべきものについて学ぶことができました。江津市は駅周辺に病院・医療施設・お店・市役所・学校などが集中しており、様々な場所へ移動が少ないことや、連携がとりやすいことが分かりました。そのため、地域包括ケアが目指している、医療提供体制の維持につながるだけでなく、より地域包括ケアシステムの連携が効率よく円滑に実施することができるという特徴を有していると思いました。これからの日本は少子高齢化が現在よりも深刻になりますが、このような地域医療体制をおこなうことによって多くの予防につながる事が分かりました。一方でバスや電車の本数はあまり多くはなく、山間部まで通っているわけではありません。訪問看護やサロンなどを通して、地域に住む方々の健康を支援していくことが今後、重要であると感じ、そのための取り組みとして「高齢者サロン」を知りました。高齢者サロンでは運動機能の測定を通し、自身の身体の状態や予防策を知ることができ、実際に運動をすることで地域の方々の健康への意識付けや意識向上に繋がり病気の予防になると分かりました。それだけでなく、地域住民同士でのつながりも増え、社会参加する機会を作ることができることも分かりました。そのため、高齢者サロンなどの地域での取り組みはこれからの地域医療において必要不可欠だと実感しました。

また、今回のフィールドワークで特に印象に残ったこととして多職種連携が挙げられます。病院内でのカンファレンスでは看護師だけでなく医師や介護士、理学療法士、作業療法士などの様々な職種が連携して専門的な視点からとらえた情報や意見を積極的に述べ共有する姿が何度も見られました。他にも地域包括ケア会議では病院内より多くの職種の方が集まり、対象者の問題やその解決策など様々な視点から意見・情報を共有していました。一つの職業では気づくことのできない視点を含め、よりその患者・対象者にとって最適なケアを提供するためにも多職種連携は大きな要となっていると分かりました。そして、連携は職種間だけでなく、施設や機関同士の連携もあり地域全

体で地域の人々を支えている地域包括ケアシステムの実態を感じられました。この経験を通し、直接的な関係がなくとも、様々な職種への理解・尊重の意を持っていくことも大事だと感じました。また、連携を行っていくうえで職種間での雰囲気づくり・コミュニケーションの大切さも学びました。それぞれ専門職の意見を共有し、議論することで患者や対象者にとってよりよい選択が決定できます。そのためにも職種間の関係性は重要で、意見を言いやすい環境作りが必要なのだと学びました。

このような済生会江津総合病院の医療体制や地域での活動、様々な連携を知っていくうえで、看護師の役割や看護師の重要性についても気づかされることが多くありました。看護外来では相手（患者）を尊重する姿勢を感じ、看護師に必要な態度を学ぶことができました。また、看護師は一番患者と接する時間が多いため、どの医療従事者よりも患者のことを把握しています。したがって、看護師は医師と患者を連携することだけではなく、多職種連携の中心核という存在として役割を担っていることも分かりました。そして、看護師に限ったことではありませんが特に看護師は患者を第一に考えることが大切で、患者の意思を尊重してくれる役割もあると思いました。どんな選択をするにしても、患者の意思は大切に尊重されなくてははいけません。済生会江津総合病院の看護師の考えや患者への接し方をみて、患者を尊重する姿勢を感じ、患者を第一に考えなくてはいけないのだと改めて学ぶことができました。

III. これからの地域医療

これからの地域医療では多職種連携のチームケアの実践を徹底していくと共に地域包括ケアシステムを効率よく実施できるような環境を整える必要があると考えました。高齢化が進んでいくため、より生活に近い視点に近づくため患者家族の思いに耳を傾け、様々な選択を支援していかなければなりません。患者は地域で生活する人であり、医療は生活の一部に含まれます。また、療養の場の選択や尊厳のケアも同時にサポートしていく必要があります。このように、今後の地域医療は様々な連携を通して幅広く支援、また地域で生活する人を途切れることのない支援を行っていくことが大切になってくると考えました。

IV. まとめ

今回のフィールド学習では地域の医療体制をはじめとする地域支援を実際に感じる事ができ、多くの学びを得ることができました。また、その地へ出向き、実際に見聞きすることで文字でしか認識していない地域医療の体制も理解が深まり、フィールド学習の大切さも学ぶことができました。

済生会江津総合病院をはじめ、ご協力いただいた皆様、大変お世話になり、感謝申し上げます。今回学んだことを通し、今後の地域医療についてより考えを深め、自身に役立てていきたいと思っております。非常に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。



独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター

<看護学科>

奥田 大智

坂本 子龍

志波 ころこ

高萩 凜香

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

島根の地域医療 医療施設版 プログラム

<浜田医療センター>

日時		内 容		
1日目 8/20 (火)	午前	10:00~11:00	病院概要オリエンテーション 感染管理オリエンテーション	病院概要：浜田圏域の状況 病院の役割・機能について 感染防止対策・注意点について
		11:00~12:00	地域医療連携室オリエンテーション	地域医療連携室の役割と活動
	午後	13:00~14:00	院内案内	外来・健診センター、救急外来、救命センター ヘリポート～病棟、各部門（リハビリ部門他）
		14:00~15:00	MSWによる説明	退院支援に活用できる社会資源について （介護保険他、実際の事例を通して説明）
		15:00~15:30	診療看護師より説明	診療看護師の役割及び地域医療の中の 診療看護師の役割
		15:30~16:00	認定看護師・特定行為看護師	特定行為看護師の役割について
2日目 8/21 (水)	午前	9:00~12:00	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス 11:00～地域包括ケア病棟 退院支援カンファレンス見学
	午後	13:00~16:00	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス 14:00～緩和ケアリハビリカンファレンス 14:15～緩和ケア退院支援カンファレンス 14:45～呼吸器外科リハビリカンファレンス 15:30～呼吸器内科リハビリカンファレンス
3日目 8/22 (木)	午前	9:00~9:30	がん相談支援室について 入退院サポートについて	がん支援看護師の役割と業務について 入退院支援看護師の役割と業務について
		9:30~12:00	地域医療連携室 看護師追跡 入退院サポート看護師の追跡	病棟訪問・カンファレンス 入退院サポートの介入見学 2名ずつ
	午後	13:00~14:00	まとめ	「病院からみた地域医療の現状」 担当者・担当看護師との意見交換 フィールドワーク振り返り

病院と地域の連携を学ぶ

浜田医療センター

奥田大智 坂本子龍 志波こころ 高萩凜香

1. 浜田医療センターの紹介

浜田医療センターは島根県西部の中核で総合医療センターとして多くの病院や医療介護施設との連携を大切にしている病院である。また、地域がん診療連携拠点病院、島根県西部地区唯一の救命救急センターとなっている。合計 27 診療科を持ち、医療を通じて「地域で生きる」を支援するという理念の元で、安全で良質な医療、患者に寄り添った医療、介護・福祉との連携、町づくりに貢献するなどを掲げている病院である。

2. フィールド学習で学んだこと

今回のフィールド学習で、地域医療連携室の看護師は常に多くの職種と連携していることを学んだ。外来診療では、診療状提供書を持ってきてもらい、かかりつけ医が得ている患者さんの情報を正しく読み取ることを意識していた。かかりつけ医と情報共有することで患者さんの日頃の生活や既往などより詳しく正確な情報を得ることができ、病院での患者さんの適切な治療につながると考えた。そのことから、総合病院と地域病院との連携はとても重要であると感じた。また、退院調整は、病院内の医療サービスから地域の医療、介護サービスなどにバトンタッチする過程である。地域医療連携室の看護師は、カンファレンスで現段階のリハビリ状況やADLの状態、家庭環境などを多職種で話し合い、どの施設に送り出すのが最適か、患者とその家族の希望にも配慮しながら地域へ送り出す調整を行っていた。退院が決まってからの調整でなく、入院前・入院早期から退院後の生活を視野に入れたケア・支援を行うことを意識させていた。さまざまな職種・施設と協力することで「病院完結型医療」ではなく、「地域完結型医療」を実現していると感じた。また、看護師は情報を聞き出す能力が高いと感じた。患者さんのお金の話や家族との関係の話、心の中の思いは簡単に聞き出せるものではなく、患者さんのプライバシーにも配慮しなければならない。しかし、その情報は治療方針や退院後の生活に関わる重要な情報であるため、患者さんから聞き出して医療職者で共有することが必要であると考えられる。看護師は、患者さんと目線を合わせる、声色を変える、話の流れから会話を広げ必要な情報を得るなど、患者さんの話しやすい雰囲気を作る工夫をしていた。看護師だから話せること、ケアマネジャーだから話せること、かかりつけ医だから話せることもあり、それぞれの職種が患者さんとの間に信頼関係を結んでいる。そこで得られた情報をカンファレンス等で共有することで、患者さんにとって適切な医療を提供することにつながっていることを学んだ。

3. これからの地域医療の在り方

今後の地域医療の在り方について、今以上に病院と地域のつながり・連携が大切になると考えられる。現段階においても退院先の介護施設が空かず、患者さんが待つ状態にあり、今後高齢者人口が増加していく中で、地域と病院がどのように協力して人を循環させていくかが課題になると考えられる。そのような状況の中では、できる限り早期に地域に戻る事が重要であり、短い入院生活の中で患者さんとその家族の地域での生活について考える必要がある。病院・地域で働く医療者が、その人が生きる地域にフォーカスを当て、特徴や配慮する点などの情報を集め、個人個人に寄り添ったサポートが必要になってくると考えた。加えて、高齢化が進んだ状況の中で、山間部などに生活の場を持ち、自分で病院に行けない人のために訪問看護を行うことや、介護が必要な人のために介護士に来てもらうなど病院と地域の医療・介護機関が協力することが必要であると考え。また、退院支援では入院期間で得た情報を地域の機関と共有し患者さんの望む今後の生活を実現することが地域医療に求められることであり、そのためにも多職種・多機関で患者を診るという関わり方が重要であると考え。さらに、病院はそれぞれ役割を担っており、その役割は効率的に地域全体に医療を届けることにつながっている。高齢化が進む島根県では、医療職がそれぞれに必要な能力を身につけ、多職種と速やかにかつこまめに連絡を取ることが地域医療の質を向上させ、地域の人の健康を守ることに発展していくと考える。患者を病院のみで支えるのではなく、患者を地域に送り出し、自立した生活を支え、その人が望む生活を支援することが今後の地域医療で必要になると考えられる。

4. 浜田医療センターの皆様

お忙しい中ご指導いただきありがとうございました。島根県の西部の中核である浜田医療センターの医療の現状を3日間で深く知ることが出来ました。大学で学習していた地域医療について、知識として言葉では分かっている、実際に目で見ると地域と浜田医療センターの繋がり深さや、地域連携室で行われている業務を詳しく知ることが出来ました。この3日間で学んだことを忘れずにこれからの地域医療、看護の学習に活かしていきたいと思っております。ありがとうございました。



公立邑智病院

<看護学科>

下橋 歩実

宮原 亜優

モア 樹莉亜

矢田 悠真

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

島根の地域医療 医療施設版 プログラム

<公立邑智病院>

日時			内 容			
1日目 9/4 (水)	午前	全員	10:30-11:15	オリエンテーション	あいさつ(院長、事務部長、看護部長、大田師長)、自己紹介等	
			11:15-12:00	看護部長講義	病院概要、看護部紹介	
			12:00-13:00	休憩		
	午後	全員	13:00-13:30	病院紹介	動画、広報誌、SNS等	
			13:30-14:00	院長講義	小児、地域医療について	
			14:00-15:00	地域連携室	地域連携室の業務、役割について	
			15:00-16:00	新棟見学	新本館棟の見学	
	2日目 9/5 (木)	午前	A	8:30-11:00	急性期病棟	朝のミーティング見学、初期評価見学、ガーゼ交換、ラウンド随行等
11:00-12:00				透析科	透析業務見学	
B			8:30-11:00	回復期病棟	朝のミーティング見学、初期評価見学、退院支援業務見学、ラウンド随行等	
			11:00-12:00	外来	看護師の初診患者対応、継続看護見学、ご家族を含めた入院対応の見学	
全員			12:00-13:00	休憩		
午後			全員	13:00-14:00	薬剤科	薬剤師の業務見学
		14:00-14:30		画像診断科	画像検査、超音波検査見学	
		15:00-16:00		褥瘡回診	診療看護師の褥瘡回診に同行	
		3日目 9/6 (金)		午前	A	8:30-11:00
11:00-12:00			外来			看護師の初診患者対応、継続看護見学、ご家族を含めた入院対応の見学
B	8:30-11:00		急性期病棟		朝のミーティング見学、初期評価見学、ガーゼ交換、ラウンド随行等	
	11:00-12:00		透析科		透析業務見学	
全員	12:00-13:00	休憩				
午後	全員	13:00-13:30	リハビリテーション科		リハビリテーションの概要説明、見学	
		13:30-14:30	まとめ	実習振り返り、意見交換		

2チーム(A、B)に分かれて実習をしていただく場合があります。

救急対応などでスケジュールが変更になる場合もあります。

中山間地域の医療を支える病院の形

公立邑智病院

下橋歩実 宮原亜優 モア樹莉亜 矢田悠真

1. 病院概要

邑智病院は県中部の中山間地域に位置している。邑南町・川本町・美郷町からなる邑智郡内唯一の急性期・救急告示病院である。地理的にも孤立し、邑智郡の全ての医療をまかなうことの出来る地域完結型の医療提供が求められている。病床数 98 床、10 科の診療科を持ち、医師だけではなく診療看護師が最前線で活躍し、拠点病院としての機能を支えている。また、独自のプロジェクトに基づく経営により、公立病院では珍しく黒字経営の維持に成功している。10 月には本館建て替えに伴い、最新技術を取り入れた新病院がオープンし地域の拠点病院としてさらなる活躍が期待されている。

2. フィールド学習の学び

● 診療看護師の方の活動からの学び

現在、島根県内の診療看護師の数は、15 人程度であるが、そのうち、邑智病院には 2 名が在籍しておられ、主に、①医師の負担の軽減や②病院全体の看護の質向上の 2 つの役割を担っている。

邑智病院では、看護師は、診療看護・外来看護・急性期看護・回復期看護の 4 つの部に分かれており、診療看護師はいずれかの病棟に限定されず、病院全体の看護に関わっている。この診療看護師の働き方は邑智病院特有のものである。①医師の負担軽減の一つとして、邑智病院では、毎日 11:00～14:00 の時間帯でのウォークイン・救急外来の初期対応を診療看護師が行っている。この時間帯は医師の昼の休憩の時間にあたるため、医師不足の邑智病院においては、ウォークイン・救急外来の初期対応を診療看護師が行うことで、医師は休憩時間を取ることができるという仕組みができています。また、転院搬送の同乗も診療看護師が行っている。②病院全体での看護の質の向上のため、診療看護師は医局のカンファレンス後に看護師の病棟ミーティングに参加し、医局のカンファレンスの情報や入院患者の検査値や画像の見方、治療方針などについて共有をしたり、看護師の学習の機会を設けたりしている。

これら 2 つの活動を見せてもらい、邑智病院での診療看護師はその日のスケジュールなど自ら考えて動き、物事に臨機応変に対応し、看護師をまとめ、導いている存在であることを学んだ。これらのことを病院全体で行っていること、また診療看護師がオールラウンダーであることが医師の負担軽減につながっていると理解した。

● 邑智病院での活動全体を通しての学び

邑智病院では、“自立プロジェクト”により、黒字経営を維持している。自立プロジェクトとは、職員一人一人が病院を我が家のように考え、改善の知恵を出し合い、病院の経営を支えるというものである。毎月、部門ごとに収支を計算し、支出を抑え、収入を上げられるよう、アイデアを

出し合う。つまり、部門ごとに家計簿をつけることで一人一人が病院・部門の経営に関心を持ち、行動する仕組みとなっている。

“自立プロジェクト”では、三つの意識改革が行われている。一つ目は、「より良い医療提供」で収益を増加することである。二つ目は、「もったいない意識」で無駄な経費の削減を行っている。三つ目は、「助け合いの文化」で時間を有効活用している。

このようなプロジェクトを行っていることで、地域に根付いた持続可能な地域医療体制の確保や透明度の高い経営を行っていく事を可能としている。

邑智病院では、地域医療を続けるために以下のことを心掛けている。

- ・ 邑智病院が存続しないと町に人が住み続けられないため、病院の存続がまず大事である。
- ・ 他医療機関と連携しつつも、少ない人数でも幅広い診療科を保つことで、可能な限り邑智病院内で完結できる医療を目指している。
- ・ 邑智病院は邑南町の唯一の公立病院であるため、断らない医療を徹底している。
- ・ 診療看護師を有効に使い、現在医療の課題である医師不足に対抗している。

この取り組みを行うことで治療を縮小させることなく、地域に根付いた持続可能な病院を経営できていることを学んだ。また、全職員が経営にも目を向けることで、良質の医療提供を維持することに繋がっていることを理解した。

3. これからの地域医療の在り方

邑智病院でのフィールド学習を通して、これからの地域医療の在り方について、次のように考えた。邑智病院だけではなく、医師不足・過疎化・高齢化の進む他の地域においても、人が住み続けられる地域にするために、拠点病院を存続する事が大事である。患者が地域で継続性のある適切な医療を受けられるようにするためには、他の地域の医療機関と相互に連携を図りつつ、できる限り地域の病院で医療が完結できるような診療体制をとることで、拠点病院としての機能を維持することが必要である。また、診療看護師の配置などにより、医療従事者不足の中で小規模でも病院の機能を維持するための取り組みを行う必要がある。病院存続のために医師や看護師その他医療スタッフ確保や設備の充実だけでなく、病院経営について職員一人一人が関心をもって学習し、病院全体で一丸となり取り組んでいく事が大切であると感じた。

6. 最後に

本フィールド学習を行うにあたり、公立邑智病院の病院スタッフの方々には大変お世話になりました。院長先生や看護師さんだけでなく、地域連携室やリハビリテーション科、薬剤科の方々など多職種の方々にお世話になりました。看護師の視点だけでなく、様々な部署の視点からのお話を聞き、各部署との連携など邑智病院についてより深く理解することが出来ました。また、とても優しく面白くお話をいただき邑智病院の暖かさを感じました。この度は本当にありがとうございました。



資料

フィールド関係機関・関係者一覧（敬称略）

1) 行政と医療機関

<雲南市・雲南市立病院>

雲南市役所

住 所：〒699-1392 雲南市木次町里方521-1

T E L：0854-40-1040 F A X：0854-40-1049

担当者：（健康福祉部健康推進課）副主幹保健師 岩田 冴香

雲南市立病院

住 所：〒699-1221雲南市大東町飯田96-1

T E L：0854-47-7510 F A X：0854-40-1049

担当者：（保健推進課）保健師 渡部 初枝

<飯南町・飯南町立飯南病院>

飯南町役場

住 所：〒690-3207 飯石郡飯南町頓原2064番地

T E L：0854-72-1770 F A X：0854-72-1775

担当者：（保健福祉課）課長補佐 福田 峰子

飯南町立飯南病院

住 所：〒690-3207 飯石郡飯南町頓原2060

T E L：0854-72-0221 F A X：0854-72-1333

担当者：事務長 高橋 克裕

<川本町・社会医療法人仁寿会 加藤病院>

川本町役場

住 所：〒696-8501 邑智郡川本町大字川本271-3

T E L：0855-72-0633 F A X：0855-72-0635

担当者：（健康福祉課）主査 安田 育子

社会医療法人仁寿会加藤病院

住 所：〒696-0001 邑智郡川本町川本383-1

T E L：0855-72-0640 F A X：0855-72-3039

担当者：看護部長 中平 右子

<津和野町・医療法人橘井堂 津和野共存病院>

津和野町

(医療対策課)

住 所 : 〒699-5604 鹿足郡津和野町森村口141

T E L : 0856-72-4088 F A X : 0856-72-0688

担当者 : (医療対策課) 課長補佐 清水 孝倫

(健康増進課)

住 所 : 〒699-5605 鹿足郡津和野町後田口64-6

T E L : 0856-72-0657 F A X : 0856-72-1650

担当者 : (健康福祉課) 保健師 小山 久美

医療法人橘井堂 津和野共存病院

住 所 : 〒699-5604 鹿足郡津和野町森村口141

T E L : 0856-72-0660 F A X : 0856-72-0774

担当者 : 津和野共存病院・介護老人保健施設せせらぎ・日原診療所
看介護部 部長 大庭 淳子

<隠岐の島町・隠岐広域連合立 隠岐病院>

隠岐の島町

住 所 : 〒685-8585 隠岐郡隠岐の島町下西78番地2

T E L : 08512-2-8562 F A X : 08512-2-6630

担当者 : (保健課) 課長補佐 岸本 幸子

隠岐広域連合立 隠岐病院

住 所 : 〒685-0016 隠岐郡隠岐の島町城北町355

T E L : 08512-3-1770 F A X : 08512-2-6149

担当者 : 事務部総務課 島の医療人育成センター主任係長 村上 翔

<西ノ島町・隠岐広域連合立 隠岐島前病院>

西ノ島町役場

住 所 : 〒684-0303 隠岐郡西ノ島町大字美田600番地4

T E L : 08514-6-0104 F A X : 08514-6-1183

担当者 : (健康福祉課) 課長補佐 小藤 和美

隠岐広域連合立 隠岐島前病院

住 所 : 〒684-0303 隠岐郡西ノ島町大字美田2071-1

T E L : 08514-7-8211 F A X : 08514-7-8702

担当者 : 看護部長 家中 ふみ代

<益田市・益田地域医療センター-医師会病院>

益田市役所

住 所 : 〒698-0024 益田市駅前町17番1号 益田市立保健センター

T E L : 0856-31-0214 F A X : 0856-23-7134

担当者 : 福祉環境部健康増進課 課長 盆子原 洋子

福祉環境部健康増進課 主幹 岩本 香奈子

益田地域医療センター-医師会病院

住 所 : 〒699-3676 益田市遠田町1917番地2

T E L : 0856-22-3611 F A X : 0856-22-0407

担当者 : 事務長 田中 盛大

事務部 事務次長 大石 耕生

<奥出雲町・町立奥出雲病院>

奥出雲町役場

住 所 : 〒699-1511 仁多郡奥出雲町三成358-1

T E L : 0854-54-2514 F A X : 0854-54-1229

担当者 : 政策企画課企画係 課長補佐 稲岡 宏典

町立奥出雲病院

住 所 : 〒699-1511 仁多郡奥出雲町三成1622-1

T E L : 0854-54-1122 F A X : 0854-54-1280

担当者 : 看護部長 菅田 ゆかり

在宅診療センター 係長 和久利 司

2) 行政

<p><邑南町> 邑南町役場 住 所 : 〒696-0393 邑智郡邑南町淀原153-1 T E L : 0855-83-1123 F A X : 0855-83-0165 担当者 : (保健課) 主任保健師 竹内 芳騎</p>
<p><海士町> 海士町役場 住 所 : 〒684-0403 隠岐郡海士町大字海士1490 T E L : 08514-2-1822 F A X : 08514-2-0208 担当者 : (健康福祉課) 主査 木村 理恵</p>
<p><知夫村> 知夫村役場 住 所 : 〒684-0102 隠岐郡知夫村1065番地 T E L : 08514-8-2211 F A X : 08514-8-2093 担当者 : (村民福祉課) 主任主事 松本 つばさ</p>

3) 医療機関

<p><出雲市立総合医療センター> 住 所 : 〒691-0003 島根県出雲市灘分町613番地 T E L : 0853-63-5111 F A X : 0853-63-4228 担当者 : 看護部長 永瀬 里佳</p>
<p><社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院> 住 所 : 〒695-8505 島根県江津市江津町 1016-37 T E L : 0855-54-0101 F A X : 0855-54-0171 担当者 : 看護部長 大崎 恵子</p>
<p><独立行政法人 国立病院機構 浜田医療センター> 住 所 : 〒697-8511 島根県浜田市浅井町 777 番地 12 T E L : 0855-25-0505 F A X : 0855-28-7070 担当者 : 副看護部長 藤津 京子</p>
<p><公立邑智病院> 住 所 : 〒696-0193 島根県邑智郡邑南町中野 3848-2 T E L : 0855-95-2111 F A X : 0855-95-2313 担当者 : 診療看護師 看護師長 大田 美穂子 企画調整課 田中 みのり</p>

今年度は、益田市・益田地域医療センター医師会病院と奥出雲町・町立奥出雲病院の2フィールドが新たに加わり、「行政と医療施設」8フィールド、「行政」3フィールド、「医療施設」4フィールドでフィールド学習を実施しました。

学生たちは、地域医療に実際に触れ、自分自身、グループで考えることができ、充実したフィールドワークになりました。

学生達は、この経験を活かし、地域医療にさらに興味を深め、今後の学修や自分のキャリアに活用してくれることを期待しています。この場を借りて、各市町の関係者の皆さま、各医療施設の関係者の皆様、地域の住民の皆様、指導者の皆様に深く御礼申し上げます。

担当 吉松恵子・小田美紀子・澤幸子

令和6年度 島根の地域医療

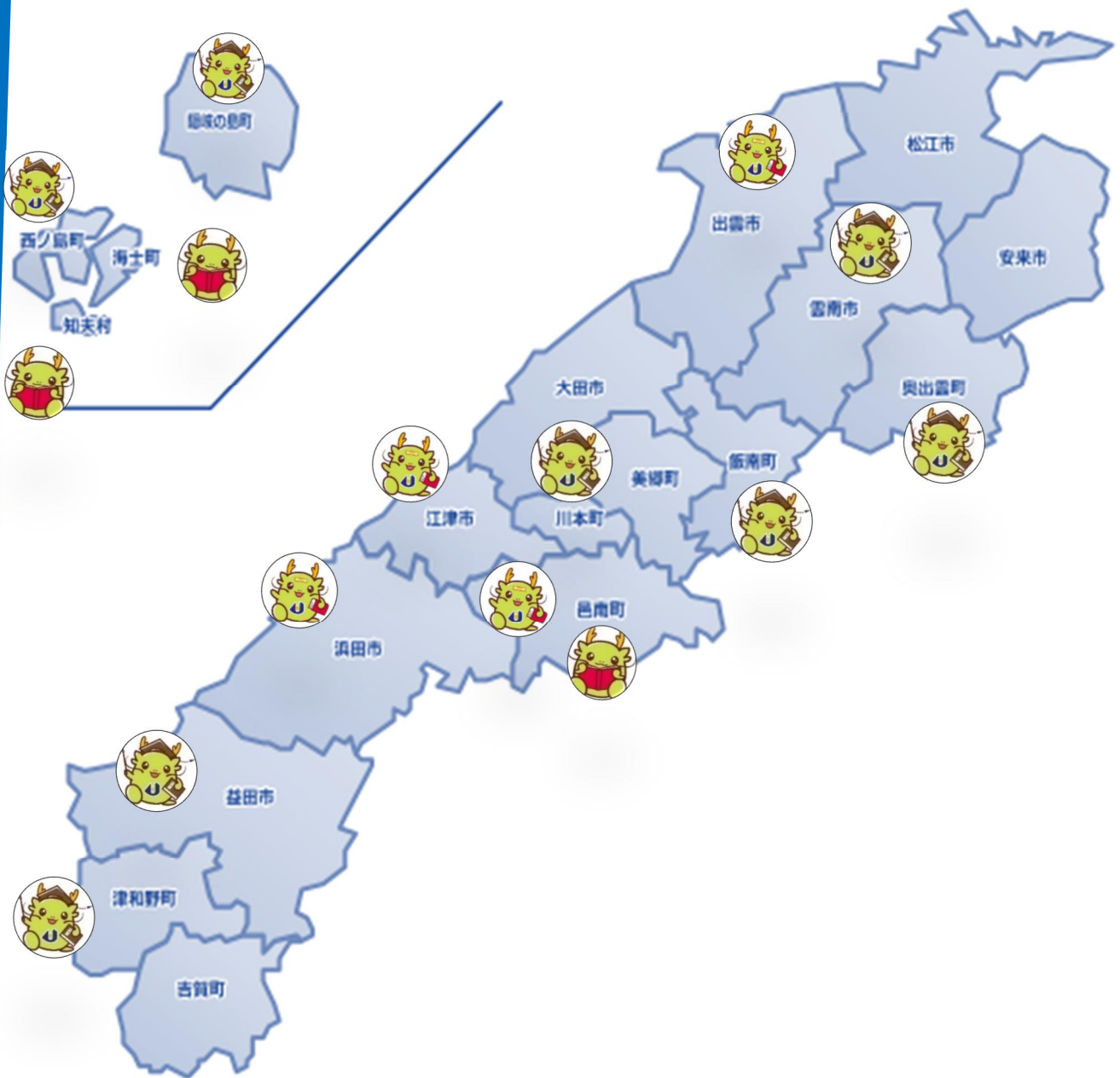
フィールド学習報告書



令和7年度

「島根の地域医療」

フィールド学習報告書



島根県立大学 看護栄養学部

ごあいさつ

島根県立大学出雲キャンパス 学部長 高橋恵美子

「島根の地域医療」は、平成 24 年に本学看護学科が 4 年制大学になった時に開講した科目です。平成 30 年に看護栄養学部となった後も、健康栄養学科の学生と看護学科の学生が共に学ぶ科目として発展してきました。島根で学ぶ学生の皆さんが、大学を飛び出して、離島や中山間地域を有する島根県の各地に赴き、その地域に身を置き、生活を肌で体験し、学ばせていただく科目です。当初 6 か所であったフィールドは、地域や領域を広げ現在 15 か所となっています。

少子化と超高齢化は全国いずれの地域でも抱える大きな問題です。とりわけ中山間地域および島嶼地域ではその進行が著しく、交通手段の制限、医療資源へのアクセス困難など生活に大きな影響を与えています。しかし、今回の報告書からは、限られた地域だからこそその強み、地域の良さを生かし、顔の見える繋がりや連携があることを多くの学生さんが学ばれていたことがわかりました。地域で働かされている専門職の方々や、生活されている住民の皆様との触れ合いの中で、その方々の元気で前向きな姿勢、少ない資源を有効に利用し、工夫しながら豊かで安心な暮らしを作られていることを直に体験された成果だと思っています。

この科目は、島根という地域を学ぶ科目ではありますが、同時に現在日本中どの地域でも起こっている課題を考える貴重な機会になっていると思います。これから先、学生の皆さんがいずれの地域で活躍されるにあたって、この学修で得られた学びは大いに役立つと信じています。今後さらに学習を重ねていきながら、自らの目指す専門職像をより具体的に描き、それに向かい努力して行って欲しいと願っています。

最後になりましたが、現地での学生の活動にあたり、丁寧にご指導いただきました関係者の皆様、そして学生を温かく迎えてくださった地域の皆様、心より感謝申し上げます。

令和 7 年 11 月 吉日

目 次

島根の地域医療 授業概要	1
フィールド学習スケジュール	2
フィールド別学習報告	
【行政・医療機関】	
雲南市・雲南市立病院	3
飯南町・飯南町立飯南病院	7
川本町・社会医療法人仁寿会 加藤病院	11
津和野町・医療法人橘井堂 津和野共存病院	15
隠岐の島町・隠岐広域連合立 隠岐病院	19
西ノ島町・隠岐広域連合立 隠岐島前病院	23
益田市・益田地域医療センター医師会病院	27
奥出雲町・町立奥出雲病院	31
【行政】	
邑南町	35
海士町	39
知夫村	43
【医療機関】	
出雲市立総合医療センター	47
社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院	51
独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	55
公立邑智病院	59
資料	
フィールド関係機関・関係者一覧	63

島根の地域医療 授業概要

【目的】

島根県内の島嶼地域、中山間地域、海岸部における保健医療福祉活動を通して、地域医療への理解と関心を深める。

【目標】

1. 島根県の島嶼地域や中山間地域の住民の生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。
2. 住民の生活や文化と健康課題との関連を認識する。
3. 住民の生活を支える保健医療福祉施設や行政および教育機関の役割を理解する。
4. 住民の生活を支える専門職（看護職・管理栄養士等）の役割や機能を認識する。
5. 保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通して、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。
6. 住民の生活を支えるための今後の地域医療のあり方について考察する。

【授業計画】

1. 島根県の保健・医療・福祉と生活の現状

島根県の保健・医療・福祉の現状と生活を支える保健・医療・福祉の専門職の役割と機能

2. 地域の医療提供体制について（医療計画など）

／ 招致講義：村下伯先生（島根県健康福祉部医療統括監）

3. 地域包括ケアシステムについて / 招致講義：村下伯先生（島根県健康福祉部医療統括監）

4. 認知症とともに生きるということ～共生社会を目指すまちづくりを考える～

／客員教授特別講義：町永俊雄先生（福祉ジャーナリスト）

5. フィールドの地域特性<グループ学習①>

6. フィールドの地域特性<グループ学習②>

7. ～13. フィールド学習

- ・フィールドの生活と文化に触れ、地域の特性を理解する。
- ・保健医療福祉活動の連携や協働の実践を通して、多職種連携における看護職・管理栄養士としてのあり方を考察する。

14. まとめ

【フィールド学習スケジュール】

	フィールド	実施期間
行政と医療 機関	雲南市・雲南市立病院	8/19 (火) ~8/20 (水)
	飯南町・飯南病院	8/20 (水) ~8/21 (木)
	川本町・加藤病院	8/26 (火) ~8/27 (水)
	津和野町・津和野共存病院	9/3 (水) ~9/5 (金)
	隠岐の島町・隠岐病院	9/10 (水) ~9/12 (金)
	西ノ島町・島前病院	9/2 (火) ~9/4 (木)
	益田市・医師会病院	9/4 (木) ~9/5 (金)
	奥出雲町・奥出雲病院	9/3 (水) ~9/4 (木)
行政	邑南町	9/9 (火) ~9/10 (水)
	海士町	8/20 (水) ~8/22 (金)
	知夫村	8/27 (水) ~8/29 (金)
医療機関 ※看護学科 のみ	出雲市立総合医療センター	8/27 (水) ~8/29 (金)
	社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院	8/19 (火) ~8/21 (木)
	独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	8/19 (火) ~8/21 (木)
	公立邑智病院	9/8 (月) ~9/10 (水)

学生達が、フィールドとの交流を通じた学び・これからの地域医療のあり方について考察した内容をまとめ、報告書とさせていただきます。

【行政・医療機関】

雲南市・ 雲南市立病院

<看護学科>

石倉 結衣 小笠原 桜子 小村 梨緒 小林 愛実
竹下 綾香 永瀬 陽菜 松田 和都

<健康栄養学科>

足立 真柚佳 荒川 摩耶 伊藤 美羽 木原 麻維

<担当教員>

祝原 あゆみ 講師

「島根の地域医療」フィールド学習日程表 【雲南市・雲南市立病院】

【雲南市・午前】

月	日	曜日	時間	内容		
				1班(5名)	2班(3名)	3班(3名)
8	19	火	8:20	雲南市役所本庁舎到着、あいさつ		
			8:40	202会議室で待機		3班(3名):川西集会所へ出発
			9:00	1班(5名):三刀屋交流センターへ出発	2班(3名):横手谷集会所へ出発	うんなん幸雲体操見学・体験
			9:30	うんなん幸雲体操見学・体験	うんなん幸雲体操見学・体験	
			10:00			
			11:00	帰庁		
			11:10	オリエンテーション(202会議室) *雲南市保健事業全般について *うんなん幸雲体操について *栄養士業務について *歯科口腔保健について		
			12:00	弁当到着後、昼食(202会議室)→終了後 201会議室へ移動		

【雲南市・午後】

月	日	曜日	時間	内容		
				1班(4名)	2班(3名)	3班(栄養学科4名)
8	19	火	12:40			上町集会所へ出発
			13:15	新市交流センターへ出発	ケアポートよしだへ出発	幸雲体操貯筋クラブ栄養指導体験
			13:30	新市いきいき会 会長の講話		
			14:00		にこにこ運動教室(水中運動)参加	
			15:00			
			15:30			帰庁
			16:00	帰庁	帰庁	
			16:30	まとめ(201会議室)		
17:00	入間交流センターへ出発(市役所前17:25発吉田大東線→掛合の里下車、掛合の里18:17発赤名吉田線→入間)					

【雲南市立病院】

月	日	曜日	時間	内容	
				1班(看護学科)	2班(栄養学科)
8	20	水	10:20	雲南市立病院正面玄関到着 (入間9:01発赤名吉田線→掛合の里下車、掛合の里9:20発吉田大東線→雲南市病院10:14着)	
			10:30	オリエンテーション・院内見学	
			12:00	昼食	
			13:30	病院ボランティアの方との話・交流	
			15:00	病院祭りで行う住民への健康クイズの内容を考え作成する	栄養科にて
			16:00	まとめ	
			17:00	帰学	

雲南市・雲南市立病院での学び

(うんなん幸雲体操、新市いきいき会、雲南市でのその他の学び、雲南市立病院)

うんなん幸雲体操



雲南市で行われている「うんなん幸雲体操」を見学・体験し、住民の健康意識の高さを感じた。手足におもりをつけ、季節の歌を歌いながら体を動かすことで、筋力強化だけでなく口腔機能や認知機能の維持にも繋がっていると感じた。実際に参加者からは「腰痛が改善した」「転びにくくなった」などの声が聞かれ、継続による効果があると分かった。体操の場は運動だけでなく、住民同士が交流し孤独を軽減する役割も果たしていると感じた。笑顔で励まし合う雰囲気がみられ、健康づくりと地域づくりが一体となっていると感じた。

新市いきいき会と地域自主組織

新市いきいき会の会長の講話から、地域自主組織の役割を学んだ。雲南市は合併前から自主組織の準備を進めており、交付金制度の活用や発表会での意見交換を通して持続的な発展を遂げていることが分かった。特に印象に残ったのは「住民福祉カード」であり、年齢や世帯構成などを把握することで災害時の安否確認や支援に繋がっていることを学んだ。また「おねがい会員」「まかせて会員」という制度により、住民同士が日常の見守りや災害時の避難支援を行い、地域で助け合う仕組みが整えられていた。こうした取り組みは、一人暮らしの高齢者も安心して暮らせる環境づくりや地域の絆を深めることに直結しており、住民が主体的に動くことの大切さを学んだ。

雲南市でのその他の学び

水中運動の体験では、浮力を活かして関節に負担をかけず筋力を鍛えることができることを学んだ。ペア運動や脳トレを組み合わせる工夫により、楽しみながら継続できる仕組みになっていた。また、市役所での学びでは、保健師だけでなく栄養士や歯科衛生士と連携して保健事業を進められており、多職種が切れ目なく住民を支えていることを知った。

上町集会所で行われた「幸雲体操貯筋クラブ栄養指導」は、参加者が5名ほどで、幸雲体操の前に管理栄養士による栄養指導が行われていた。栄養指導では、クイズやアンケート、資料の配布を通じて、フレイル予防に必要な栄養や運動の重要性を楽しく学べる工夫がされていた。また、日常的に取り入れやすい食事改善の方法も紹介され、実践しやすい内容であった。その後、うんなん幸雲体操を行い、参加者同士で教え合いながら楽しんで取り組んでいた。「体操を始めてから体の調子が良くなった」と話す人もおり、体操によって身体にいい影響を与えていることが改めて分かった。この体験から、フレイル予防には運動だけでなく、栄養指導もあわせて行うことが大切だと学んだ。

雲南市立病院



雲南市立病院は「地域医療日本一」を目指し、行政や地域住民と協働しながら幅広い取り組みを行っている。

保健推進課では、人間ドックや各種健診、予防接種、糖尿病教室や健康講座の開催などの一次予防から三次予防まで幅広い活動が行われていることを知り、これにより、病気の早期発見・早期治療だけでなく、健康な人も含めて住民全体の健康意識が高められていることを学んだ。また、在宅療養指導などを

通じて、病院に通うだけではなく住み慣れた場所で自分らしい療養生活を送る方々のサポートもしていることを学んだ。地域連携室は医療・介護・行政をつなぐ架け橋として大きな役割を担っており、転院支援や訪問診療、看取り支援などを行い、高齢者や重症患者が安心して医療を受けられるようサポートしていることが分かった。

また、病院ボランティアの方々は、車いす介助や草取り、病院イベントの支援や啓発などの活動を行っておられる。このことからボランティアの方々の活動の積み重ねが病院を支えていると感じた。高齢化による継承の課題はあるが、感謝の言葉や交流が活動のやりがいとなり、地域医療を住民自身が支える土台になっていると感じた。さらに、雲南市立病院では年に1回「病院祭」を開催しており、講演やコンサートなどを通じて住民が気軽に病院に足を運べる機会を設けている。これにより、病院は「病気の人だけが行く場所」という印象を和らげ、地域の交流の場としても親しまれていることが分かった。また、病院は耐震構造や災害訓練など災害対策も整えており、いざという時に市民が安心して避難できる拠点としての役割も担っていると感じた。

雲南市立病院には4名の栄養士が在籍し、それぞれ担当病棟を持ち、献立作成や栄養管理、検査などの業務にあたっている。日常的な看護師・医師との密な連携、チーム医療の中での情報共有が印象的だった。また、嗜好調査をもとに、必要な栄養素が摂取できるよう個別に食事内容を調整している点にも専門性を感じた。さらに、栄養不足の背景にある生活環境にも着目し、移動販売の紹介や料理教室の開催など、地域に根ざした支援も行っている。今後は、支援が届きにくい人々へのアプローチ方法が課題であると学んだ。管理栄養士は、医療と生活をつなぐ重要な役割を担っていると実感した。

まとめと地域医療のあり方

今回のフィールドワークを通して、地域医療は「病院が住民を支える」だけでなく「住民も医療に関わり共に課題を解決していくこと」が重要だと学んだ。行政・医療・介護・住民が相互に連携し、互いに助け合う関係を築くことが、持続可能な地域医療につながると考える。一方で、中山間地域では通院が困難な高齢者が多く、訪問診療や在宅ケアの充実が欠かせないため、多職種連携が不可欠であり、信頼関係や情報共有、共通の目標が重要であると考えた。また、医療人材の不足や地域定着の課題も大きいと感じた。そのため、教育・研修の充実やキャリア支援、働きがいや地域との繋がりを感ぜられる環境づくりが求められると考えた。加えて、住民に医療知識を広める活動を行うことで、予防や早期受診を促し、地域全体の健康づくりに繋がると考える。

飯南町・ 飯南町立飯南病院

<看護学科>

有藤 聖斗 石飛 舞 井上 せせら 沖野 航平
北村 美樹 眞綿 音和 宮川 彩音

<健康栄養学科>

油谷 奈桜 小野 芳弘 洲村 真依 中士代 愛梨

<担当教員>

多々納 浩 助教

令和 7 年度フィールド学習日程表

フィールド名 (飯南町)

月日曜	班	時間 (所要時間)	体験内容	場所	担当者
8/20 (水)	全員	～9:20若	移動 (⇒保健福祉C)		福田
		9:30発	移動 (⇒もりのす)		福田
		10:00～12:30 (150)	森林セラピー体験	もりのす	田原
		12:30～13:00 (30)	昼食	もりのす	田原
		13:00発	移動 (⇒保健福祉C)		
		13:30若	10分間休憩・準備	保健福祉C	
		13:40～13:55 (15)	オリエンテーション①	保健福祉C	安部
		13:55～14:10 (15)	オリエンテーション②病院説明 : 病院事務長	保健福祉C	安部
		14:10～14:40 (30)	オリエンテーション③看護部説明 : 看護部長	保健福祉C	安部
			10分間休憩		
		14:50～16:20 (90)	講義 (講師 : 院長)	保健福祉C	安部
	16:30発	移動 (保健福祉C ⇒衣掛)			
8/21 (木)	全員	8:00発～8:20若	移動 (衣掛 ⇒保健福祉C)		
	1班	8:30発	移動 (⇒保健福祉実習)		
		9:00～10:20 (80)	保健福祉実習 (長生き体操)	来島高屋地区	嘉田
		10:30発	移動 (⇒保健福祉C)		
	2班	9:15～9:45 (30)	保健師業務について (説明:山戸)	保健福祉C	安部
		9:50発	移動 (⇒大しめ縄館)		
		10:00～11:20 (80)	しめ縄説明・体験	大しめ縄創作館	福田
		11:30発	移動 (⇒保健福祉C)		
	全員	11:45～11:55 (10)	管理栄養士の業務について (説明:三島)	保健福祉C	福田
	全員	12:00～13:00 (60)	昼食	保健福祉C	
	1班	13:00発	移動 (⇒大しめ縄館)		
		13:10～14:30 (80)	しめ縄説明・体験	大しめ縄創作館	福田
		14:40発	移動 (⇒保健福祉C)		
		14:50～15:20 (30)	保健師業務について (説明:山戸)	保健福祉C	安部
	2班	13:00発	移動 (⇒保健福祉実習)		
13:15～15:00 (105)		保健福祉実習 (長生き体操)	頓原奥畑地区	嘉田	
	15:00発	移動 (⇒保健福祉C)			
全員	15:20～16:20 (60)	まとめ (グループワーク・発表)	保健福祉C	福田	
	16:20発～17:30若	移動 (⇒大学)			

今回の飯南町・飯南病院でのフィールド学習を通して得た学びを大きく三つの観点から整理し今後の地域医療のあり方についてまとめた。1つ目は、飯南病院を核とした地域医療に在り方、2つ目は住民主体の地域づくり、3つ目は医療や行政と地域住民の協働である。

1) 飯南病院を核とした地域医療の在り方

飯南病院は、「地域医療は医療の中ではなく、地域の中にある」という理念のもと、住民と積極的に意見交換を行い、意見を積極的に取り入れ、地域に密着した医療を展開している。総合診療医を中心に、様々なスタッフとの連携を密にし、さらに、隣接する飯南町保健福祉センターとの協働により、患者の治療だけでなく地域住民の健康増進や疾病予防にも深く関わっている。このような取り組みは、プライマリヘルスケアの理念を発展させ、「ニーズに対応したら今の形になった」という柔軟な姿勢から生まれたものであり、中山間地域で求められる医療を持続可能に提供するための重要な鍵となっている。今後も組織の壁を超えた連携と対話を重ね、オールラウンドにこなせる人材を育成していくことが、地域医療を維持するために不可欠であると考えられる。さらに、交通の便に大きな問題はないものの、もし運営が不可能になった場合、飯南町の約30km圏内に位置する救急告示病院がなくなり、搬送に1時間以上かかる事態になるため、持続させることは大きな課題である。



2) 住民主体の地域づくり

飯南町は、住民同士に強いつながりがあり地域への愛を育てているのが特徴である。例えば、「長生き体操」のように、住民が主体となって健康を守る「予防」が活発に行われている。この取り組みは、単に医療の枠内にとどまらず、医療と住民の生活、さらには観光が深く結びつけられており、高齢者が免許返納後も外出できるよう、元気なうちにバスの乗り方を教える教室を開くなど、住民一人ひとりが「その人らしく」生活できるよう、医療や福祉、行政、地域コミュニティが日常の細部にまで寄り添って支援を行う環境が整えられている。また、飯南町は高齢者だけでなく、子育て世代への支援も手厚いのが印象

めで、新生児出産祝い金や子どもの医療費免除など、経済的負担を軽減する独自の施策を充実させている。これらの取り組み全体を通し、高齢者から子どもまで、すべての世代が安心して暮らせる地域包括ケアの理想的な形を実現していることが示唆された。

3) 医療や行政と地域住民の協働

飯南町では、行政でたった一人の管理栄養士が、乳幼児から高齢者まで、全世代の住民の健康を一人で担当している。その活動は、地域住民向けの健康教室や、妊婦・夫婦向けの講座、高齢者への相談会など多岐にわたり、病気になってから治療するのではなく、日々の生活の中で病気を予防することに重点を置いている。また、



地域住民だけでなく、行政職員など関係者への啓発活動や健康チェックも実施し、人々の命を守る役割が医師や看護師だけでなく、予防を通して管理栄養士や行政職員にもあることを示している。飯南町のこのような取り組みは、単なる医療サービスのみにとどまらない。例えば、冬に一人暮らしが不安な高齢者のために宿泊施設を提供する、高校生の通学や通院に合わせてバスのダイヤを組むなど、住民の生活に寄り添った工夫が随所に見られる。このように、医療従事者が一方的に医療を提供するのではなく、住民が企画に参加、協働することにより信頼関係を築き、住民自身が健康活動に取り組めるように促す。これらのことを通し、飯南町は医療と住民が一体となり、地域全体で安心できる暮らしを守る理想的な地域包括ケアを実現していると言える。

最後に、地域医療とは、一律のモデルではなく、それぞれの地域の課題や特性に合わせて柔軟に形成し、進化させていくべきもので、その実現には、周辺市町村や都道府県を越えた広域連携が不可欠である。また、医療従事者には、決められた形にとらわれず、住民の生活に深く根ざした視点を持ち、柔軟に対応していく姿勢が求められることを実感した。さらに、今後の地域医療を考える上で、人口減少を防ぐための子育て世代への施策や、全世代が安心して暮らせるような支援策を講じることが重要だと学んだ。これらの学びを通し、専門職として「地域に根ざした視点を持ち、住民の生活とともに医療を考える」ことの大切さを再認識することができた。

川本町・ 社会医療法人仁寿会 加藤病院

<看護学科>

伊藤 美里 糸賀 百香 岡田 咲南 北村 萌江
古川 結 向井 亜紗実 村上 未紗

<健康栄養学科>

池田 晴奈 板垣 綾夏 勝部 亜弥 小澤 優菜

<担当教員>

谷村 綾子 准教授

令和7年度 島根の地域医療フィールド学習日程表

日程		体験内容	
月日	時間	1班(5名)	2班(6名)
8/26 (火)	8:00	移動(大学~川本町)	
	10:00	オリエンテーション	
	12:00	昼食	
	13:00	体験学習(川本町役場)	体験学習(加藤病院)
	14:00	(看・栄)ミニデイサービス 5名 (介護予防事業)	(看)訪問看護 2名 (看)訪問診療 2名
		「川本町第3期データヘルス計画」 について	(栄)居宅療養管理指導 2名
	16:30~	振り返り	
17:00	宿泊		
8/27 (水)	8:30	体験学習(加藤病院)	体験学習(川本町役場)
		(看)訪問看護 3名	(看)訪問(高齢者)2名 (看)訪問(高齢者)2名
		(栄)巡回診療 2名	「川本町老人福祉計画」について
			(栄)乳幼児相談 2名
	12:00	昼食(場所:加藤病院 研修室)・移動	
13:30	まとめのカンファレンス(場所:加藤病院 研修室)		
16:00	移動(川本町~大学)		

1. はじめに

今回のフィールド学習では、川本町における地域医療や介護について、巡回診療・居宅療養管理指導の同行、乳幼児指導、ミニデイサービスの参加、訪問診療・訪問看護の説明を通して学ぶ機会を得た。川本町は人口2,955人（2025年7月現在）のうち44.7%が65歳以上を占める中山間地域であり、高齢化や人口減少の課題を抱えている。



2. 巡回診療での学び

巡回診療では、管理栄養士に同行し公民館で行われている栄養相談を見学した。公民館では、管理栄養士による栄養相談だけでなく医師による診察や薬の処方、血液検査も行われていた。病院ではなく地域の集会場を拠点とすることで、交通手段が限られる高齢者も利用しやすい仕組みとなっており、病院に通うことが難しい住民が、気軽に診察や相談ができる環境が整っていると感じた。栄養相談に来ていた方は、複数回、指導を受けており、継続的な支援が行われていた。その一方、診察を受けに来ていた住民は5人、栄養相談に訪れた方は1人だけで、参加者が少ない現状もあった。また、加藤病院からスタッフが約40分かけて訪問しており、人員不足や移動の負担といった課題が大きいことを実感した。

3. グループホーム訪問での学び

居宅療養管理指導で「グループホームかわもと あいあいの家」を訪問し、EAT-10とMNAを用いた栄養スクリーニング評価を体験した。EAT-10では嚥下機能のリスク、MNAでは高齢者の低栄養リスクを把握でき、定期的実施され重症化予防に役立てられていた。質問をする際に質問項目をそのまま伝えても理解されにくいことが多いため、言い換えるなど利用者に合わせた工夫をしており、相手の反応を見ながら言葉を調整する重要性を実感した。また、本人からの情報だけでは不十分なこともあるため、施設職員との連携や多職種での情報共有を通じて、利用者の日常生活を把握し支援につなげていくことの大切さを体験した。

4. 乳幼児相談での学び

保健師と連携しながら身長・体重・頭囲・胸囲などの測定を行い、栄養士は離乳食や栄養に関する相談を行っている。相談は別室で行われ、成長の確認や親の不安解消につながる支援が実施されていた。会場にはおもちゃやボランティアによる「あそびのひろば」もあり、親子が安心して過ごせる環境が整えられていた。行政栄養士は乳幼児から高齢者まで幅広い世代を対象に、保健・福祉・教育など多方面と連携しながら地域住民の健康を支える役割を担っており、地域の食育や健康づくりを推進する上で重要な存在であることを知った。

5. ミニデイサービスでの学び

川本町では各地区のミニデイサービスを社会協議会に委託しており、今回、湯谷地区を見学した。活動として血圧測定、脳トレ、軽いスポーツを行った後にお茶を飲みながら会話を楽しんでおり、参加者は体を動かすだけでなく、交流も楽しみにしていた。血圧測定の際、スタッフが「最近どうですか」と声をかけ、体調だけでなく生活状況にも気を配り、医療と生活を支える視点が活かされていた。机などの片付けは住民が担い、役場や社会協議会の職員は支援者として関わっており、こうした姿勢は住民の主体性を尊重するために重要だと感じた。お茶の時間には盆踊りの参加者減少といった地域の課題も話題となり、孤立防止や見守りの場となっていた。介護予防だけでなく、地域コミュニティや心の健康維持にも重要な役割を果たしていると学んだ。

6. 訪問診療での学び

グループホームでは、医師が介護士から患者の日々のバイタルや体の状態を聞き取り、連携しながら診察を行っていた。診療中は薬の処方内容や使用頻度を確認し、症状に応じて追加の薬で様子を見るよう介護士に伝えるなど互いに尊重し合いながら多職種連携を行うことで、良好な関係を築いている様子が見受けられた。また、患者としてだけでなく生活者として接しながら、明るい雰囲気でのコミュニケーションを取っており、信頼関係が構築されているからこそ成り立っていることが感じられた。

7. 訪問看護での学び

訪問看護では中山間地域の訪問先で、看護師が実際に看護する様子を見学し、寝たきりや移動が困難な方にとって訪問看護の必要性が高いと実感した。そのうえで、地域との協働や自助・互助の促進が求められていると感じた。看護師は利用者だけでなく、ケアの負担を抱える家族とも信頼関係を築くため、丁寧な声掛けや所作など非言語的な関わりを大切にしていた。また、川本町や加藤病院から離れた隣の地域に住む移動困難者も取り残さない医療が印象的であった。この訪問看護を通して家族や対象者の思いを尊重し、人との「つながり」を重視していることを深く理解できた。

8. 今後の地域医療の在り方

今回の学びを通し、地域医療では病気の治療だけでなく、生活や心の支えも含め住民を見守ることが大切だと感じた。川本町のように高齢化や人口減少が進む地域では、安心して暮らせる体制の維持が重要となる。だからこそ、身近な場を活用し多職種が協力して継続的に支援する必要がある、特に住民が主体的に地域づくりに関わることは健康寿命の延伸や孤立防止につながり今後の地域医療の基盤となる。今回、貴重な現場を見学させていただき、様々な視点を取り入れることで、地域住民主体の地域づくり、地域医療における多職種間のチームワークの重要性を学べた。これらの学びを今後の学業や将来の地域医療への関わりに生かしていきたい。



津和野町・ 医療法人橘井堂 津和野共存病院

<看護学科>

岩谷 志麻 佐々木 杏莉 庄司 琴音 周藤 麻那
中村 楓 長崎 帆乃花 平井 結菜

<健康栄養学科>

高田 光琴 高見 咲 新田 千晴

<SA>

豊田 優

<担当教員>

田原（阿川） 啓子 准教授

令和7年度 島根県立大学フィールド学習日程表

9月3日(水)	12:45	津和野着 学生 10 名(看護7、栄養3) 引率 2 名(教員・SA)	県立大学
	13:00~13:15	オリエンテーション	(橋)大庭看護部長
	13:15~15:20	各部署へ移動	(橋)大庭看護部長
		・介護老人保健施設せせらぎ(2名)	及び各担当者
		・訪問診療(1名)	
		・訪問看護(2名)	
		・通所リハビリテーション(2名)	
		・津和野共存病院(施設内見学のみ:全員) ・厨房(3名)	
	15:20~15:30	休憩	
15:30~16:30	巡回診療について説明(講義)	(橋)飯島副院長	
16:30~16:50	当日反省会	県立大学	
16:50~	移動 宿泊施設		
9月4日(木)	8:40~	宿泊施設出発(※宿泊所からの距離によってて出発時間を調整)	
	8:50~8:55	集合	医療対策課
	8:55~9:00	移動	
	9:00~9:20	津和野太鼓谷稲成神社散策	医療対策課
	9:20~9:30	移動	
	9:30~11:30	骨密度測定・元気アップ教室	健康福祉課・医療対策課
	9:30~	骨密度測定	
	10:00~10:20	太田PHNIによる結果説明	
	10:20~	宗田RDIによる健康教室	
	10:30~	食改見学(Aグループ) 10~20分間	
	10:50~	食改見学(Bグループ) 10~20分間	
	11:20~11:30	移動	
	11:30~13:00	昼食(病院食)・休憩	医療法人橋井堂
	13:00~13:15	移動	以下、医療対策課
	13:15~13:35	旧堀氏庭園散策	
	13:35~13:40	移動	
	13:40~14:10	旧畑迫病院見学	
	14:10~14:25	移動	
	14:25~15:05	森嶋外記念館見学	
	15:05~15:20	移動	
	15:20~16:40	・地域医療連携センター活動概要(質疑含む) (連携・訪問診療・訪問看護・入退院支援等) ・地域包括支援センター活動概要(質疑含む)	(橋) 来村看護師 医療対策課 太田保健師
16:40~17:00	当日反省会	県立大学	
17:00~	移動 宿泊施設		
9月5日(金)	8:30~	宿泊施設出発	
	8:45~10:30	まとめ及び記録	大学担当教職員
	10:30~11:30	報告会	(橋)飯島副院長(写真のみ) (橋)大庭看護部長、来村 医療対策課・健康福祉課
	11:30~12:00	終わりの会(記念撮影等)	
		解散	県立大学

※(橋)は医療法人橋井堂

1. 津和野町について

津和野町は、島根県の最西端に位置し、南西側は山口市に接している。人口は、6480 人余りで高齢化率が 50%を超え、少子高齢化が進行している。津和野太鼓谷稲成神社や旧堀庭園、旧畑迫病院、森鷗外記念館などの歴史的・文化的資源が豊富である。津和野共存病院内に地域包括支援センターと地域医療連携センターが併設されていることで、医療・介護・在宅が密に連携をとっていることが特徴である。フィールド学習を通して、地域の歴史や文化、そして地域医療の現状について学ぶ機会を得た。

2. フィールド学習を通しての学び

津和野町の高齢化率は 50%を超えている。それは日本の最先端であり、今の私たちには身近なことではないと感じた。しかし、私たちが働いている頃には津和野町の今があたり前になると考えられる。その中で私たちは 3つのことを学んだ。

1つ目は、限られた資源の中で持続可能な地域医療を行うことを学んだ。高齢化に伴い医療・介護などの需要が増加する一方、専門職の人材不足という問題がある。専門職の確保が難しく、施設が最大限の受け入れを行えず、自宅で待機する高齢者も存在する。このような状況に対し、山口県も含めた近隣の市町村の施設と連携を図り、その施設を利用してもらうなど、個人を尊重する取り組みを行っている。しかし、入所できない方も存在し、そのような方には在宅サービスの利用を促している。また、専門科の縮小もあり、総合診療医が幅広く診察し、必要に応じて他院を紹介する体制が取られているなど、専門医不足がサービス提供に影響している。人材不足という厳しい現実の中で、「あるものでやる、ないものはない」という考え方を共有し、医師や看護師だけでなく、介護職や住民の協力を得て地域を支えているということ学んだ。津和野共存病院の厨房スタッフ不足に対し、管理栄養士がほかの業務を担うことや外国人の採用予定、クックフリーズなどの調理済み食品を取り入れるなど、限られた人材で効率的かつ安全な食事提供を行う工夫がなされている。全部を一から作ろう！というのは、人員不足にとって現実的ではないことを学ぶことができた。限られた人材と資源の中で、住民の健康を地域全体で支える体制が構築されていることを学んだ。こうした柔軟な姿勢があるからこそ、限られた資源の中でも持続可能な地域医療が成り立っているのだと感じた。

2つ目は、「待つ医療」ではなく「出向く医療」の重要性を学んだ。津和野共存病院は巡回診療を行っており、病院に来てもらうのではなく、病院側から出向いて診療を行っている。高齢者の立場から考えると、公共交通機関の減少により移動が困難であるという課題がある中で、直接その居住地に来てくれるという巡回診療は大きな役割を担っている。津和野共存病院の医師や看護師の想いとしては、津和野町の住民の健康を守るために自ら地域に出向き診療を行っていることを学んだ。巡回診療は地域包括ケアシステムとも深く結びつけられると考えて、「住みやすい地域」や、「寄り添う医療」を実現できるのではないかと考えた。

3つ目は、住民の力を借りながらお互いを支え合い生きていくこと学んだ。津和野町の

医療は「住民を中心に」進められているということが特徴である。住民を中心にするというのは具体的に、これからと今をどう生きたい（生活したい）のかというのを明らかにすることが大切であると学んだ。医師・看護師・リハビリ職・ケアマネジャーに加え、郵便局員や民生委員など医療外の人材を巻き込み、地域ぐるみで住民を支える体制を築かれている。また、健康教室やフレイルチェックなど住民主体の健康づくりを通じて、「支えられる側」から「支える側」に変わる仕組みを整えることで、地域力が高まり医療の持続可能性が確保される。こうした多様な人材の連携と住民の主体的な関わりが、誰もが安心して暮らせる地域づくりの鍵となると感じた。

今後の地域医療の在り方

今後の地域医療の在り方としては、限られた社会資源の中で、住民主体の支え合いや医療・介護・福祉の連携を通じ、病気だけでなく生活や思いに寄り添う予防的な医療を地域全体で実践し、巡回診療や訪問診療などにより誰もが住み慣れた場所で自分らしく暮らせる“住みやすい地域”を実現することが求められていると考える。

まとめ

津和野町でのフィールド学習を通して、過去の津和野町の裕福な時代も学ぶことができ、今自分たちが学んでいる医療の歴史も感じる事ができた。

津和野町では、地域に暮らす人々と医療者を含む支援者との距離感が近く、日常生活の動線上で支援をしていたり、困りごとの確認をされていた。このような顔が見える支援ができていることは、安心して地域で住み続けることを支えることができ、とても素敵だと感じた。顔が見える支援としては、巡回診療や訪問診療、健康教室などの場面で、医療専門職が個々住民を尊重し、その人に合った生活を支えていることがあった。実際に病院に行って話を聞いたりすることははじめてだったのでいい経験をする事ができた。とても有意義な時間を過ごす事ができた。今回、貴重な経験ができるようにプログラムを企画、運営して下さった皆様に感謝申し上げます。



隠岐の島町・ 隠岐広域連合立 隠岐病院

<看護学科>

應治 翔太 小椋 咲奈 竹森 瑠衣 梅野 琶月
福田 裕盛

<健康栄養学科>

白石 さゆり 星子 佳凜 山崎 瑞季

<SA>

福本 佳正

<担当教員>

山口 扶弥 教授
板持 智之 助教

島根の地域医療 隠岐の島町フィールド学習スケジュール

日時		内容	担当者	備考	
9月10日(水)	6:30	大学発	大学	マイクロバス	
	9:00	七類港発	大学	フェリー	
	11:25	西郷港着	大学		
	11:30~	港まわりで各自昼食 のぎのびハウスの鍵の受け取り(役場)	大学 板持先生		
	13:10	タクシーで移動(西郷港タクシー乗り場→隠岐病院)	大学	島タクシー	
	13:30 ~16:00	隠岐病院にて実習 ・オリエンテーション ・病院内見学 等	隠岐病院		
	17:30	タクシーで移動(隠岐病院→のぎのびハウス)	大学	島タクシー	
9月11日(木)	8:15	タクシーで移動(のぎのびハウス→役場)	大学	島タクシー	
	8:45 ~9:15	隠岐の島町にて実習(302会議室) ・あいさつ(板持先生)今日の流れの説明(家島) ・町のオリエンテーション(20分)	家島・大田		
	9:15 ~9:30	・各グループにわかれて自己紹介・打合せ	高村・鈴木・家島		
	9:30	隠岐の島町役場出発		公用車	
		【1G】(都万) 10:10~都万支所・公民館 10:30~都万診療所見学 都万方面観光	【2G】(中村) 10:30~12:00 サロン参加(西村集会所)	【1G】 高村・鈴木 【2G】 家島	【1G】 学生4名+ SA1名 【2G】 学生4名+ 教員1名
		12:00~13:00昼食休憩 (役場本庁302)	12:30~13:30昼食休憩 (中出張所)		
		13:00~15:00 健康教室参加(港町集会所)	14:00~中村診療所 見学 14:30~わがんと 見学 布施方面観光(支所・浄土ヶ浦)		
	16:00	現地より宿泊施設に直帰	役場	公用車	
	18:00	懇親会	病院		
	9月12日(金)	AM	宿泊施設の片付け・掃除、自由行動(観光)	大学	
13:10		タクシーで移動(西郷港タクシー乗り場→隠岐病院)	大学	島タクシー	
13:30		報告会(隠岐病院)	役場・病院		
		のぎのびハウスの鍵の返却(役場へ)	板持先生		
14:45		タクシーで移動(隠岐病院→西郷港タクシー乗り場)	大学	島タクシー	
15:40		西郷港発	大学	フェリー	
18:05		七類港着→大学へ	大学	マイクロバス	

隠岐の島町フィールド学習のまとめ

① 医療・福祉資源が限られている中での隠岐地域の医療体制や多職種連携について学ぶ。

隠岐の島町は離島であるため、限られた物資や人手で病院を運営する必要がある。また、島で唯一の総合病院であるため外来患者が多いことも挙げられる。視覚や聴覚など複数の疾患を抱える高齢者が多く受診し、産婦人科や小児科など幅広い診療科を備えていることから地域医療の拠点として住民から大きく頼られる。こうした患者の多様なニーズに応えるために、病院では様々な工夫がなされている。その1つに入退院支援がある。入院した段階から退院後を見据えた計画が開始され、患者の経過をみながら適切に修正が加えられる。高齢化の進行に伴い、退院後の帰り先に困る患者や身寄りのない独居高齢者が増加している現状を踏まえ、地域連携室のスタッフが中心となり、患者が安心して地域に戻れるように支援している。また、人員配置にも特徴がある。看護師は、複数の診療科を担当することが求められるため、経験等を踏まえて配置される。離島で働く医療スタッフは、多くの経験と幅広い知識、高度な技術を兼ね揃える必要があることを学んだ。さらに、管理栄養士は患者の食事状況を週1回の病棟カンファレンスで看護師と共有し、食事内容の変更や栄養補給法の検討を行う。また、妊婦さんには個別で栄養指導、高齢患者には口腔・嚥下ケアを行っている。隠岐病院は、各市町村から費用を集めており、限られた資源の中で地域に必要な医療を実現するべく発展を続けてきたことを実感した。

② 役場や診療所で行われている予防医療や地域社会との関わり

実際に私たちは認知症予防を目的とした健康サロンに参加し、転倒予防や認知機能低下予防を促すスクエアステップ、講座、隠岐体操などを体験した。これらの活動は、地域住民が主体的に健康維持に取り組む姿勢を示すものであり、地域包括ケアの実現に向けた重要な要素であると感じた。その後、開かれたお茶会でも地域住民と行政の距離の近さを実感するとともに、住民のアクティブで健康な姿が特に印象的だった。サロン等に参加することで人々のつながりができ交流が多くなり、健康にプラスの影響を与えていることが考えられる。さらに住民同士の距離が近いということは、お互いの立場や状況を把握しやすいため、島での安心した暮らしにつながっているのだろう。これは、離島ならではの強みであると考えられる。診療所では、3名の医師が交代で診療を行うほか、隠岐病院の医師が来所して診察を行う場合もある。また、歯科検診を実施し、午後には訪問診療を行うなど通院が難しい住民にとっても大きな支えとなっていることが感じられた。役場の取り組みは、予防を重視した活動を中心に展開されていると感じた。「個々の住んで良かったが実現できる町」を掲げ、高齢者のみの世帯が半数を占める隠岐の島において、重症化予防に向けた施策に積極的に取り組んでいることが見受けられた。



写真① スクエアステップの様子



写真② サロンに参加したときの様子

③ 隠岐の島町での交通について学び、医療や住民の健康の維持に交通がどのような影響を与えるのかを考える。

隠岐の島では、免許を返納した高齢者に対して公共交通機関の回数券が交付される制度が存在する。車を運転できなくなった後も移動手段を確保することで生活を支える仕組みであり、島の実情にあった制度であると理解した。制度の形は全国一律の仕組みで成り立つものではなく、各地域の文化や生活、環境に応じて工夫されるべきものであると感じた。隠岐の島町では、住民同士の強いつながりや自然な助け合いが健康づくりや福祉の支えとなっていると学んだ。また、公共交通支援のように生活に直結する取り組みが、住民の暮らしを守る上で大きな役割を果たしていることも理解できた。地域医療は医療機関や制度にとどまらず、人間関係や生活の知恵とも深く結びついているという点を強く学んだ。

④ 今後の地域医療のあり方

今回のフィールドワークを通して、地域医療や多職種連携について、関係が広範囲に広がることだけでは十分ではなく、むしろその関係をどれだけ深めることができるかという事が非常に大切であると気づくことができた。単に外に向かってたくさんの人や職種と関わり連携を広げるだけではなく、自分自身が地域に住む生活者の1人であるという事をベースにしながら、関係を築いていくという事が、結果として病院や診療所をはじめとする医療や福祉の場における信頼につながるということを実感した。また、医師や看護師に限らず、栄養士や薬剤師、保健師、行政など多職種が関わり、お互いの役割や立場を理解し、補い合いながら包括的な支援を行っていくことがこれからの地域医療ではとても重要だと考えた。

お忙しい中、ご指導いただきました隠岐の島町役場・隠岐病院の皆様、隠岐の島町民の皆様には深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



西ノ島町・ 隠岐広域連合立隠岐島前病院

<看護学科>

江角 遥斗 高橋 創大 立川 静 田中 野乃実
田中 柚葉 増田 花音

<健康栄養学科>

中田 芽奈 西原 愛華 前原 優 山本 佳奈

<SA>

原田 菜々子

<担当教員>

小川 智子 准教授

西ノ島町 フィールド学習 スケジュール

【1日目】

月日	時間	内容	担当
9/2 (火)	6:30	大学出発	富谷・小藤
	9:00	七類港 発 (西郷経由)	
	13:35	別府港 (西ノ島町) 着	
	14:00	西ノ島町役場着	
	14:10	オリエンテーション 内容：西ノ島町の概要、西ノ島町の保健活動	小藤・富谷
	15:30	宿泊施設へ移動 (荷物をおく) 町内視察	小藤・富谷 小藤・富谷
	17:00	宿泊施設へ移動	
18:30	夕食・入浴・就寝		

【2日目】

月日	時間	看護学科 (6名)			時間	健康栄養学科 (4名)	担当
		A (2名)	B (2名)	C (2名)			
9/3 (水)		看護学科 (6名)				健康栄養学科 (4名)	
		内容				内容	
		実習場所 : 島前病院				実習場所 : 西ノ島町役場・島前病院	
	7:45	浦郷発 (路線バス)			7:45	浦郷発 (路線バス)	
	8:09	島前病院着 (※到着後、大会議室に荷物を置き、着替えを済ませる)			7:59	役場到着	
	8:20	病院ミーティング			8:45	○行政栄養士について ○社会福祉協議会 (配食サービス施設) 見学 ○学校給食センターの見学 ○シオンこどもえんの給食施設の見学	
	9:00	○病棟・外来 ※グループごとの動きについては別紙参照					
	12:00	昼食・休憩			12:00	昼食・休憩	
	13:00	○訪問看護・往診・訪問リハビリテーション ※グループごとの動きについては別紙参照			13:30	○保育園の栄養士について ○みた保育園の給食施設見学	
	15:30	○医師講話 (福田聡司医師)			15:00	○島前病院 (給食施設) の見学 ○栄養士の講話等	
17:25				15:30	○医師講話 (福田聡司医師)		
18:00	隠岐汽船発 (路線バス) 一日の振り返り・翌日の確認						

【3日目】

月日	時間	内容	担当
9/4 (木)	8:00	宿泊施設の片付け	草苺・富谷
	9:38	浦郷発	
	9:52	西ノ島町役場着	
	10:00~11:30	○まとめのカンファレンス	草苺・富谷
	11:52	西ノ島町役場発	草苺・富谷
	12:01	隠岐汽船着	
13:50	別府港発 (西郷経由) 大学着・解散		

西ノ島町・島前病院のフィールドワークを通して学んだこと

<看護学科>

【隠岐島前の医療体制】

これからの地域医療の在り方を考えた時に、これからの医療資源は不足し続ける。よって医療資源が少ない中での療養方法や看護介入が大切になってくると考えられる。看護師の方々は何科にも囚われない看護師という形を目指しておられ、島前病院の看護師の方々は外科でも内科でも眼科でも全てこなせるようになってもらうと言っておられた。また、技師の方がすることや、医師の方がする事をできる範囲でやり、本当に何でも屋という形で仕事をしていると言っておられた。このことは、看護師になる上で必要な事だと思い、この体制はいつでも臨機応変に対応する力もついたり、新たな看護観を持つ上でとても重要な意味を持つと思う。また、島前病院の院長でおられる白石先生が発案した地域ブロック制と言われる仕組みはこのような島嶼地域のコミュニティを広げるだけでなく、医師の負担を少なくするとともに画期的なアイデアだと思った。これは医師の方の負担が減るだけでなく患者の選択肢の幅も広げられるという2つのメリットがあるという点もあることを理解した。

【多職種との連携】

一人の患者さんの病状、精神状態、家族関係などを考慮して患者さんの今後について真剣に話し合っておられ、職種による上下関係も垣間見ることなく進んでいた。多くの病院では医師や看護師など職種によって上下関係が根付いていることが多い印象であったが、島前病院では看護師さんが生活を見て感じた出来事を常に話に出し、それに作業療法士さんや栄養士さんなどが意見を出すことで、看護師だけで話が留まらないようにしていた。また、新たに出た意見に関してすぐに全てを肯定せず深堀していき、最終的に患者さんにあった方向性を決定していた。これは院長先生の定めた、患者さんのことを一番に考えた人がえらいという理念の成果である。

【小規模だからこそ提供できる看護】

小さな町だからこそ患者さんの生活の背景や性格、考え方などを理解することができ、その人のニーズ合わせた個別性の高い看護が提供できることを学んだ。また、大病院では許可できないような患者さんの食べたいものややりたいことを実現しやすく患者さんの思いを尊重した看護を行うことができる。



【今後の医療の在り方】

今後の地域医療は人と人だけでなく、その間に人工知能などの「文明の利器」を活用することで、今まで実現が困難だった離れた人の対応やより多くの職種との連携、情報の共有が容易になり、より多くの繋がりができるようになると思う。だからこそ、対象者の現状や思いを情報として落とし込み、自分の所属している環境下で行える最適解を対象者含め多くの職種の方と同じペースで進んで行くべきである。また、サービス

に関している間にも、対象者同士でさらにコミュニティを作り、その中でも情報交換ができるような環境を整備することが重要になると考える。また、医療資源が不足している中でも、今回の島前病院で学んだように看護師でも薬を準備したり、栄養士でも給食を作ったりそして0~100歳までの幅広い年齢層を対象とした医療を展開し続けることが大切になると思う。今回の実習は未来の地域医療を担う私たちにとってとても学びが深まる体験であった。

<健康栄養学科>

【人口減少による栄養士の業務の多様化】

西ノ島町は人口約2,470人、出生数8人、高齢化率48.5%と高齢化が進む地域であり、医療機関は隠岐島前病院と浦郷診療所の2か所、小・中学校はそれぞれ1校、スーパーは1件と非常に小さな町であることを知った。その中で、買い物が困難な住民のために「買い物支援バス」を運行するなど、住民同士が支え合いながら暮らしている、地域特有の工夫とつながりの強さを学んだ。この人口減少の影響から、専門分野である栄養知識や栄養に関わる疾患についての学習だけでなく、調理技術の習得や患者のアセスメント、その他の職種の人々との情報共有を効率的に行うコミュニケーション能力、歯科のような専門外の健康に関わる知識がこれから必要になると考えられる。

【地域住民との連携】

今回の施設見学から、西ノ島町の食料の納品手段は主に船であるため欠航が続くと食料不足の危険性があり、近所の方からのいただきものを当日の給食に取り入れる場面に出会った。そういった近隣の方達との親睦を深めることで地域での包括的な取り組みを行うことができるといった面で重要だと思われる。西ノ島の生活体験を通じ、限られた交通手段や高齢者向けのバス制度など、住民同士の助け合いが生活に根付いていることを実感した。都市部では希薄な「顔の見える関係」が当たり前存在し、医療や福祉の不足を補う大きな力となっていた。地域住民と専門職の自然な協力が、地域医療を支える重要な要素であることを学んだ。

【今後の医療の在り方】

西ノ島では小規模な地域だからこそ患者と医療者の距離が近い「顔の見える支援」が実現した、より生活に寄り添った支援が可能であると感じた。大規模な病院や多数の専門職が揃っているわけではないが、その分、職員同士が協力し合い、一人ひとりの状況に応じて柔軟に対応できる点は、この地域ならではの強みであると考えられる。今後の地域医療においても、病院の中だけにとどまらず、地域全体で支え合える仕組みを重視し、住民の生活に寄り添った医療と福祉を提供していくことが重要であると学んだ。

今回の学びを通して、西ノ島の地域医療は「限られた環境の中だからこそできること」が多くあることに気づいた。住民と専門職が一緒になって、食や医療を通して安心して暮らせる地域をつくっていくことが、今後の西ノ島の医療のあり方につながると考えられる。

最後に、西ノ島町役場の皆様、島前病院の皆様、貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

益田市・ 益田地域医療センター 医師会病院

<看護学科>

秋山 あい 岡垣 結愛 折重 歩果 景山 優
河原 李波 多久和 陽菜 堀本 日菜乃

<健康栄養学科>

上杉 有未 乗松 彩奈 日山 花音

<SA>

清水 陽向

<担当教員>

小田 美紀子 教授

島根県立大学 「島根の地域医療」フィールド学習 益田地域医療センター医師会病院プログラム

2025/9/4 (木) 学生：計10名 (看護学科7名・健康栄養学科3名) SA：1名

時刻	プログラム		
10:00 ~ 10:30	当院到着 バス駐車場所：くにさき苑ロータリー前		
10:30 ~ 10:50	オリエンテーション 1, 院長挨拶 2, 病院概要説明 (事務長)		
	Aグループ (3名)	Bグループ (4名)	Cグループ (3名+SA)
11:00 ~ 11:55	リハ科 病棟・訓練室での訓練見学	リハ科 病棟・訓練室での訓練見学	栄養科 (説明) 病棟での嗜好調査等
12:00 ~ 12:55	昼休憩 (患者食を用意)		
13:00 ~ 13:55	栄養科 (説明) 病棟での嗜好調査等	栄養科 (説明) 病棟での嗜好調査	包括ケア病棟 カンファレンス/ラウンドなど
14:00 ~ 14:55	回復リハ病棟 カンファレンス/ラウンドなど	介護医療院ふたば 口腔・リハ、介護技能実習	介護医療院ふたば 口腔・リハ、介護技能実習
14:55 ~ 15:10	会議室集合・休憩		
15:10 ~ 15:20	1, 先輩看護師キャリアアップ体験談		
15:20 ~ 16:30	2, グループワーク (研修で感じたこと・学んだことを共有しよう) *若手職員・認定看護師等と一緒に (包括・回リハ・栄養科・リハ科 各職員)		
16:30 ~ 17:00	各グループ発表 (各5分×3)、質疑応答・若手職員感想等 (各3分×3)、学生からの全体質問等 終わりの挨拶		
17:00 ~	終了 (翌日9月5日は益田市健康増進課担当)		
18:30	夕食・意見交換会		

9月5日 (金) 益田市予定

時間	内容	場所等
8:30~8:40	あいさつ・オリエンテーション、当日予定説明	保健センター (岩本)
8:40~9:40	健康づくりとまちづくりの講話 健康増進課 (清水) 30分 地域振興課 30分	保健センター大ホール 健康増進課 (清水) 30分 地域振興課 30分
9:40~	益田公民館へ移動	益田公民館 (藤原・岩本)
10:00~11:00	益田地区 いきいき百歳体操 ひまわり	
11:10~	保健センターへ移動	
11:30~12:00	保健事業、地域医療対策 概要説明	健康増進課 (吉田課長・澤江参事)
12:00~13:00	昼休憩	
13:00~15:30	学んでよし! 第2回健康教室 内容: 耳、口のお話 ~コミュニケーション、会話に大切な体のしくみ について説明します~ 講師: リハビリテーションカレッジ島根 言語聴覚士 栗林一樹氏	吉田地区健康を守る会 (川崎会長・正田館長他) 健康増進課 (小玉・藤原・岩本) 中部包括支援センター出席予定
15:30~16:00	※意見交換、フィールドワーク振り返り	(小玉栄養士・岩本)

●益田医療センター医師会病院での学び

・回復期リハビリテーション病棟・リハビリテーション科



回復期リハビリテーション病棟では、回復期の状態にある患者さんの在宅復帰に向けた取り組みを行っており、患者さんにとってストレスなく継続できるような支援を一人ひとりに寄り添って行っていた。リハビリテーション科では、移動手段に困らず、退院後の安全運転が出来るように自動車学校と連携してサポートしたり、実際の生活環境を再現したセットを使用して日常生活の動作のリハビリテーションを行っていた。これらの実践的なリハビリテーションに取り組むことが、退院後の日常生活を安心して過ごすために重要であると学んだ。

・栄養科

栄養科では、患者さんが楽しんで食事が出来るように行事食やお楽しみ食なども提供していた。また、嚥下調整食でも彩りを意識して提供していた。一人ひとりにあった食事を提供するために様々な献立や食事形態が用意されており、積極的に嗜好調査や声掛けが行われているのが印象的だった。医療における「食事」は、単に栄養補給の役割を果たすだけでなく、患者さんの回復意欲や生活の質の向上にも大きく関わっていると学んだ。



・包括ケア病棟

包括ケア病棟では、急性期医療を終了し、在宅医療や施設での生活に対して不安がある患者さんへの退院支援やリハビリを行っていた。入院日数は最大 60 日であり、60 日の間に退院できる人がほとんどである。退院したらそこで終わりではなく、自宅に帰っても患者さんが自立した生活を送ることができるような取り組みを行うことが、包括ケアにおいて必要であると学んだ。

・介護医療院ふたば

介護医療院では、ベトナムの方による介護機能実習を行っていた。外国の方を受け入れることで人手不足の解消や医療従事者側の指導力向上につながるということが分かり、病院自体が「教育の場」になっていると感じた。歯科衛生士による口腔ケアや言語聴覚士による飲み込みの観察・訓練では、口腔衛生が全身の健康に直結することを再認識した。口腔内、ひいては体全体の健康を守るため、予防的ケアが重要であると学んだ。また、必要に応じて多職種との連携をすることで、より効果的な介護を目指していた。

●益田市役所での学び

・益田市の健康づくり、地域づくり、地域医療について

益田市の特定健康診断では、HbA1c6.5以上と糖尿病の有病率が県平均よりも高くなっており、それらの対策として、様々な保健事業と「健康ますだ市 21」の取り組みがある。その特徴としては、20の地区ごとに健康づくりの会が設置されており、それぞれの地区計画が決められていることが挙げられる。益田市では、持続可能な地域づくりが求められており、地域自治組織の設立が奨励されている他、地域魅力化応援隊員や地域マネージャーが地域に出向き、ヒト・モノ・オカネの支援や組織の調整を担う活動が活発である。また、益田市の医療課題の1つである医療従事者の不足に対しては、初期研修医の受け入れや学校に出向いた医療教室を通して、益田市の医療への意識や関心を高めるための取り組みを行っていた。このような取り組みを行うことが、保健センターが「地域の保健室」となり、住民とともに地域づくりに取り組んでいくために必要であると学んだ。



・益田地区 いきいき百歳体操

ひまわりの会が行っている活動。今回は益田公民館で1時間程度行われた。まず、運動習慣を身につけ、生活習慣病や介護予防をすすめるための「益田版 益ます元気体操」を行い、その後おもりを使った筋力トレーニングである「いきいき百歳体操」を行った。また、パタカラ体操(誤嚥性肺炎を予防するための舌や口の筋力トレーニング)や早口言葉、川柳の読み上げ等は住民の方が自発的に行っており、このような活動に意欲的に取り組むことが、地域活動の活性化において重要であると学んだ。

・学んでよし！だ健康教室

今回は益田市立保健センターで、言語聴覚士の栗林氏による「『聞こえとお口について！』～ヒアリングフレイル・オーラルフレイル～」の講演を聴講した。保健師さんにどのように参加者を募っているのか話を聞いたところ、地域の役員の方が各地域の中で声掛けを行い、住民の方が自発的に参加しているとのことだった。このような地域活動に参加する住民の方が固定化されているという課題はあるものの、地域全体で声を掛け合う関係の地盤が整っており、地域と住民の距離が近いと感じた。

●今後の地域医療のあり方

益田市では、医療・行政のどちらの現場でも、支援後に住民が豊かで自立した生活を送れるようなサポートや取り組みが充実していた。しかしながら、地域活動等に参加する人は固定化されており、本当に必要な人にまで支援が行き届いていないことが課題として挙げられる。今後の地域医療では、住民自らが「健康観」を高めながら、生涯にわたり主体的に健康づくりに取り組めるまちを目指すための「顔の見える関係づくり」が、さらに重要になっていくと考える。

奥出雲町・ 町立奥出雲病院

<看護学科>

石井 芹奈 大垣 紅芽 小崎 和希 作野 莉心
永瀬 一稀 細谷 妃莉 渡邊 真悠

<健康栄養学科>

落部 りつか 境 愛花 高塚 千代美 錦織 胡海

<担当教員>

吉松 恵子 講師

奥出雲町フィールド学習内容

月日	時間	看護学科A	看護学科B	健康栄養学科
9/3 (水)	9:00	奥出雲町役場仁多庁舎到着 オリエンテーション		
	9:40	移動		
	10:00	セラバンド体操 (三沢公民館)	子育て支援センター 見学・交流 (横田支援センター)	ヘルスマイト研修会 調理実習 (八川コミュニティセンター)
	12:00	昼食 (八川コミュニティセンター)		
	13:30	移動		
	14:00	小馬木サロン見 学・体験 (ゆうげ 交流センター)	いきいき体操 (八代本町自治会)	ヘルスマイト研修会の ふりかえり (八川コミュニティセンター)
	15:00	移動		
	15:30	たたらと刀剣館見学・まとめ		
	17:00	終了		
月日	時間	看護学科A	看護学科B	健康栄養学科
9/4 (木)	9:00	訪問看護同行見学	オリエンテーション (健康センター)	
	9:30		地域連携業務見学	管理栄養士業務見学
	12:00	昼食 (健康センター)		
	13:00	認知症ケア (認定看護師による地域連携での活動)		
	13:30	地域包括ケア病棟 (多職種カンファレ ンス見学)	13:15 訪問看護同行見学	管理栄養士業務見学
	15:30	振り返り (健康センター)		
	16:30	終了		

奥出雲町でのフィールドワークを通じた地域医療についての学び

1. はじめに

奥出雲町は、人口が 10,928 人 (4642 世帯)、高齢化率は 46.5% (令和 7 年 3 月 31 日現在) で高齢者の多い地域である。奥出雲町、町立奥出雲病院で 2 日間のフィールドワークを通して学んだ内容と今後の地域医療のあり方について考察した。

2. 奥出雲町で学んだ地域づくり

今回の奥出雲町でのフィールドワークを通して、中山間地域に暮らす人々の健康観や保健師などの専門職の方の関わり方を学んだ。まず実感したのは、中山間地域に特有の人口減少と高齢化である。若者の流出により独居高齢者が増え、医療や介護へのアクセスが限られる中、限られた資源を工夫して支え合う地域の専門職の方や地域の方の姿に触れ、その難しさと重要性を実感した。地域では住民同士の支え合いが根付いており、診療所や訪問看護ステーションを中心に、医師・看護師・保健師・行政職員が連携して生活を包括的に支えていた。セラバンド体操に参加した際、高齢者の方が声を掛け合い楽しみながら運動を続けており、そこには身体機能維持だけでなく仲間とつながる安心感があった。また、いきいき体操では、地域の方が実際に行われている所を見学させていただいた。理学療法士の方が考えた体操をもとに、童謡を歌いながら行ったり、重りを手足首につけて行ったりしておられた。体操の最中は真剣に取り組んでおられる中で、休憩を入れてお話をされていたり、始まる前は世間話をされていたり、終始楽しそうだった。この雰囲気は、いきいき体操等地域の活動を行う際に必要なことだと感じた。地域ぐるみでみんなが助け合って取り組むことが大事である。いきいき体操のように住民の方が主体的に参加できるように支援することが地域づくりを行う上で必要であると学んだ。

また、子育て支援センターの見学・イベント参加を通して、乳児のお母さんのお話を聞き、奥出雲町は子育てをする親に対する支援が手厚く、安価で産後ケアなどのリラックスできる時間を設け日々の疲れを癒す機会を作っており子育てがしやすく、とても助かっていると話されていた。このようなイベントが頻繁にあると、子育てをする親の不安や疲れが少しでも軽減するのだと学んだ。そして、お母さんと保健師・助産師などの専門職との距離が近くなり、相談しやすい環境を作ることができると学んだ。

ヘルスマイト（食生活改善推進員）の方々と一緒に調理実習を行った。献立は減塩を目的に工夫され、塩を使わなくても美味しくできることに驚いた。和気あいあいとした雰囲気での調理でき、とても楽しい時間だった。また、奥出雲町の行政管理栄養士の方からお話から、専門的な業務に加え、事務作業も多いことを知った。地域住民の食習慣を詳しく把握し、ライフステージにあわせて支援を行い、地域住民の方の暮らしに寄り添った活動が行われていた。また、ヘルスマイトの方など地域の方と連携し、栄養・食生活に関する情報共有も積極的に行われていることを学んだ。一方で、個人情報保護のため病院の栄養士や高齢者施設の栄養士との連携は難しさがあることを学ぶこともできた。



3. 奥出雲病院での学び

医療機関では看護師や保健師は寄り添いながら指導や相談を行い、住民の方の自主性を尊重する姿が印象的だった。訪問看護師から「孤独感に寄り添うことも看護の一部」と伺い、看護が治療補助にとどまらず生活や心を支える役割を持つことを学んだ。さらに訪問看護やカンファレンスを見学する中で、多職種連携の重要性を強く実感した。情報を共有し合い患者を多角的に支える体制が必要であり、その中で看護師は患者さんや家族の方に最も近い存在として調整役を担うことが期待される。この実習を通して、医療は病院内だけで完結せず、地域の暮らしや文化を理解してこそ成り立つことを学んだ。「住み慣れた地域で暮らし続けたい」という住民の思いに触れ、患者を生活者としてとらえる視点の重要性を実感した。

訪問栄養指導に同行し、まず利用者さんと管理栄養士さんの信頼関係に驚いた。利用者さんは管理栄養士さんに自分の身体のことだけでなく、家族のことや世間話をとても楽しそうに喋っておられ、高齢者にとってはこの訪問栄養指導も認知症予防につながり、健康増進につながると感じた。管理栄養士の方は食事指導だけでなく、薬の服用や身体状況をチェックし、担当の医師に伝えると話されており、情報を共有することで多職種連携をされている場面を実感し、重要性を学ぶことができた。

さらに、厨房見学では、クックチルとスチームコンベクションオーブンを最大限活用するためレシピを調整していた。そうすることで、当日の従業員の負担の軽減、患者さんに合わせた食事を提供できるメリットや、2日前に調理するため、急な人数変更に対応できないデメリットなど、現場の声を聞く良い経験になった。患者さんに合わせた献立の変更や、調理する人を考え、技術を活用する応用力も管理栄養士として必要であると学んだ

4. これからの地域医療のありかたについて

今後は通院や入院が難しい高齢者の方が増加し、病院中心から在宅医療への移行が必要とされる。その際、看護師には医療処置だけでなく生活環境や家族背景を含めた包括的なケアが求められる。在宅で最期を迎えたいという思いに寄り添うことも看護の重要な役割である。また生活習慣病や認知症などに対しては予防や早期発見が欠かせず、健康教育や地域活動を通じて住民が主体的に健康を守るよう保健師をはじめとした地域の専門職が支援する必要がある。また、患者さんに合わせた献立の変更や、調理する人を考え、技術を活用する応用力も管理栄養士として必要であると考える。そして、予防活動や多職種連携、ICT 活用に積極的に関わり、地域住民の方が安心して暮らせる社会づくりに貢献できる専門職を目指したい。

最後に

今回のフィールド学習では人との繋がりが地域医療の土台になることを学ぶことが出来た。これらの学んだことを今後の学習と繋げ学修に生かしていきたい。

奥出雲町の皆様、町立奥出雲病院の皆様、奥出雲町の住民の皆様にご指導いただきありがとうございました。



【行政】

邑南町

<看護学科>

黒原 穂乃花 田口 結愛 西濱 光茄留 松本 奈々
村上 雪佳 栗原 舞織

<健康栄養学科>

石丸 心愛 沖田 侑来 長谷川 実乃 濱田 結梨

<担当教員>

祝原 あゆみ 講師

島根県立大学フィールド計画表

日にち	時間	内容	場所
9月9日	10:00	邑南町着	瑞穂支所
	10:05	あいさつ	元気館
	10:10	邑南町の概況・保健活動の紹介	
	10:45	移動	
	11:15	地域で活動する作業療法士に地域での健康づくりへの思い等をヒアリング	よほしば
	12:15	移動	
	12:45	昼食	瑞穂支所
	13:50	地域包括について	瑞穂支所
	14:40	保健師の話(母子保健)	瑞穂支所
	15:10	行政栄養士の話	瑞穂支所
	16:30 ～ 17:15	いわみ西保育所見学 ⇒保育園の見学 ⇒行政との連携、食支援など	いわみ西保育所
9月10日	8:40	保健師の話(成人保健)	瑞穂支所
	9:20	邑南町地域医療構想・取組について	瑞穂支所
	10:30	公立邑智病院にて実習	邑智病院
		①病院概要	
		②院内見学	
	12:20	③現役の看護師・栄養士との意見交換	
		昼食	瑞穂支所
	13:30 ～ 15:00	上田所運動教室 参加 ⇒地域の方の暮らし、思い等ヒアリングする	上田所交流センター
15:30 ～ 16:20	実習のまとめ 「地域住民を支えるための多職種の連携(仮)」をテーマにラベルワーク ①2日間で感じたこと・学んだこと ②専門職(看護師・管理栄養士)として多職種の連携での役割	元気館	

邑南町における地域医療学習を通じて

① 邑南町はどんなところか

邑南町は島根県の中山間地域に位置し、人口 9332 人、高齢化率 46%(令和 7 年 8 月時点)という全国的にも極めて高い高齢化率の地域である。人口は年々減少傾向にあり、地域医療の持続性が大きな課題となっている。

〔医療資源〕

町内には 7 つの民間診療が存在するが、医師の高齢化や後継者不足が深刻化している。邑智郡内で唯一の急性期・救急告示病院である公立邑智病院には高度医療は備わっておらず、患者を病院にスムーズにつなぐ体制を整えている。今後、診療所の維持が困難になれば救急対応や医療提供体制がひっ迫する可能性もある。



〔交通アクセス〕

町内には「おおなんバス」やタクシーなど公共交通機関が整備されている。バスを利用すれば病院や役場、道の駅などへのアクセスは可能だが、バス停が自宅から遠い場合も多く、タクシーも地区内限定のため利便性に限界がある。その結果、住民の移動手段の約 9 割は自家用車であり、高齢者の免許返納後の移動手段の確保が課題である。

〔邑南町の取り組み〕

こうした状況を踏まえ、邑南町では医療、介護のみならず、子どもから高齢者までライフステージに応じた切れ目のない支援を実施している。課題を多職種で共有し、連携を通じて地域全体を支える仕組みづくりが進められていた。

② 職種ごとの具体的な仕事内容と学び

〔病院〕

公立邑智病院には診療看護師が 2 名勤務し、プライマリーケアを専門としながら病院を支えている。看護師は特定の科に所属せず、日々異なる業務に対応し、人手不足の中でも工夫して役割を果たしていた。さらに、退院後も患者が地域で安心して暮らせるよう、多職種と連携して継続的に支援を行っており、病院内の治療と地域での生活をつなぐ重要な役割を担っていることを学んだ。

〔行政〕

行政は、地域課題を把握し、全ライフステージに切れ目なく働きかける仕組みの整備を行っていた。フレイル予防や健康教育、母子保健の両親学級や赤ちゃん訪問、成人期のがん検診や特定健診など幅広く活動していた。未受診者には個別に受診勧奨を行い、保健師は管理栄養士や歯科衛生士と協働した取り組みを展開していた。管理栄養士は栄養指導や「マタニティベジボックス」による妊婦支援を実



施し、妊婦の健康づくりを支えていた。また、子育て支援においては妊娠期から専門職との関係を築き、相談しやすい環境を整えていた。行政は住民の声を直接聞く姿勢を大切にしており、持続可能な地域づくりの基盤を形成していた。



〔地域〕

地域で活動する OT の方は、介護予防や健康づくりをレクリエーションや活動を通して行っていた。具体的には、「足の 8020」や、住民が集う「寄り合い処」などである。また、デマンド交通の導入によって高齢者の移動を支援し、住民同士の交流や生きがいがいづくりにつなげている姿が印象的だった。

〔保育所〕

保育所では管理栄養士が中心となり、クッキング教室や食育活動を行っていた。芋ほりや野菜の収穫を通して地域の人との交流も行われるとともに、共働き世帯が多い邑南町で子どもたちは「同じものを一緒に食べる楽しさ」を学んでいた。食べられなかったものが食べられるようになる喜びに重点を置き、無理に食べさせるのではなく、見守る姿勢を重視している点も印象的であった。

これらを通じて、同じ「医療」や「支援」といっても分野ごとにアプローチが異なり、専門職が連携して初めて地域全体を支えられることを学んだ。

③今後の地域医療の在り方

2日目のグループワークでは「専門職としての多職種連携での役割」を軸に意見交換を行った。既に行われている多職種連携の実践の様子から、各専門職がそれぞれの考えを持って連携するのではなく、共通の目標を持ったチームとして取り組むことが重要であることを確認した。また、住民自身が主体的に健康や生活を守る意識を持つことも欠かせないため、予防となる活動を行うことや健康教育に積極的に参加することで、住民が医療の受け手ではなく、地域をつくる主体となることが求められる。今後は、専門職と住民が互いに学びあい、支えあう仕組みをさらに強化する必要があると考える。そのためには若い世代も共に、地域全体で健康を守る文化を構築することが大切であると考えた。

④全体を通しての学び

邑南町での学習を通して、地域全体で地域医療の本質は「病気を治すこと」だけでなく「生活の背景を支えること」であると実感した。特に高齢化が進む地域では、医療・介護・教育などが連携し、住民の暮らしを包括的に支えることが求められる。

将来専門職として現場に立つ際には「患者＝生活者」という視点を常に忘れず、自分の専門性を地域の中でどのように活かし、多職種と連携して住民を支えるかを考え続けたい。邑南町で得た学びは、地域医療に向き合う自分自身を形づくる上で重要な経験となり、「医療は病気を治すだけでなく、住民の生活を守る営みである」という視点を深めることができた。



海士町

<看護学科>

板原 玲奈 上村 桜菜 戸田 菜々海 鳥谷 美裕
新田 もも 三上 陽芽 川本 真央

<健康栄養学科>

太田 咲葵 大野本 七星 平田 菜月

<担当教員>

澤 幸子 准教授

海士町 フィールド学習 スケジュール

【1日目】

月日	時間	内容	担当	
8月20日 (水)	7:00	大学出発		
	9:30	七類発		
	12:40	菱浦着(12名)		
	13:00	オリエンテーション I ・あいさつ等 ・町の概況と福祉について(淀課長)		池田
	14:30	海士町見学		高木
	~15:45	社協、ふくぎ、あまの里、さくら他 事業所健康相談 漁協3人 キンセン3人 役場4人		根岸・馬越 高木
	16:00			
17:30	宿泊施設 着			

【2日目】

月日	時間	内容	担当	
8月21日 (木)	8:40	宿泊施設		
	9:00	・保健事業について(根岸)		
	10:30	海士町探検 金光寺、明屋海岸、隠岐神社他		根岸 高木
	12:00	昼食		高木
	13:30	2班に分かれていく。		菱浦(池田・高木) 知々井(濱見・根岸)
	15:30	地域医療について 海士診療所(中川OT)		池田 濱見
	17:30	宿泊施設 着		

【3日目】

月日	時間	内容	担当
8月22日 (金)	8:40	宿泊施設	
	9:00	健康教室プチ体験:講話 献立のたてかた、カロリー計算	
	10:30	調理実習	
	12:00	試食・ 片付け・休憩・移動	
	13:00	まとめ(健康増進係全員)	
	15:15	菱浦発	
	17:55	七類着	
	19:30	大学着	

1.海士町について

海士町（あまちょう）は、島根県の北部、日本海に浮かぶ隠岐諸島のひとつ「中ノ島」に位置する、人口約2,200人の小さな離島である。周囲を豊かな海と山に囲まれ、四季折々の自然の恵みにあふれた地域である。島全体がユネスコ世界ジオパークに認定されており、地質的にも貴重な環境が保たれている。豊富な湧水に恵まれ、「天川の水」はその代表例として環境省の「名水百選」にも選ばれている。

また、歴史的にも重要な土地であり、鎌倉時代には後鳥羽上皇が配流された地として知られている。その影響で、今なお島内には独自の伝統文化や伝説が残されており、歴史と自然が融合した独特の地域文化が根付いている。地理的には本土からのアクセスが限られており、フェリーや航空機を使った移動が必要となるが、その分、外部から隔絶された静かな環境が保たれており、都市部では得られない心の安らぎを感じることができる。

2. 住民の暮らしと意識

海士町では、高齢化が進行しており、高齢化率は約40%と全国平均を上回っている。一人暮らしの高齢者も多く、地域の支え合いが日常的に重要となっている。一方で、町は活性化に向けたさまざまな取り組みを行っており、島外からの移住者や若者の流入も見られる。特に移住定住支援や教育施策の充実によって、人口減少に一定の歯止めがかけられているのは注目すべき点である。

住民の健康意識も非常に高く、特に健診の受診率は島根県内でもトップクラスの水準を維持している。「かたりば」と呼ばれる地域住民同士の語り合いの場では、健康に関する情報共有や悩み相談が日常的に行われ、地域ぐるみで健康を支える文化が育まれている。健康づくりが「特別な活動」ではなく、「日常生活の一部」として根付いている点は、他地域にも参考になる先進的な取り組みだと考えられる。

3. 制度・施設・地域の取り組み

海士町では、地元の資源を活かした産業が地域経済の中心となっている。農業や漁業が盛んで、特に「隠岐牛」や新鮮な海産物、島米などは町の特産品として高い評価を得ている。こうした地域資源を活かした商品開発や観光振興の取り組みも進められており、一次産業に新しい価値を加える動きが見られる。

また、教育分野では「島留学」や「高校魅力化プロジェクト」など独自の取り組みが行われており、全国から生徒を受け入れる体制が整っている。これは離島でありながら教育の選択肢を広げ、地域に若者が関わるきっかけを作ることにもつながっている。

医療面では、「海士診療所」を中心に、住民に密着した医療体制が整えられている。通所リハビリ、健診、在宅医療などが地域に根ざした形で提供されており、離島であっても安心して



かたりばの様子

暮らせる仕組みづくりが進められている。さらに、緊急時にはドクターヘリや連絡船を活用して島外の医療機関へ搬送できる体制も確保されており、地理的制約を工夫と連携で乗り越えようとする姿勢が感じられる。

4. これからの地域医療のあり方

海士町のような離島では、医療機関の数や入院設備に限りがあるため、本土と同じ医療体制を築くのは難しい現実がある。しかし、そうした制約の中でも、住民同士のつながりや支え合いを基盤に、健康を守る独自の仕組みが築かれている。このような「地域に根ざした医療と福祉の連携」は、これからの日本社会、特に過疎化・高齢化が進む地域にとって大きなヒントになると感じた。

今後は、さらなる高齢者人口の増加が見込まれる中で、在宅医療や地域包括ケアの充実が大きな課題となる。医療・介護・福祉の多職種連携を強化し、住民一人ひとりが住み慣れた地域で最期まで安心して暮らせる体制づくりが求められる。

「誰も取り残されない医療」の実現に向けて、海士町がこれまで培ってきた取り組みは、全国の離島や過疎地域にとって貴重なモデルとなる可能性を持っている。地理的なハンデを創意工夫と地域の力で乗り越える姿勢は、まさに地域包括ケアの理想を体現していると感じた。

5. まとめ

保健師の方のお話を伺い様々な保健事業に関わりながら大きな町とは比べものにならないほど住民の方と関わる機会が多く、介入できる分野が多いと感じた。そして、それが海士町で保健師として働く魅力だと考えた。また管理栄養士は島に1人しか在籍しておらず、海士町役場と海士診療所での業務を兼任しているため、1次予防から2次予防まで幅広い知識が求められると感じた。

今回のフィールド学習を通して、小さな離島だからこそ実現できる保健師や管理栄養士の仕事、住民との密接な関わり、他の医療職者や島留学生との交流などを肌で感じる事ができた。

最後に、フィールド学習プログラムの企画、運営を通して貴重な学習の機会を提供して下さった海士町役場の皆様に深く感謝申し上げます。



健康教室体験（調理実習）



集合写真（明屋海岸）

知夫村

<看護学科>

佐々木 美晴 能丸 紗羽

<健康栄養学科>

坂本 煌琉 妻木 春奈 長島 咲菜

<SA>

柳田 瑠南

<担当教員>

小川 智子 准教授

令和7年度 島根県立大学「島根の地域医療」フィールドワーク スケジュール

日程	時間・事業・内容	説明者・対応者	場所・備考
8月27日 (水)	AM 9:30 七類港発 11:30 来居港着 宿へ(荷物置く),昼食	福祉課職員	
	PM 13:30 役場集合 オリエンテーションと施設見学(調整中) ①自己紹介 ①知夫村の概要(交通事情、主な産業と景勝地、UIターンの特徴と人口の動向) ②知夫村役場(村民福祉課の担当業務)について紹介	福祉課職員 YL17ア テンド	役場2F機能訓練室
	PM 15:00~16:00 診療所診療体制と特徴。離島医療について。環境、課題、工夫。 ①概要(村営であること) ②診療業務体制 ③急患対応の特徴、搬送体制について	診療所 加藤輝士先生	役場2F機能訓練室または 知夫診療所
	PM 16:00~ 景勝地巡り・自由時間・宿へ	LY17アテンド	地区
8月28日 (木)	AM 9:00 役場集合 9:15~ 地域包括支援センターについて	包括 (山岡)	役場2F機能訓練室
	AM 10:30~ 知夫村の食環境・食育活動について 子育てサロン(午後)の準備(おやつ作り(買い物から)) 11:30~ 休憩	管理栄養士 (松本)	役場2F機能訓練室 持ち物:エプロン、三角巾、マスク
	PM 14:00~ 子育てサロン(ふれあい遊び・制作活動予定)	保健師 (相馬)	役場2F集団検診室
	PM 16:00~ ほうかご児童見学(小学校) 17:00 宿へ	福祉課職員 (松本)	知夫小中学校 学校始業式、放課後は 13:00~予定(?)途中参加
8月29日 (金)	AM 9:00 役場集合 9:15~離島で保健師として働く魅力 保健活動の特徴(事例を通して)	保健師 (相馬)	役場2F機能訓練室
	PM 10:30~ 施設見学他(調整中) 13:30~ まとめ 学生からの質問、一人ずつ意見・感想 自由行動 15:00 内航船いそがぜ乗船 西ノ島へ 15:45 別府港発 17:55 七類港着	LY17アテンド 保健師 管理栄養士	地区 役場2F機能訓練室

～知夫村のフィールド学習を通して～

【看護の視点での学び】

私たちは、①知夫村の特徴、②健康課題、③各機関の役割、④健康に携わる専門職とその在り方、の4つの観点から学びを整理する。

①知夫村の人々は、自然豊かな場所で生活するため安眠しやすく、精神的にも豊かな暮らしを送っていると感じた。地域の特性として、住民同士のつながりが強く、人と人が助け合い、寄り添い合って生活を送っている。おもてなし文化が残っており、直会などの行事を通じて交流が続いている。

②島ならではの健康課題も多く存在している。特に物流の脆弱さは、生活・健康に直接影響する。特に冬季は抜港が多く、子育てにおいては紙おむつが不足することや、食料品の価格が高く、品揃えも少ないことから、買いだめやインスタント食品の利用が多くなっている。伝統的な暮らしの中で、濃い味付けや甘いお菓子の摂取が多く、子どもの虫歯や成人の生活習慣病（高血圧・糖尿病）も課題である。一方で、Iターンの人が多いことは保護者の独特で多様な育児観を持つ人が多いということに加え、両親などの支援者が少ないことにも関連しており、保健指導が入りにくいことも課題である。

③村には、診療所を中心とした保健医療体制と、社会福祉協議会が運営する「招福苑」などの福祉機関が存在する。診療所では、長期的に健康で暮らしていけるための医療を提供している。また、招福苑では、要支援から要介護5まで幅広い高齢者が利用しており、多様な利用者がともに過ごしている。イベントでは、子どもと利用者が一緒に過ごす様子も見られ、世代間交流が生きがいとなっていると考える。教育面では、多様な背景の子供たちがともに学ぶ中で、価値観の多様性を受け入れる風土が育まれていると考える。

④保健医療の面では、看護師・保健師・栄養士が地域に密着しており、看護職が主体的に考え、行動を起こすことで、住民同士の会話の中から健康の変化に気づき、支援が始まることも多い。地域包括支援センターでは、「顔の見える関係づくり」を大切にし、知夫村での生活を活かした支援や工夫が進められている。子育てサロンでは、保健師による赤ちゃんの身長・体重測定や育児指導・相談などを栄養士も一緒に参加して実施している。保健師の視点から見つけられた健康課題を栄養士や看護師などと共有し、離乳食指導や生活習慣病対策へとつなげる。

【食生活に関する学び】

私たちは、島で生活する人々の食生活に関して、《1》子育てサロン・学校給食に関して（新生児期～児童期）、《2》はたらき世代に関して（青年期～中年期）、《3》招福苑に関して（高齢期）の三つに分けて学びをまとめる。

《1》子育てサロン・学校給食に関して（新生児期～児童期）

島内の店には新生児や乳幼児に対応する離乳食および育児用粉ミルクの取り扱いがないため、通信販売を用いるか本土へ渡った際に購入する必要がある。子育てサロンでは、手作り

離乳食に便利なツールや通信販売におけるおすすめのリトル離乳食の紹介を、管理栄養士・保健師が行っており、積極的に子育て世代の食育支援に携わる。

島の学校給食について印象的な特徴として、献立に一品の果物が付くことである。これは、調理員の確保や予算内に収めることが困難な中でも継続するという栄養教諭のこだわりが施されている。また、こども食堂「おちらと」では、一般的なこども食堂とは異なり、希望する児童が調理に参加することが可能である。これは、児童自身の自立を支援するためである。このように島内では食育が充実していることが分かった。

《2》はたらき世代に関して（青年期～中年期）

島の管理栄養士の話によると、最も食に関する支援を必要とする世代である。これは、生活習慣病およびその重症化のリスクが高いためである。島内のはたらき世代の人々は、本土と比較して野菜や果物の価格が高いことや日々の忙しさから、インスタント食品に依存してしまう傾向がある。しかし、健康診断の受診率が低く、それらの問題への早期発見・早期治療が難しい状況にある。診療所長もこの問題について深刻に捉えておられた。

《3》招福苑に関して（高齢期）

島内の高齢者が集う招福苑では「高齢者がどう余生を楽しむか」という考えを軸に様々な取り組みが行われている。食事もこの考えに沿って提供されており、その他多くの福祉施設と違って細かい栄養計算は必要とされていない。

【看護・栄養の両面から捉えた考察（今後の地域医療の在り方）】

私たちが考える今後の地域医療の在り方は、日常の中にある健康課題に早期に気づき、住民同士の支え合い、そして自然や文化を活かした“地域らしい暮らし方”の尊重するため、予防に介入した医療が必要であると考え。そのために、住民のつながりが強いことを活かして、信頼関係を築き、多職種連携で地域を支えていく必要がある。

栄養に関しては、特に、はたらく世代に対する予防に特化することが重要であると考え。この時期の予防が高齢期の暮らし方につながる。今すぐに出来そうな対応として、健康診断のさらなる呼びかけと、それに住民が応えられる環境の整備が必要だと考える。ただ、これらの問題の多くは、物資の不足に直結するため、すぐに解決するのは難しい。

以上のことから、小さな地域だからこそ、活動参加から生まれる住民の支え合いが力となり、高齢者や子供たちが安心して暮らせる仕組みが育まれているという地域の特性を生かすことができれば、島民全体の健康に対する関心を高める一歩につながるのではないかと考える。



【医療機関】

出雲市立総合医療センター

<看護学科>

木庭 さくら 小山 香織 高橋 唯 長谷川 友亮

<担当教員>

板持 智之 助教
吉松 恵子 講師

島根の地域医療 医療施設版（令和7年度）

〈出雲市立総合医療センター〉

日時			内 容		担当者
			大まかな内容 例) 地域連携部門での看護師追跡	具体的な内容 例) 退院調整カンファレンス等に出席など	
1日目 8/27 (水)	午前	全員	看護部長室前集合 病院・看護部について	オリエンテーション 当院の概要・役割・機能 病院見学	永瀬看護部長
			出雲市（平田地域）における地域 包括ケア	地域連携部門の役割と活動 平田地域における地域包括ケアシステムの特徴 具体的実践	澄川看護師長
	午後	A	地域包括ケア病棟での看護師の 追跡	病棟説明 退院前カンファ、介護調査などの見学	船越副看護部長 担当看護師
		B	回復期リハビリ病棟での看護師の 追跡	家族指導の実際	松浦看護師長 担当看護師
2日目 8/28 (木)	午前	A	地域連携部門での看護師追跡	退院調整のための多職種連携の実際 退院調整カンファレンスに参加	澄川看護師長・担当看護師
			訪問看護師の訪問に同行	訪問看護・家族支援の実際	三島看護師長・担当看護師
	午後	B	ロビーマン体験（9:30～10:30） 地域包括ケア病棟看護師追跡	病棟看護師の実際を知る	担当看護師
			地域連携部門での看護師追跡	退院調整のための多職種連携の実際 退院調整カンファレンスに参加	澄川看護師長・担当看護師
3日目 8/29 (金)	午前	B	訪問看護師の訪問に同行	訪問看護・家族支援の実際	三島看護師長・担当看護師
		A	ロビーマン体験（9:30～10:30） 回復期リハビリ病棟看護師追跡	病棟看護師の実際を知る	担当看護師
	午後	全員	まとめ・カンファレンス	担当者・担当看護師との意見交換 医療施設から見た地域医療の実際と課題 フィールドワークの振り返り	永瀬看護部長 船越副看護部長 松浦看護師長・澄川看護師長 三島看護師長

地域医療における看護師の役割と多職種連携

I. はじめに

看護学生による地域医療の現場でのフィールドワークを通じて得られた学びをまとめた。出雲市立総合医療センターは、出雲市灘分町に位置する地域の中核病院であり、急性期から回復期、慢性期まで切れ目のない医療を提供している。病床数は199床で、救急医療を24時間体制で担うとともに、回復期リハビリ病棟や地域包括ケア病棟などを備えている。また、訪問看護を通じて在宅医療や予防医療にも積極的に取り組み、地域包括ケアの推進に貢献している。フィールドワークを通じ、医療だけでなく多職種と連携しながら地域住民の生活を支える重要な役割を担っている病院である。今回は、地域包括ケア病棟、回復期リハビリ病棟、訪問看護、地域連携課などを見学させていただき、病院内外の多様な場面において、看護師が果たす役割や多職種連携の重要性について深く理解する機会となった。

II. 地域包括ケア病棟での学び

地域包括ケア病棟では、病気の治療だけでなく、患者の生活や人生に寄り添う看護の在り方を深く学ぶことができた。入院は人生の一時的な通過点であり、退院後の生活を見据えた支援が重要であると実感した。授業で学んだレスパイトケアやターミナルケア、在宅療養の知識が現場で繋がり、看護の本質を考えるきっかけとなった。看護師は患者の生活背景や価値観に寄り添い、医療と生活の橋渡しを担っていた。多職種連携の中で中心的な調整役を果たし、限られた入院期間で制度や地域資源を活用しながら「その人らしい生活」を支える支援が行われていた。退院後訪問では、生活環境や家族の負担に配慮した支援が印象的であり、看護師は医療提供者であると同時に、人生に寄り添う支援者であると認識が深まった。

III. 回復期リハビリ病棟での学び

回復期リハビリ病棟では、身体的・精神的な回復を支える看護の重要性を学んだ。退院調整カンファレンスでは、多職種が連携し、患者と家族の意思を尊重しながら退院後の生活を見据えた支援が行われていた。身体機能の回復だけでなく、心理的な不安や生活面の課題にも丁寧に対応し、ADL練習や外出支援を通じて生活の再構築を支援していた。長期入院となる患者には、精神的なダメージに寄り添いながら自信を取り戻す支援が重要であり、看護師は表情や言葉に敏感に反応し、細やかなケアを行っていた。

IV. 地域連携課での学び

地域連携課では、病院と地域、医療と福祉をつなぐ役割を担っていることを学んだ。介護施設との連絡、福祉用具業者との調整、主治医との情報共有など、看護師を中心に多職種と連携しながら、患者が安心して地域で暮らせるよう支援していた。ベッドコントロールや病

棟間の調整では、看護師の調整力と判断力が求められる場面が多く、患者の安全な移動や療養環境の確保に直結していた。ACP（Advance Care Planning）の取り組みでは、患者の意思を尊重する看護の在り方について深く考える機会となった。意思表示が難しい患者には家族の意向を尊重しながら調整が進められており、看護師は倫理的な視点を持って支援していた。

V. 訪問看護での学び

訪問看護では、病院とは異なる「生活に寄り添う看護」の重要性を実感した。住み慣れた環境で安心して暮らせるよう支援するため、看護師には医療的視点だけでなく、生活全体を見渡す力が求められる。訪問時、患者や家族が安心した表情で迎えていた姿が印象的だった。バイタル測定や服薬管理に加え、患者の小さな変化に耳を傾ける姿勢から信頼関係が築かれていることが伝わった。看護師は、患者の話に丁寧に耳を傾け、必要な問いかけをしながらも、終始和やかな雰囲気を保っていた。このような関わりは、患者が安心して自分の状態を話せる環境づくりに繋がっており、訪問看護ならではの距離の近さを感じた。ご家族にも声掛けやケア方法の説明を通じて不安や負担に寄り添っていた。生活を支えるには、家族や地域支援者との連携が不可欠であり、入院中から退院後まで切れ目のない支援の重要性を強く感じた。

VI. おわりに

今回のフィールドワークを通じて、看護師には疾患だけではなく医療を取り巻く制度も理解する必要があり、「病気を治す」だけでなく「その人らしい生き方を支える」使命を持っていることを学んだ。少子高齢化に伴い、医療ニーズの高まりや在宅希望者の増加が予想される中、限られた資源で医療の質を維持・向上させる必要がある。地域包括ケアや多職種連携の現場を実際に見たことで、在宅医療の重要性が今後さらに高まることを実感した。制度や環境の制約により在宅療養が叶わないケースもあり、医療者だけでは解決できない複雑さが存在する。年金制度や医療・介護制度など、社会全体の仕組みと連動した支援が求められる中で、看護師には制度を理解し、患者の希望に寄り添いながら現実的な支援を考える力が必要である。

出雲市立総合医療センター看護部長の永瀬様をはじめ、ご協力いただきました多くの皆様に、今回の貴重な学びの機会を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。



社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院

<看護学科>

宇山 陽菜 河野 仁美 近藤 蒼 波多 舞桜

【担当教員】

板持 智之 助教
吉松 恵子 講師

島根の地域医療 医療施設版 プログラム(令和7年度)

< 済生会江津総合病院 >

日時		内 容		担当者	
1日目 8/19 (火)	10:00~11:00	4名(全員)	オリエンテーション	地域課題と病院の役割と取り組みの概要	大崎
	11:00~12:00	4名(全員)	地域の感染対策における当院の役割と活動の実際 ~感染管理専従 看護師の立場で~	高齢者福祉施設の連絡会を立ち上げて	恒松 愛
	12:00~13:00	4名(全員)	休憩	6階多目的ホール	
	13:00~16:00	2名(Aチーム)	4東病棟:療養病棟の役割・看護について、感染管理認定、皮膚排泄ケア認定看護師の取り組み 看護補助者と看護師による定期カンファレンス	療養病棟の意思決定について、注入、ポジショニング、 感染管理、カンファレンス	藤田師長他
	13:00~16:00	2名(Bチーム)	3西病棟:急性期一般病棟の役割・看護について	カンファレンス関係への参加、総診勉強会、心不全指導前カンファレンス、受け持ち患者カンファレンス等	前田師長他
2日目 8/20 (水)	8:30~10:00	4名(2チームに分けて説明)	診療看護師の役割と実際(見学)	医師とのカンファレンス、救急外来のファーストタッチ等の実際を見学、説明	池内科長
	10:00~12:00	4名(全員)	外来:外来での在宅療養支援について	心不全、病期進展予防バスなどでの療養支援 心リハ見学、救急外来での看護	本藤師長他
	12:00~13:00	4名(全員)	休憩	6階多目的ホール	
	13:00~16:00	2名(Aチーム)	3東病棟:地域包括ケアシステムにおける地域包括ケア病棟の役割と看護	地域包括ケア病棟の役割オリエンテーション、心不全デイケア見学、心不全地域連携バス、大腿骨・脊椎地域連携バス、二次性骨折予防、多職種連携カンファレンス	高住師長他
	13:00~16:00	2名(Bチーム)	介護医療院の役割、機能について説明と一部見学	介護医療院とは、口腔ケア(歯科医による研修と実践)	津枝師長他
3日目 8/21 (木)	8:30~11:00	4名(全員)	入退院支援・地域連携センターの役割と入退院支援課・地域連携課の事業の理解	役割と事業内容の説明・病棟カンファレンス参加	大濱(斎藤・小原)・藤江
	11:00~12:00	4名(全員)	訪問看護ステーションの役割・機能と実際について説明	体制、役割、機能、事例紹介等	田中所長
	12:00~13:00	4名(全員)	休憩	6階多目的ホール	6階多目的ホール
	13:00~13:30	4名(全員)	自己学習	振り返りに向けたまとめ	6階多目的ホール
	13:30~15:00	4名(全員)	地域ケア会議事例①②	事例を通して地域の課題を知る	案内~大濱次長
	15:00~15:30	4名(全員)	在宅医療・介護連携推進事業の理解	在介事業の取り組みとこれまでの実績	小原
	15:30~16:00	4名(全員)	振り返り	実習全体を通して学びの共有	前田師長 津枝師長

済生会江津総合病院でのフィールド学習を通じた考えた地域医療の在り方

済生会江津総合病院は江津市の地域に根ざした中核の病院として医療を提供している。内科、外科をはじめとした幅広い診療科を備えており、救急医療から慢性期医療、終末期医療まで対応している。また、高齢化が進む地域のニーズに答えるためにリハビリテーションや在宅医療にも力を入れている。地域の医療機関や介護施設と連携し、患者さんを最後までサポートし続ける体制が整えられている。それだけでなく医師、看護師だけでなく専門分野に特化した職種の人たちが連携し効率の良い医療を届けている。

1) 多職種や複数の組織の連携からもたらされる医療について

江津市は高齢化率が高く、住民の人たちが安心して質の高い医療を受け続けるためには多角的な連携が不可欠であると痛感した。済生会江津総合病院を主として、他の医療機関、高砂ケアセンター、特別養護老人ホーム白寿園、病院併設の介護医療院といった複数の組織が密接に手を取り合っている現状は、まさに連携による「つなげる」医療の象徴であると考えられる。特に印象的だったのは、病院内外での多職種連携の様子である。カンファレンスでは、医師、看護師、社会福祉士、栄養士、リハビリテーションスタッフなど、様々な専門職が患者さんの病状や現在の様子だけでなく、家族構成や家族支援、職業、キーパーソンの有無、家の構造まで共有し、入院中から退院後までの支援について検討し、生活全体を見据えた患者さんにとって最適な支援について考えていた。決して退院したからそこで関係が終わるわけではなく、そこからまた別の支援を続けていくことが今の看護であることを学べた。それぞれの職種が持つ専門知識や強みを活かし、互いに補い合うことで、質の高い医療が可能となっている。例えば、医療知識に強い職種もいれば、制度に関する知識に強い職種もいる。一人で全てをカバーすることは困難だが、それぞれの専門職が情報を持ち寄りより、深く専門的な視点で見ることができる。また看護師は患者さんの些細な変化に気づき、それぞれ多職種に共有することでチーム全体をまとめていた。他にも入退院支援では看護師と社会福祉士が協力することで患者さんの医療に関する情報と生活に関する情報を把握し、切れ目のない支援を実現していた。得意分野に特化することで無駄が省け効率が向上し、さらに良い医療を提供できる。一つの施設が全てを担おうとすれば資金や人員の面で大きな負担が起こってしまうが、それぞれの施設の強みを活かし、できる部分は引き受け、できない部分はバトンタッチできる環境があれば、個々の施設の負担は軽減され、地域全体として質の高い医療を提供し続けることが可能となる。

2) 患者さんの意思を尊重し、家族とつなぐ看護の役割について

医療従事者として働く上で、人の死に直面することは避けられない。その中で、患者さんの意思を尊重することが何よりも大切であると学んだ。家族の想いや患者さんの想いだけでなく、看護師自身の「何かしてあげたい」という想いも存在するが、家族の価値観はさまざまであり、患者さんと家族の想いが異なる場合もある。そのような状況で、看護師

は患者さんと家族の間の橋渡し役となることが求められる。特に認知症のように患者さんがうまく意思を伝えられない場合、家族の感情や意見を聞くことが多いが、家族内でも価値観が異なるため、患者さんの意思を尊重するには、できる限り患者さん自身の声や表情に耳を傾ける姿勢が欠かせない。しかし、患者さんの要望を叶えることは重要だが、同時に誤嚥のリスクを伴う食事の提供など、リスクを考慮する必要がある場面も存在する。看護師として、患者さんと家族が共に納得できる着地点を見つけるために動くことが大切である。そして、これらの要望や希望を聞き出すためには、まず患者さんとの信頼関係が不可欠である。患者さんの些細な表情や行動から、伝えたいことや行動の理由を読み取る観察力が、信頼関係構築の第一歩となる。

3) 患者さんの人生を尊重した自立支援の重要性について

患者さんの人生は、入院・通院している「現在」だけでなく、これまで生きてきた「過去」があり、そしてこれから続く「将来」がある。入院中に全てを補助してしまうと、退院時に筋力低下など以前できていたことができなくなる可能性もある。特に高齢者においては、低下した能力を元の状態に戻すことは容易ではない。だからこそ、患者さんが住み慣れた地域でできる限り自立した生活を送れるように、患者さんの思い、家族の思い、医療側の思いを共有し、どこで折り合いをつけ、どうすれば納得した説明ができるかを検討することが重要であり最も難しいことであると感じた。現在の事だけでなく退院後の生活を見据え患者の生活の質をどのように高めていくかを大切にしていく。

4) これからの地域医療について

地域医療を未来へつなげるためには持続可能な医療を提供し続けることである。少子高齢化や医療従事者の減少、病院の財政難、地域医療が直面する課題はたくさん存在した。そのような中患者のための寄り添った医療を持続的に提供できるように選択している病院が「地域にあり続けること」の重要性を痛感した。地域住民が安心して人生の最期まで住み慣れた場所で暮らせるよう、病院だけでなく地域全体での協力が求められる。

5) 最後に

江津市の医療について学び、実際に見て感じることで、済生会江津総合病院が地域の人々を第一に考え最後までサポートをし続ける医療を提供していることが分かりとても貴重な機会となりました。今回の学びを今後の実習や将来に活かしていきたいと思えます。

フィールドワーク
にご協力いただいた
済生会江津総合
病院の皆様へ感謝
申し上げます。



独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター

<看護学科>

池野 奈々

江木 杏紫

小竹原 千愛

長見 優花

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

島根の地域医療 医療施設版 プログラム（令和7年度）
 < 浜田医療センター >

日時		内 容		担当者	
1日目 8/19 (火)	午前	10:00~11:00 全員	病院概要オリエンテーション 感染管理オリエンテーション	病院概要：浜田圏域の状況 病院の役割・機能について 感染防止対策・注意点について	副看護部長 感染管理認定看護師
		11:00~12:00 全員	地域医療連携室オリエンテーション	地域医療連携室の役割と活動	地域医療連携室係長
	午後	13:00~14:00 全員	院内案内	外采・健診センター、救急外采、救命センター ヘリポート～病棟、各部門（リハビリ部門他）	副看護部長
		14:00~15:00 全員	MSWによる説明	退院支援に活用できる社会資源について （介護保険他、実際の事例を通して説明）	MSW
		15:00~15:30 全員	診療看護師より説明	診療看護師の役割及び地域医療の中の 診療看護師の役割	診療看護師
		15:30~16:00 全員	認定看護師・特定行為看護師	特定行為看護師の役割について	認定看護師・特定看護師
2日目 8/20 (水)	午前	9:00~12:00 2グループに分かれて	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス 11:00～地域包括ケア病棟 退院支援カンファレンス見学	地域医療連携室看護師
	午後	13:00~16:00 2グループに分かれて	地域医療連携室看護師追跡	病棟訪問・カンファレンス 14:00～緩和ケアリハビリカンファレンス 14:15～緩和ケア退院支援カンファレンス 15:00～呼吸器内科リハビリカンファレンス 15:15～呼吸器外科リハビリカンファレンス	地域医療連携室看護師
3日目 8/21 (木)	午前	9:00~9:30 全員	がん相談支援室について 入退院サポートについて	がん支援看護師の役割と業務について 入退院支援看護師の役割と業務について	がん相談看護師 入退院サポート看護師
		9:30~12:00 2グループに分かれて	地域医療連携室 看護師追跡 入退院サポート看護師の追跡	病棟訪問・カンファレンス 入退院サポートの介入見学 2名ずつ	地域医療連携室看護師 入退院サポート看護師
	午後	13:00~14:00 全員	まとめ	「病院からみた地域医療の現状」 担当者・担当看護師との意見交換 フィールドワーク振り返り	副看護部長 地域医療連携係長 地域医療連携室看護師

フィールド学習を通じた学びと今後の地域医療のあり方について

1. 浜田医療センターの紹介

浜田医療センターは、島根県浜田市に位置する独立行政法人国立病院機構が運営する中核的な医療機関です。地域の基幹病院として、島根県西部及び隣接する山口県・広島県の一部地域に対して高度かつ総合的な医療サービスを提供されています。特に、救急医療やがん診療、循環器疾患、脳神経疾患などの専門分野に強みを持ち、地域住民の命と健康を守る重要な役割を果たされています。また、急性期医療に加え、慢性期医療や回復期リハビリテーションなど、切れ目のない医療体制が整備されており、患者一人一人の病状に応じた柔軟な対応が可能です。また、教育・研修期間としての役割も担っておられ、地域医療の未来を支える人材育成を担う場としても高く評価されています。

2. フィールド学習で学んだこと

今回のフィールド学習を通して、地域医療における退院支援や多職種連携、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の重要性について学ぶことができました。

退院支援の場面では、患者さんやご家族の方の意思を尊重しながら、入院前の生活背景を踏まえて退院後の暮らしを見据えた支援が行われている姿が印象に残りました。実際に、MSWの方にカンファレンスや患者さんとの話し合いなど、同行させていただきました。その際、患者さんひとりひとりの状況や退院後の希望などを理解・把握されており、様々な職種と協働して退院にむけての調整を行っておられました。退院後に入りたい施設が定員オーバーであったり、家から近い施設がなかったりなど、十人十色な課題を抱えている患者さんひとりひとりの声を聞きながら調整されていた姿がとても印象的でした。病棟で行われていた実態調査では、患者さんの退院後の生活を見据え、必要な支援を明らかにするための取り組みであると理解することができました。患者さんの全体像を把握するためには、現在から今後の生活に重点を置くのではなく、過去の生活史から未来までの幅広い視点で患者さんの情報を収集することが求められるのだと思いました。

また、カンファレンスにおいては、多職種がそれぞれの専門性を活かしながら情報を共有し、患者にとって最善の支援を考える姿勢が求められていることを実感しました。沢山の患者さんについて話し合っておられ、退院が近い患者さんや状況が変動した患者さんなどについて特に話し合っている様子でした。複数のカンファレンスを見学させていただきましたが、医師や病棟看護師、理学療法士など様々な職種がそれぞれの視点から患者さんの身体状況や希望を伝えるだけでなく、意見を出し合い、患者さんとご家族を支援しておられるのだと学ぶことができました。また、現場の方々が互いに声を掛け合い、円滑な連携を図っている姿から、単に役割を分担するのではなく、互いを補完しあう「チーム」としての関係性が地域医療を支えていることを学びました。このような関係性は日ごろの信頼関係やコミュニケーションの積み重ねによって成り立っていることを実感しました。特に退院支援カンファレンスでは、転院先の受け入れが減少していることや、行政が推奨している「圏域内での治療」と現実との乖離という問題についてことが印象的でした。地域資源の不足は行政の方針だけでは対応できない現実があることを知ることができました。その現実の中でも、地域連携室の方々は患者さんの望みを丁寧に引き出し、限られた資源を最大限活用しながら支援することをモットーとされており、私たちも患者さんとこんな風に向き合いたいと強く感じました。

地域連携室の看護師の方々は、患者さんやご家族の方の代弁者として退院後の生活に寄り添い、支援されているチームのメンバーとして、チームと患者様やご家族の方の生活背景をつなぐ「橋

渡し役」として重要な役割を担っていることを学びました。さらに、患者さんやご家族の方が希望する生活につなげるために、ACPは退院時や入退院のタイミングにとどまらず、より早期から意思決定を話し合っていくことの必要性を感じました。また、診療看護師や特定行為看護師、MSW（医療ソーシャルワーカー）などの専門職が、医師不足や社会資源不足といった地域の現状を補いながら、地域医療を支えていることも理解できました。診療看護師や特定行為看護師は、実施できるが増えることで医師の負担軽減や、緊急時の早急な対応に貢献していることが分かりました。その姿から、限られた資源の中でも患者さんの思いに丁寧寄り添いながら支援を展開する看護師の専門性と姿勢を学ぶことができました。

3. これからの地域医療について

今後の地域医療においては、まず退院支援の充実が求められます。退院後の暮らしを支えるには、医療や介護の制度面だけではなく、地域住民の支えあいやボランティア活動など、資源の活用も必要であると感じました。特に浜田市は高齢化率が高いため、患者さんや家族だけで抱え込むのではなく、地域全体で支える体制が不可欠だと思いました。また、入院前後の生活の差を埋め、患者さんが自宅や地域で自分らしい生活を続けられるよう、多職種が協働して支援体制を強化することが必要であると学びました。そして、ACPの普及は不可欠であり、行政や地域包括支援センター、介護施設などが連携し、住民が理解しやすい形で周知を図ることが重要となります。地域に根付かせることで患者が自分らしい生き方を選べる環境が整い、希望に沿った看護や生活ができると思います。さらに、浜田市が抱える医師不足や社会資源の限界に対応するためには、診療看護師や特定行為看護師といった専門職の育成と活用が欠かせないと考えます。2040年問題を見据え、今後ますます人材や資源の不足が懸念されるため、地域包括ケアを推進し、医療と介護を切れ目なくつなげる体制づくりが重要になると考えます。地域医療は単に医療を提供するだけでなく、住民が住み慣れた地域で安心して暮らせるように支えるものであり、その実現には看護師をはじめとした多職種の協働が不可欠です。私達も島根の地で地域医療を支える一員になれるように、勉学に励みたいと思います。

4. まとめ

今回のフィールド学習を通して、地域医療における退院支援や多職種連携、ACPの必要性について理解を深めることができました。看護師は、医療的な情報を伝えるだけでなく、患者や家族の思いを代弁し、限られた社会資源を最大限に活用して支援する「橋渡し役」として重要な存在であることを学びました。また、現場で働く方々の真摯な姿勢や患者さんやご家族との丁寧なかかわりを目にし、看護師としての専門的な知識や技術のみならず、信頼関係を築くための誠実さや柔軟さも大切であることを実感しました。今後は、今回の学びを自身の学修に活かし、地域医療を担う一員としての意識を高めていきたいと考えます。

最後に

今回のフィールド学習を通して得られた経験や学びを、今後の学修に活かしていきたいです。最後になりましたが、貴重な学びの機会をいただいた浜田医療センターの皆様にご心より感謝申し上げます。ご指導いただき、ありがとうございました。



公立邑智病院

<看護学科>

佐々木 美遥 椿 朝妃 樋野 朱里 和久利 桃花

【担当教員】

吉松 恵子 講師

板持 智之 助教

島根の地域医療 医療施設版 プログラム

<公立邑智病院>

日時		内 容			
1日目 9/8 (月)	午前	全員	10:30-11:15	オリエンテーション	あいさつ(院長、副院長、事務部長、看護部長、大田師長)、自己紹介等
			11:15-12:00	看護部長講義	病院概要、看護部紹介
			12:00-13:00	休憩	
	午後	全員	13:00-13:30	院長講義	小児、地域医療について
			13:30-14:30	院内案内	病院内の見学
			14:40-15:10	地域連携室	地域連携室の業務、役割について
			15:10-16:00	病院紹介	動画、SNSなど
2日目 9/9 (火)	午前	A	8:30-11:00	急性期病棟	朝のミーティング見学、初期評価見学、ガーゼ交換、ラウンド随行等
			11:00-12:00	透析科	透析業務見学
		B	8:30-11:00	地域包括ケア病棟	朝のミーティング見学、初期評価見学、退院支援業務見学、ラウンド随行等
			11:00-12:00	外来	看護師の初診患者対応、継続看護見学、ご家族を含めた入院対応の見学
		全員	12:00-13:00	休憩	
		午後	全員	13:00-14:00	薬剤部
	14:00-14:30			画像診断科	画像検査、超音波検査見学
	14:30-15:00			検査科	検査室見学
	15:00-16:00			栄養管理科/調理	管理栄養士のお話、調理室見学
	3日目 9/10 (水)	午前	A	8:30-11:00	地域包括ケア病棟
11:00-12:00				外来	看護師の初診患者対応、継続看護見学、ご家族を含めた入院対応の見学
B			8:30-11:00	急性期病棟	朝のミーティング見学、初期評価見学、ガーゼ交換、ラウンド随行等
			11:00-12:00	透析科	透析業務見学
全員			12:00-13:00	休憩	
午後			全員	13:00-13:30	リハビリテーション科
		13:30-14:30		まとめ	実習振り返り、意見交換

2チーム(A、B)に分かれて実習をしていただく場合があります。
救急対応などでスケジュールが変更になる場合もあります。

「邑智病院フィールド学習を通して学んだ地域医療の実際」

1. はじめに

今回、邑智病院でのフィールドワークを通して、私たちは地域医療の実際を体験し、看護師としての役割や多職種連携の重要性について深く学ぶことができた。授業や教科書で「地域医療」という言葉を耳にすることはあったが、実際に病院を訪れ、働く職員や患者さんに触れることで、初めて具体的な姿を実感することができた。邑智病院は中山間地域に位置し、急性期から慢性期、リハビリ、さらには在宅医療まで幅広く担っている地域の中核的医療機関である。

2. フィールド学習の学び

私たちは、①高齢化が進む地域における医療と介護の連携体制、②地域医療を支える医療従事者のやりがいや課題、③ICT やロボットなど新たな取り組み、④患者さんや地域住民の方との信頼関係、という4つの視点を軸に学びを整理した。

① 高齢化が進む地域における医療と介護の連携体制

邑智病院には地域連携室が設置されており、作業療法士やケアマネジャー、社会福祉士など多職種が関わり、患者さんと家族の方が退院後も安心して暮らせるよう支援されていた。退院支援カンファレンスやサービス調整会議を通じて情報を共有し、居宅介護支援事業所や老人福祉施設とも連携するなど、「切れ目のない支援」が地域全体で実現されていた。特に高齢者が多い地域では、入退院のたびに家族の負担が増すが、このような仕組みによって生活の質が守られていると実感した。また、「まめネット」を活用したカルテ連携により、診療所と病院間で情報が共有され、検査の重複を防ぐなど効率的な支援が可能になっていた。こうした仕組みは、医療と生活が切り離せない中山間地域において不可欠であると理解した。

② 地域医療を支える医療従事者のやりがいや課題

「助けやいこ、教えやいこ」という地域の言葉をモットーに掲げ、部署を越えて助け合う文化が育まれていた。このような雰囲気は、都市部の病院では得がたいものであり、職員のモチベーションややりがいにつながっていると感じた。特に診療看護師（NP）の存在は大きいと感じた。邑智病院には2名のNPが在籍し、医師の業務を一部代行しつつ、看護師への指導や症状評価の支援を行っておられた。人材確保が難しい中で、NPが専門的知識を生かして医師や看護師を支えている姿から、チームで補い合う医療の可能性を学んだ。看護師一人が孤立せず、常に相談し合える体制が整っていることは、働く上での安心感や患者ケアの質につながっていると理解した。

③ ICT やロボットなど新たな取り組み

邑智病院は人手不足という課題を抱えられていたが、その中でも工夫が多くみられた。搬送ロボット「ホスピー」や電子カルテ、嚥下食作成機器などICTを積極的に導入し、業務効率を高めておられた。また、院内には仮眠室や休憩室が整備され、スタッフの働きやすさが配慮されていた点も印象的であった。さらに、病院の環境づくりにも工夫がされていた。新館の扉は科ごとに色分けされ、小児科にはキャラクターの壁紙を用いるなど、患者さんに安心感を与えるデザインが施されていた。歯科には歯のイラストを描くなど、誰が見ても分かりやすい工夫がされており、

患者目線を重視した設計であると感じた。

④ 患者さんや地域住民の方との信頼関係

外来では看護師が方言を交えて声をかけ、近所の人のように接することで患者さんに安心感を与えていた。入院患者さんとの会話では「家に帰ること」が最大の目標になっている場面も多く見られ、医療は単に病気を治すものではなく、その人らしい生活を支えるものであると実感した。さらに、ある患者さんに看護師の方が「自分が変われば相手も変わるかもしれない」と前向きな言葉をかけておられる場面があり、病気だけでなく気持ちを支えることも看護の大切な役割であると学んだ。

病棟での初期評価では、看護師だけでなく薬剤師や理学療法士、地域連携室のスタッフが参加し、多職種で退院後の生活までを見据えた支援方針を話し合っていた。患者情報は朝のミーティングで全員が共有し、誰もがすぐ対応できる体制が取られていた。記録も誰が見てもわかりやすく記載されており、私たちが今後実習で記録を書く際には参考にしたいと感じた。

今回の学習を通じて、私たちは地域医療の本質は「多職種連携」と「顔の見える関係性」であると理解した。邑智病院では、人手不足という現実に向きながらも、ICTやロボットの導入、多職種の協力、助け合いの文化によってその課題を補っていた。特に、中山間地域においては病院が単なる治療の場にとどまらず、地域住民に安心を与える「最後の砦」としての役割を果たされていた。

3. これからの地域医療のありかたについて

今後、地域医療のあり方として、私たちは三つの方向性を考えた。第一に、病院だけに頼るのではなく、地域全体で医療を支える仕組みづくりである。診療所、介護、福祉、住民の方が協力し合うことが求められる。第二に、ICTの活用である。遠隔診療やオンラインでの情報共有は有効だが、高齢者世帯への導入には課題も多く、サポート体制が不可欠である。第三に、予防医療や健康づくりの活動である。病気になってから支えるのではなく、「病気になる前に支える」姿勢を広げることで、地域全体の健康が守られると考える。

今回のフィールドワークで、私たちは地域医療が単なる医療サービスの提供にとどまらず、住民の方の暮らしそのものを支える基盤であることを実感した。今後、異なる地域の病院で実習を重ねる中で、比較しながらそれぞれの良さや課題を見つけ、そこで自分たちに何ができるかを考えていきたい。そして、看護師として働く際には、病気や症状だけを見るのではなく、患者さんの生活背景や地域全体を考え、他職種や住民の方と協力しながら「その人らしい生活」を支えられる存在を目指したい。地域に根ざした信頼関係を大切に、「ここなら安心して暮らせる」と思える医療づくりに貢献していきたいと考える。公立邑智病院の皆様、ご指導いただきありがとうございました。



資料

フィールド関係機関・関係者一覧（敬称略）

1) 行政と医療機関

<雲南市・雲南市立病院>

雲南市役所

住 所：〒699-1392 雲南市木次町里方521-1

T E L：0854-40-1045 F A X：0854-40-1049

担当者：（健康福祉部健康推進課）主幹保健師 徳島 仁美

雲南市立病院

住 所：〒699-1221雲南市大東町飯田96-1

T E L：0854-47-7510 F A X：0854-47-7511

担当者：（保健推進課）課長 渡部 初枝

<飯南町・飯南町立飯南病院>

飯南町役場

住 所：〒690-3207 飯石郡飯南町頓原2064番地

T E L：0854-72-1770 F A X：0854-72-1775

担当者：（保健福祉課）課長補佐 福田 峰子

飯南町立飯南病院

住 所：〒690-3207 飯石郡飯南町頓原2060

T E L：0854-72-0221 F A X：0854-72-1333

担当者：事務長 高橋 克裕

<川本町・社会医療法人仁寿会 加藤病院>

川本町役場

住 所：〒696-8501 邑智郡川本町大字川本271-3

T E L：0855-72-0633 F A X：0855-72-0635

担当者：（健康福祉課）主査 安田 育子

社会医療法人仁寿会加藤病院

住 所：〒696-0001 邑智郡川本町川本383-1

T E L：0855-72-0640 F A X：0855-72-1608

担当者：看護部長 中平 右子

<津和野町・医療法人橘井堂 津和野共存病院>

津和野町

(医療対策課)

住 所 : 〒699-5604 鹿足郡津和野町森村口141

T E L : 0856-72-4088 F A X : 0856-72-0688

担当者 : (医療対策課) 課長補佐 清水 孝倫

(健康増進課)

住 所 : 〒699-5605 鹿足郡津和野町後田口64-6

T E L : 0856-72-0657 F A X : 0856-72-1650

担当者 : (健康福祉課) 保健師 小山 久美

医療法人橘井堂 津和野共存病院

住 所 : 〒699-5604 鹿足郡津和野町森村口141

T E L : 0856-72-0660 F A X : 0856-72-0774

担当者 : 津和野共存病院・介護老人保健施設せせらぎ・日原診療所
看介護部 部長 大庭 淳子

<隠岐の島町・隠岐広域連合立 隠岐病院>

隠岐の島町

住 所 : 〒685-8585 隠岐郡隠岐の島町下西78番地2

T E L : 08512-2-8562 F A X : 08512-2-6630

担当者 : (保健課) 課長補佐 家島 洋子

隠岐広域連合立 隠岐病院

住 所 : 〒685-0016 隠岐郡隠岐の島町城北町355

T E L : 08512-3-1770 F A X : 08512-2-6149

担当者 : 事務部総務課 島の医療人育成センター主任係長 村上 翔

<西ノ島町・隠岐広域連合立 隠岐島前病院>

西ノ島町役場

住 所 : 〒684-0303 隠岐郡西ノ島町大字美田600番地4

T E L : 08514-6-0104 F A X : 08514-6-1183

担当者 : (健康福祉課) 課長補佐 小藤 和美

隠岐広域連合立 隠岐島前病院

住 所 : 〒684-0303 隠岐郡西ノ島町大字美田2071-1

T E L : 08514-7-8211 F A X : 08514-7-8702

担当者 : 看護部長 家中 ふみ代

<益田市・益田地域医療センター-医師会病院>

益田市役所

住 所 : 〒698-0024 益田市駅前町17番1号 益田市立保健センター

T E L : 0856-31-0214 F A X : 0856-23-7134

担当者 : 福祉環境部健康増進課 課長 吉田 眞由美

福祉環境部健康増進課 主幹 岩本 香奈子

益田地域医療センター-医師会病院

住 所 : 〒699-3676 益田市遠田町1917番地2

T E L : 0856-22-3611 F A X : 0856-22-0407

担当者 : 総務課長 山崎 るみ子

<奥出雲町・町立奥出雲病院>

奥出雲町役場

住 所 : 〒699-1511 仁多郡奥出雲町三成358-1

T E L : 0854-54-2514 F A X : 0854-54-1229

担当者 : 政策企画課企画係 課長補佐 稲岡 宏典

町立奥出雲病院

住 所 : 〒699-1511 仁多郡奥出雲町三成1622-1

T E L : 0854-54-1122 F A X : 0854-54-1280

担当者 : 看護部長 菅田 ゆかり

病院総務課 課長補佐 佐藤 俊一

2) 行政

<p><邑南町> 邑南町役場 住 所 : 〒696-0393 邑智郡邑南町淀原153-1 T E L : 0855-83-1123 F A X : 0855-83-0165 担当者 : (保健課) 主任保健師 竹内 芳騎</p>
<p><海士町> 海士町役場 住 所 : 〒684-0403 隠岐郡海士町大字海士1490 T E L : 08514-2-1822 F A X : 08514-2-0208 担当者 : (健康福祉課) 主査 木村 理恵</p>
<p><知夫村> 知夫村役場 住 所 : 〒684-0102 隠岐郡知夫村1065番地 T E L : 08514-8-2211 F A X : 08514-8-2093 担当者 : (村民福祉課) 主任主事 松本 つばさ</p>

3) 医療機関

<p><出雲市立総合医療センター> 住 所 : 〒691-0003 島根県出雲市灘分町613番地 T E L : 0853-63-5111 F A X : 0853-63-4228 担当者 : 看護部長 永瀬 里佳</p>
<p><社会福祉法人恩賜財団 島根県済生会江津総合病院> 住 所 : 〒695-8505 島根県江津市江津町 1016-37 T E L : 0855-54-0101 F A X : 0855-54-0171 担当者 : 看護部長 大崎 恵子</p>
<p><独立行政法人 国立病院機構 浜田医療センター> 住 所 : 〒697-8511 島根県浜田市浅井町 777 番地 12 T E L : 0855-25-0505 F A X : 0855-28-7070 担当者 : 副看護部長 藤津 京子</p>
<p><公立邑智病院> 住 所 : 〒696-0193 島根県邑智郡邑南町中野 3848-2 T E L : 0855-95-2111 F A X : 0855-95-2313 担当者 : 看護師長 大田 美穂子 総合調整室 吉岡 奈都子</p>

今年度は、「行政と医療施設」8フィールド、「行政」3フィールド、「医療施設」4フィールドでフィールド学習を実施しました。天候や感染症等の影響もほとんどなく、予定通りのフィールド学習に参加することができました。

学生たちは、地域医療に実際に触れ、自分自身、グループで考えることができ、充実したフィールドワークになりました。

この経験を活かし、地域医療にさらに興味を深め、今後の学修や自分のキャリアに活用してくれることを期待しています。この場を借りて、各市町村の関係者の皆さま、各医療施設の関係者の皆様、地域の住民の皆様、指導者の皆様に深く御礼申し上げます。

担当 山口扶弥・小田美紀子・澤幸子・吉松恵子

令和7年度 島根の地域医療

フィールド学習報告書

